学生による授業評価アンケート結果分析報告

大正大学　2021 春

株式会社ディーシーアイ

本書面は、授業評価アンケートの結果分析を通じて、授業改善に向けた課題形成に資するデータを提供することを目的に起草したものです。評価項目間の相関から因果関係を探り、更なる授業改善への手がかりの特定を試みるとともに、過年度との比較から推定できることにも言及しています。

目次

1. 全体概況 ・・・ 3
昨年度秋学期との比較・・・ 4
回答率の変化等・・・ 4
目的変数への寄与度・・・ 5
主要項目の科目区分別集計値分布・・・ 6
2. 領域ごとのサマリー・・・ 8
3. 項目別集計結果 ・・・ 9

参考資料１　実施率 ・・・ 19
1-1 アンケート実施率科目区分別・・・ 20
1-2 アンケート実施率（学部） 2005 年度春学期～2021 年度春学期・・・ 21

参考資料２　自由記述回答　頻出キーワード分析・・・ 23
自由記述回答 頻出キーワード分析について・・・ 24
＜集計グラフ＞
【効果点】「理解が深まった」「学ぶ意欲が高まった」と感じた点・・・ 29
全学・・・ 30
学部別・・・ 31
回答人数帯別・・・ 32
学年別・・・ 33
出現率前回比較　全学・・・ 34
出現率前回比較　学部別・・・ 35
出現率前回比較　回答人数帯別・・・ 39
出現率前回比較　学年別・・・ 42

【改善点】改善できる点・・・ 45
全学・・・ 46
学部別・・・ 47
回答人数帯別・・・ 48
学年別・・・ 49
出現率前回比較　全学・・・ 50
出現率前回比較　学部別・・・ 51
出現率前回比較　回答人数帯別・・・ 55
出現率前回比較　学年別・・・ 58

■全体概況

授業評価に際して採用した質問文と、それぞれの平均および標準偏差[1]は下表に示す通りです。無回答を除いた回答分布をもとに以下の方法で点数に換算してあります。

「5 そう思う」…5点、　「4 どちらかと言えばそう思う」…4点　「3 どちらともいえない」…3点
「2 どちらかと言えばそう思わない」…2点　「1 そう思わない」…1点

質問	質問内容		平均				標準偏差			
		年	21	20	19	18	21	20	19	18
Q1	教員は、この授業の到達目標をはっきりと示した	春	4.63	4.58	4.54	4.51	0.35	0.39	0.31	0.33
		秋		4.63	4.58	4.54		0.39	0.29	0.31
Q2	教員は、学生がその目標を達成できるよう、意欲的に取り組んだ	春	4.64	4.56	4.55	4.51	0.34	0.43	0.31	0.32
		秋		4.62	4.57	4.53		0.42	0.29	0.32
Q3	教員は、シラバスに記載された内容を適切に扱った	春	4.62	4.58	4.53	4.48	0.36	0.37	0.30	0.31
		秋		4.61	4.56	4.50		0.41	0.28	0.30
Q4	教員は、この授業の事前学修・事後学修をするよう具体的に指示した	春	4.55	4.54	4.44	4.38	0.41	0.42	0.36	0.38
		秋		4.57	4.50	4.42		0.43	0.34	0.36
Q5	教員は、学生からの質問や相談に十分に応じる姿勢を示していた	春	4.65	4.57	4.57	4.54	0.38	0.46	0.31	0.32
		秋		4.64	4.60	4.56		0.41	0.30	0.32
Q6	教材や教具は適切であり、授業理解を深める上で効果的であった	春	4.49	4.44	4.49	4.44	0.50	0.50	0.33	0.35
		秋		4.54	4.52	4.46		0.46	0.31	0.35
Q7	私は、この授業の目標を達成すべく、真剣に授業に臨んだ	春	4.57	4.53	4.42	4.36	0.34	0.34	0.31	0.31
		秋		4.56	4.45	4.38		0.35	0.30	0.32
Q8	私は、わからないことを質問したり調べたりして、その解消に努めた	春	4.40	4.31	4.23	4.14	0.39	0.41	0.36	0.37
		秋		4.39	4.26	4.18		0.43	0.37	0.38
Q9	私は、この授業の到達目標を達成できた（できる）	春	4.26	4.17	4.18	4.11	0.40	0.45	0.36	0.35
		秋		4.28	4.21	4.14		0.43	0.34	0.35
Q10	私は、この授業を受けて、気づきや新しい物の見方を得るなど、自身の成長を実感することができた	春	4.49	4.40	4.35		0.39	0.45	0.36	
		秋		4.50	4.39			0.41	0.35	
Q11	私は、この授業を受けてこの科目や関連分野が好きになった	春	4.23	4.12	4.20	4.16	0.54	0.62	0.45	0.44
		秋		4.25	4.25	4.19		0.56	0.43	0.44
Q12	私がこの授業で得たものは、今後の学修活動や人生に活きる	春	4.52	4.47	4.42	4.39	0.39	0.42	0.36	0.35
		秋		4.55	4.45	4.40		0.40	0.34	0.36
Q13	あなたのこの授業の出席率はどれくらいでしたか	春	4.88	4.89	4.55	4.54	0.24	0.20	0.29	0.26
		秋		4.85	4.49	4.45		0.26	0.29	0.30
Q14	この授業のための事前学修・事後学修に何時間取り組みましたか	春	3.31	3.35	3.06	2.90	0.66	0.65	0.57	0.59
		秋		3.38	3.14	3.00		0.71	0.63	0.64
全質問合計（Q13、Q14 を除く）		春	4.50	4.44	4.41		0.31	0.34	0.30	
		秋		4.51	4.45			0.33	0.29	

※Q10 学生の成長実感は 2019 年度に新設です。これに伴い、全質問合計も同年度からの表示としてあります。

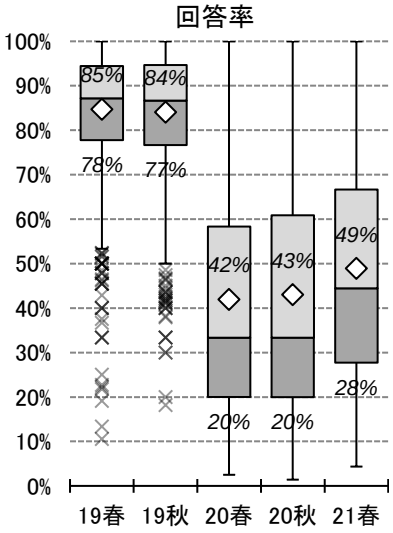
[1] 表中の数値「平均」及び「標準偏差」は、授業ごとの評価集計値を元に算出したものです。別紙集計報告書では区分毎の回答から直接計算を行っているため計算結果は一致しません。

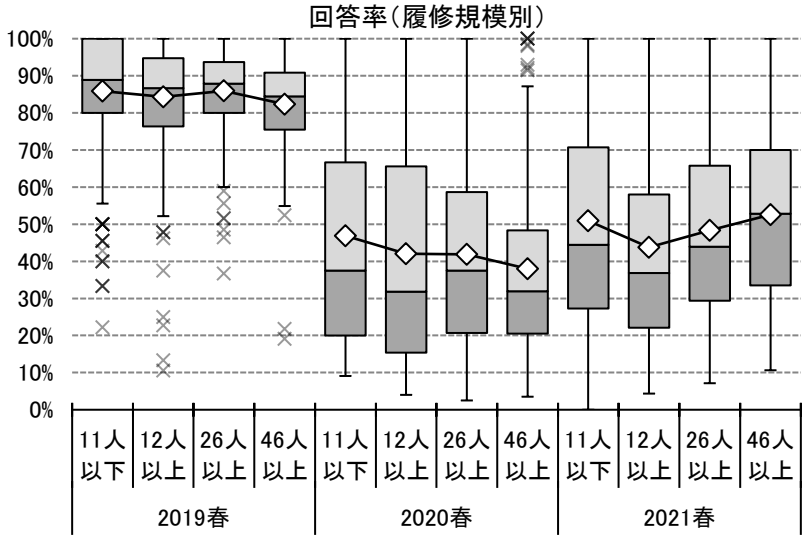
昨年同時期との比較は下表に示す通りです。大半の項目が昨年同時期を有意に上回っています。有意差がなかったQ4 事前・事後学修指示も昨年と同等以上の評価を維持しています。感染対策が必要とされる中で、興味関心の向上（Q11）や授業の到達目標の達成(Q9)、成長実感（Q10）を実現し得る指導方法を先生方が確立されてきていることを示す結果だと思います。

項目	実施	n	平均	標準偏差	前年同期比		
					実測値	t検定P値	
Q11興味関心の向上	'21春	1,278	4.226	0.541	△.101	9.6E-06	**
	'20春	1,174	4.124	0.621			
Q9目標達成	'21春	1,278	4.262	0.404	△.093	4.2E-08	**
	'20春	1,174	4.169	0.450			
Q10学生の成長実感	'21春	1,278	4.488	0.388	△.090	7.4E-08	**
	'20春	1,174	4.398	0.452			
Q8質問・調査努力	'21春	1,278	4.395	0.386	△.083	1.6E-07	**
	'20春	1,174	4.312	0.413			
Q5教員質問相談対応	'21春	1,278	4.646	0.384	△.079	2.3E-06	**
	'20春	1,174	4.567	0.461			
Q2教員努力	'21春	1,278	4.637	0.344	△.076	8.4E-07	**
	'20春	1,174	4.561	0.427			
Q1-12平均	'21春	1,278	4.504	0.308	△.064	5.8E-07	**
	'20春	1,174	4.439	0.341			
Q1教員目標明示	'21春	1,278	4.634	0.345	△.056	8.8E-05	**
	'20春	1,174	4.578	0.390			
Q6教材・教具効果	'21春	1,278	4.494	0.505	△.051	0.00637	**
	'20春	1,171	4.444	0.500			
Q12有用性	'21春	1,278	4.518	0.386	△.046	0.00274	**
	'20春	1,174	4.472	0.425			
Q7授業に臨む姿勢	'21春	1,278	4.574	0.335	△.044	0.00076	**
	'20春	1,174	4.530	0.345			
Q3教員シラバス対応	'21春	1,278	4.617	0.365	△.037	0.00637	**
	'20春	1,174	4.580	0.371			
Q4事前・事後学修指示	'21春	1,278	4.552	0.415	△.016	0.17367	
	'20春	1,174	4.536	0.420			
Q13出席率	'21春	1,278	4.876	0.237	▼.014	0.05600	!
	'20春	1,174	4.890	0.202			
Q14平均学修時間	'21春	1,278	3.313	0.660	▼.040	0.06506	!
	'20春	1,174	3.353	0.646			

Q13 出席率、Q14 平均学修時間は、昨年同時期からの低下に「有意傾向（t 検定片側 P 値＜0.1)」が見られます。昨年度が高過ぎただけなのか、授業形態におけるオンライン／遠隔と対面の比率の変化によるものなのか、データだけでは定かではありません。Q13 出席率ではオンラインなら、回線をつなぐだけで「出席」になるため、対面が混ざれば出席できない日も増えます。ただし、平均値は 4.9 に迫り、高止まりにおける誤差と見るのが妥当かと存じます。Q14 平均学修時間でも、対面で授業が行われている場合、先生が説明してくれるなど教室内で片付いていたことも、オンラインでは自ら努力して解決しなければならない場面が生じ、相応の時間を投じることになるため、対面授業の割合が高いほど学修時間が減少するのは十分に考えられます。教室での授業を「対面でしかできない学習活動」に割り当て、学生が個々に取り組むことを明確にすることで、伸長傾向にあった事前・事後学修を再び減らさないようにしたいところです。

前回の分析でご報告した「回答率」については、昨年春学期の平均 42%に対し、今期は 49%と、一定の改善が見られます。しかしながら、回答率 5 割に満たない授業が半数に達する状況では、「より良い授業の実現に向けた改善課題の特定」に心許なさも残ります。回答率には一層の向上が必要とお考え下さい。箱の上端を超えるところに位置する授業を担当された先生方が、学生にどう働きかけて回答率を高めたか探り、学内の知見とすべきと思います。なお、履修者人数による違い（下右図：直近 3 ヵ年の春学期の履修人数における四分位数で集計を分けました）を見ると、26 人以上、46 人以上の学生が履修する授業で、回答率の平均に昨年春学期との有意な差［上昇］が見られました。11 人以下、12 人以上の両区分では有意差なしです。比較的規模が大きい授業で提出率が高くなっているのは、コロナ前も含めて、これまでに見られなかった新たな傾向です。





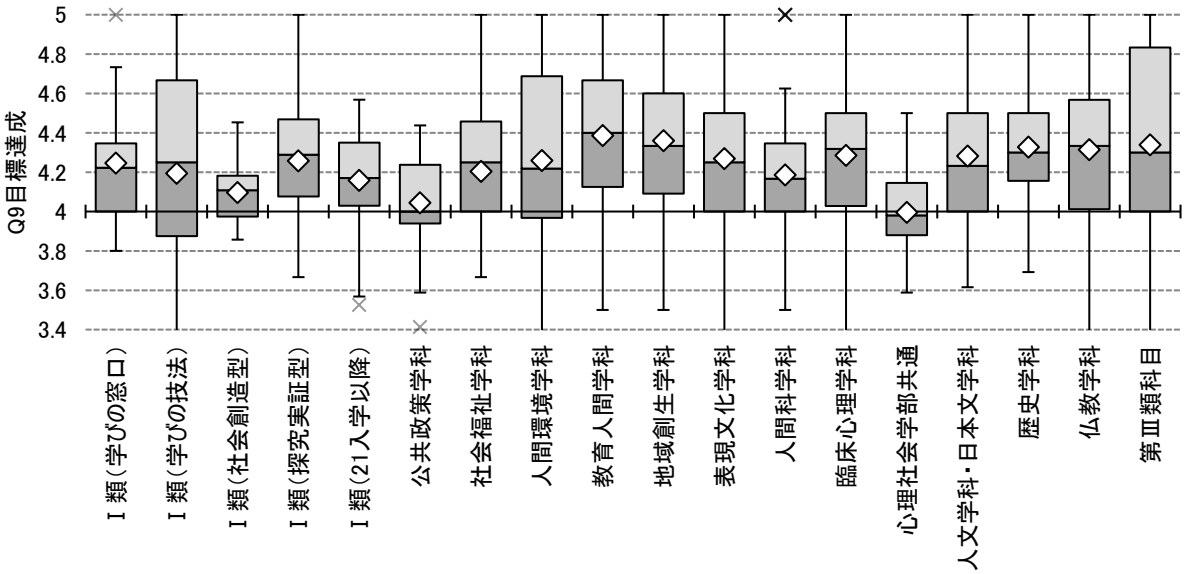
直近 3 回のデータで、回答率への寄与度を調べてみると、決して強い相関ではありませんが、Q5 教員質問相談と Q3 教員シラバス対応の 2 項目で偏回帰係数（説明変数は Q1～Q6）に有意性が確認できます。日々の授業の中で、学生の声に耳を傾け真摯に対応していれば、学生側も「授業評価アンケート」という形で声を求められたときにはしっかり応えようとの気持ちにもなるでしょうし、逆もまた然りではないでしょうか。また、先生方がシラバスに記載されたことを守っていないと学生が感じることが度々あれば、アンケートに答えるというプラスアルファのタスクに前向きな気持ちで取り組んでくれないこともあり得るように思います。

回答率を高く保つには、提出管理を厳密にする方法もありますが、アンケートに回答する意欲が低いまま「答えてください」と依頼を繰り返しても、あまり効果はなさそうです。上記 2 項目に改善の余地を残さないようにすることに加えて、授業評価アンケートに寄せられた声に、直接・間接にしっかりと応えること（集計結果を踏まえた、今後の改善に向けた意思や方針を学生にもしっかり伝えることや、［ことさら言葉にせずとも］着実に改善課題の解消を図っていくこと）で先生方もアンケートの結果に向き合っていることを学生に知らしめ、真剣に回答することが双方にメリットをもたらすことだと認識してもらうことが肝要ではなかろうかと存じます。

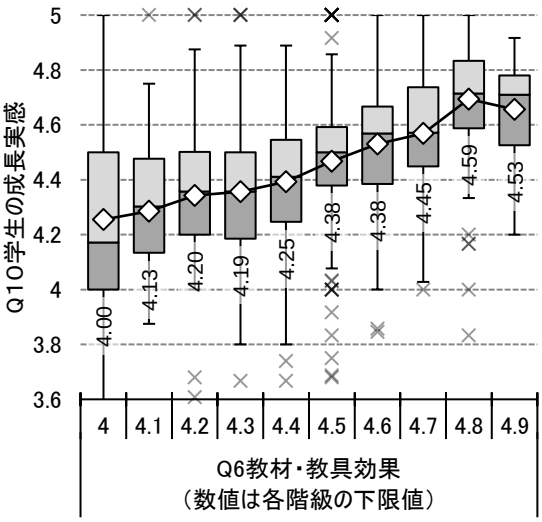
Q9 目標達成、Q10 学生の成長実感、Q11 興味関心の向上の各項目を目的変数に、先生方の直接的なコントロールが比較的容易と考えられる Q1～Q6 の各項目を説明変数にした重回帰分析の結果は下表の通りです。プラスの有意な偏回帰係数が確認されたセルに網掛を施し、目的変数ごとに最も大きな偏回帰係数が観測された説明変数に★を付しました。重回帰分析の決定係数はいずれもあまり大きな値ではありません。昨年春学期よりもさらに小さくなっています。Q1～Q6 で尋ねたこと以外からの影響が大きくなっているということです。データで検証するすべがなく、あくまでも仮説に過ぎませんが、学生間の気づきの交換／思考を深化する場である「対話的な学び」をどこまで充実できたかどうかで、Q9～Q11 の各項目に差が生じた可能性もありそうです。

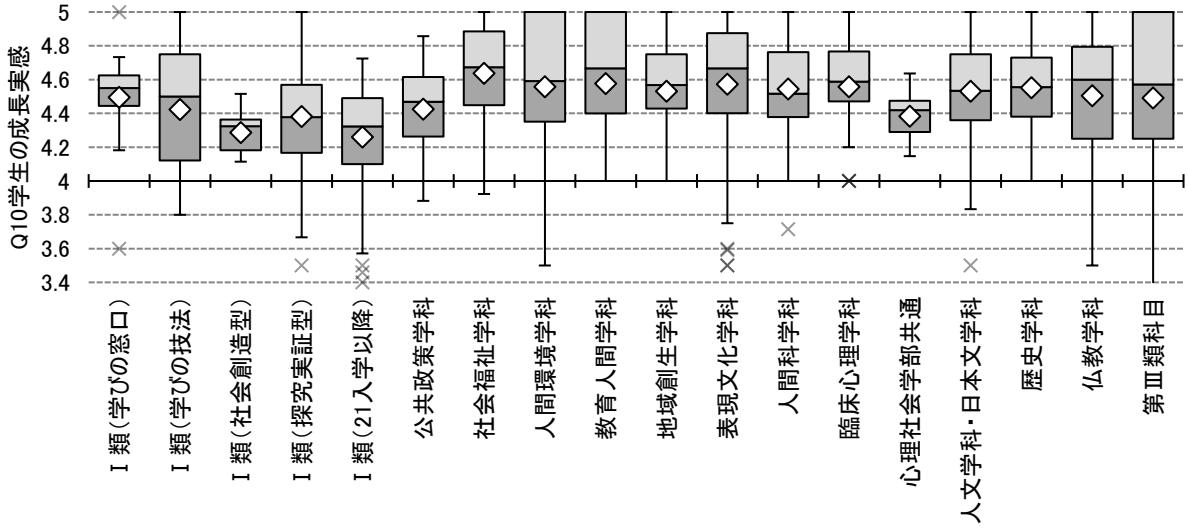
目的変数	Q9 目標達成		Q10 学生の成長実感		Q11 興味関心の向上	
説明変数	観測値	有意性P値	観測値	有意性P値	観測値	有意性P値
Q1 教員目標明示	★ 0.212	0.0000 **	0.166	0.0000 **	0.225	0.0001 **
Q2 教員努力	0.059	0.2864	0.178	0.0001 **	★ 0.356	0.0000 **
Q3 教員シラバス対応	0.086	0.0405 *	−0.095	0.0059 **	−0.089	0.0800
Q4 事前・事後学修指示	0.132	0.0000 **	0.115	0.0000 **	0.058	0.1417
Q5 教員質問相談対応	0.080	0.0549	0.171	0.0000 **	0.230	0.0000 **
Q6 教材・教具効果	0.096	0.0003 **	★ 0.225	0.0000 **	0.235	0.0000 **
定数項	1.203	0.0000 **	1.005	0.0000 **	−0.442	0.0115 *
決定係数（修正 R^2）	0.279（20 春 0.329）		0.465（20 春 0.517）		0.404（20 春 0.437）	

Q9 目標達成を目的変数とした場合、Q1～Q6 の各項目だけを説明変数とする場合、決定係数は 0.279（重相関係数は 0.528）と小さな値に止まりますが、Q1 教員目標明示が一定の影響を与えているのは間違いなさそうです。目標が明確にされていなければ、学生は自らの目標達成を検証できませんし、先生方の側でも目標の達成可能性を高めるのに必要な事柄を特定できず、結果的に効果的な策を講じることができなくなるはずです。なお、科目区分ごとの集計値分布（n<5 の区分は非表示）は下図の通りです。担当授業の相対的な位置のご確認にお役立て下さい。

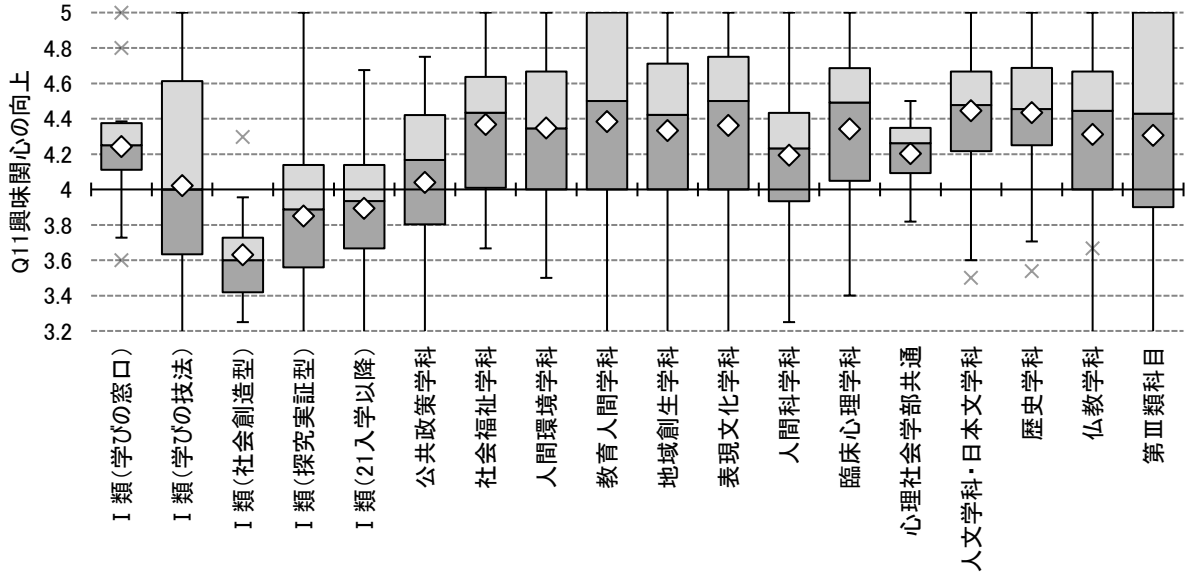


Q10 学生の成長実感では、Q6 教材・教具効果からの影響が最も大きいようです。「授業理解を深めさせる効果的な教材・教具の使用（Q6)」は、学生に「気づきや新しいものの見方（Q10)」を与えるのに一定の役割を担うということですが、右図の通り、前者が同程度でも、後者の分布は広めです。各階級の箱の下端に届かない授業では、教材や教具の適切な使用で授業内容を理解させた後に展開すべき、「学生が気づきや新たな見方を獲得するための学習活動／機会作り」に改善の余地がありそうです。





Q11 興味関心の向上では、前回と同様に、Q2 教員努力が最も大きな偏回帰係数を示しています。後者は具体的な指導技術とは違うところでの評価であり、直接的対策が講じにくい項目ですが、改善が遅れると、先の学びへの学生の興味・関心を弱めてしまうリスクを招きそうです。



「教員による授業への取り組み」（Q1、Q2、Q3、Q4、Q5、Q6）

いずれの項目も昨年同時期と同等以上の評価を得ています。昨年の春学期に大きく低下した Q6 教材・教具効果も、中央値などでコロナ前の 2019 年を超える値です。どの項目も後掲の通り、改善が遅れた授業は着実に減りつつあります。新しい生活様式の中での授業の在り方に確固たるスタイルが出来上がってきたものと拝察します。6 項目の中で、箱の下端が 4.4 ポイントに達していないのは、Q4 事前・事後学修指示と Q6 教材・教具効果の 2 つだけです。いずれも「どう教えるか」だけではなく「どう学ばせるか」にもしっかり視点を置かないと、改善の方向を見失うリスクがあるのではないでしょうか。

「学生による取り組みと成果」（Q7、Q8、Q9）

Q7～Q9 の各項目とも過年度の春学期を上回る評価を得ています。2019 年度と比較した場合、Q7 授業に臨む姿勢と Q8 質問・調査努力の伸びは特に顕著です。リモートで学ぶ中、自力で何とかしなければならない場の経験を重ねて、必要な姿勢と方策を獲得できた学生も多いと思われます。Q9 目標達成は平均値が大きく伸びましたが、箱の下端（後掲参照）の動きは鈍く、高相関で結ばれる Q7、Q8 と異なる動きです。改善が遅れた授業では学生の自助努力が及ばないところに存在する「目標達成を妨げる要素」を特定し、解消する必要があります。

「授業に対する満足度（学びの成果）」（Q10、Q11、Q12）

各項目ともに昨年春学期を超える評価です。昨年は大きく落ち込んだ Q11 興味関心の向上も、中央値は一昨年（2019 年度）の春学期と同じ水準まで戻し、箱の上端も春学期として、これまでで最も高いところにあります。ただし、Q10 学生の成長実感と Q12 有用性に比べると Q11 は箱の下端が 4.0 ポイントに届かない（他の 2 項目は 4.3 前後）など、相対的に低めの評価に止まり、授業間の差も大きめに残っています。他項目が十分に高い評価を得ながら、Q11 だけ伸びない場合、授業を通じて得た知識や理解で解決すべき「自分事として向き合える課題」を与える／見つけさせるなどの仕掛けが必要かと思われます。

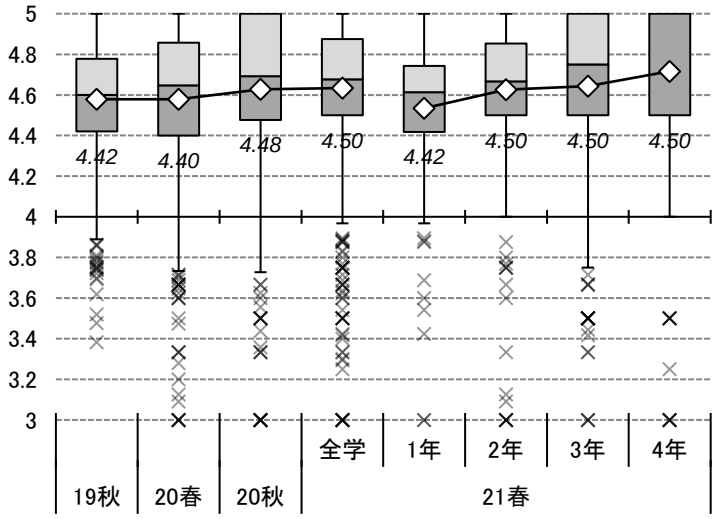
「出席率、平均学修時間」（Q13、Q14）

前掲（p.4）の表に見る通り、Q13 出席率はすでに高止まりの様相です。コロナ以前と比べて集計値分布はかなり高いところに集中しており、現状にこれ以上の改善は難しそうです。一方、Q14 平均学修時間は昨年春学期を平均値でわずかながら下回りました。第 1 四分位数（箱の下端）も 3.0（31 分～60 分）に届きません。事前・事後の学修時間が伸びていない授業では、授業時間内に学生が取り組む学習活動と、学生が教室／モニタの前を離れて個々の学修活動で取り組むべきことの切り分けをはっきりさせた上で、後者のタスクをきちんと明示することと、それをこなせるだけのレディネスを予め整えさせることが肝要と考えます。

■項目別集計結果分析

各項目に表示した図表は、授業別集計の分布を直近 4 回分の追跡、および当期の学年別で表示した四分位図と、他項目との単相関・偏相関の一覧です。四分位図において「箱」の直下に表示した数字は第 1 四分位数です。これを下回っている場合、キャッチアップが急務とお考え下さい。箱ひげ図の右側に配した相関係数の一覧では、単相関と偏相関の双方について、各々の相関行列で上位 25%に含まれるケースに網掛を施してあります。因果の方向や第三要素の介在など考慮しなければならないこともありますが、基本的には、高い偏相関で結ばれる項目は、それぞれ別個に改善策を講じるよりも、セットで改善を考えた方がうまく運ぶケースが多いはずです。

Q1　教員は、この授業の到達目標をはっきりと示した



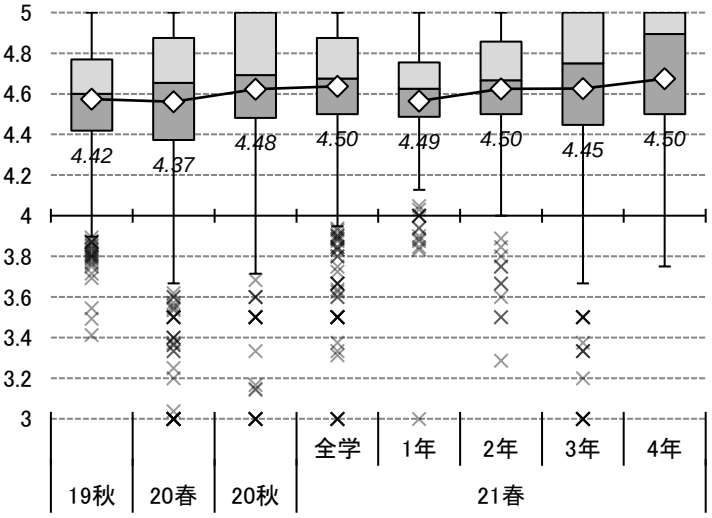
	単相関	偏相関
Q1教員目標明示		
Q2教員努力	0.692	0.356
Q3教員シラバス対応	0.584	0.207
Q4事前・事後学修指示	0.519	0.150
Q5教員質問相談対応	0.522	0.043
Q6教材・教具効果	0.563	0.079
Q7授業に臨む姿勢	0.416	0.033
Q8質問・調査努力	0.326	−0.018
Q9目標達成	0.393	0.039
Q10学生の成長実感	0.442	0.039
Q11興味関心の向上	0.403	−0.011
Q12有用性	0.443	0.048
Q13出席率	0.045	−0.009
Q14平均学修時間	0.147	0.024

昨年同時期と比べて、中央値はほぼ同じですが、箱の下端は 0.1 ポイントも上昇しており、4.0 ポイント未満の授業がほぼすべて「外れ値」となるほど、大学全体での評価が改善しています。相関の出方はこれまでと大きく異なるところはなく、Q2 教員努力との強い相関も変わりません。明確な目標を示せば、その達成に向けた先生方の努力にも自ずと拍車がかかるでしょうし、その姿勢は学生により良く伝わるのだと思います。目指すところを共有しておくことは、個々の指導に込めた意図を学生が正しく理解するための前提でもあります。前回の報告でもお伝えしたことですが、Q9 目標達成との相関は一見すると弱いものに見えますが、Q9 目標達成で「5.そう思う」を選んだ学生の約 9 割が、Q1 教員目標明示で「5.そう思う」を選んでいます。目標の明示は、到達目標達成の十分条件ではありませんが、必要条件の一つであるのは間違いないと思います。

Q2　教員は、学生がその目標を達成できるよう、意欲的に取り組んだ

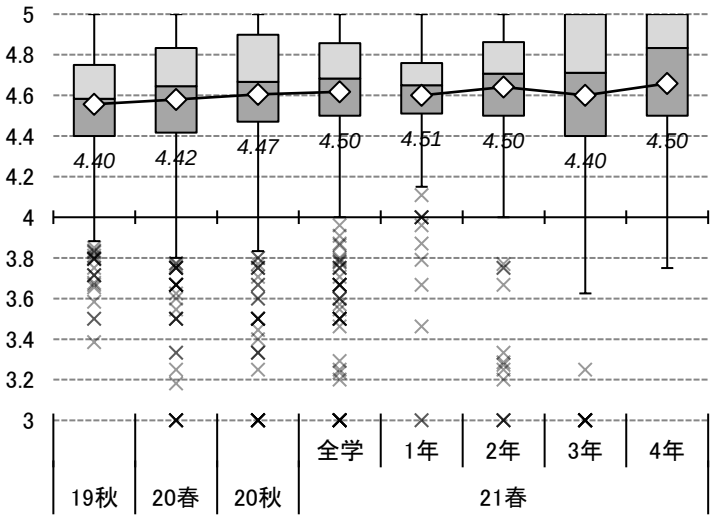
強い相関で結ばれている Q1 と同様に、昨年の春学期との比較では箱の下端の上昇が顕著です。授業間の差異は、昨年度までと比べてかなり小さくなりました。先生方の内なる意欲は学生が直接見て取れるものではありませんので、改善が遅れた授業でキャッチアップを図るには、高相関

で結ばれる項目の改善を先行させ、「行動」の中に意欲を読み取ってもらうしか方法はないと思われます。単相関で 0.6 を超えている、Q1 教員目標明示、Q5 教員質問相談対応、Q6 教材・教具効果の 3 項目を説明変数、Q2 教員努力を目的変数とする重回帰分析を行ってみたところ、決定係数（修正 R^2）は 0.742（前回の同じ解析結果は 0.637）とかなり大きな値を示しており、これら 3 項目で着実に改善を積み重ねれば、Q2 教員努力もかなり高い確率で改善に向かうことが期待できます。



	単相関	偏相関
Q1教員目標明示	0.692	0.356
Q2教員努力		
Q3教員シラバス対応	0.587	0.154
Q4事前・事後学修指示	0.520	0.097
Q5教員質問相談対応	0.611	0.225
Q6教材・教具効果	0.634	0.196
Q7授業に臨む姿勢	0.433	0.028
Q8質問・調査努力	0.341	−0.004
Q9目標達成	0.398	−0.010
Q10学生の成長実感	0.467	0.029
Q11興味関心の向上	0.451	0.056
Q12有用性	0.471	0.040
Q13出席率	0.047	−0.004
Q14平均学修時間	0.125	−0.024

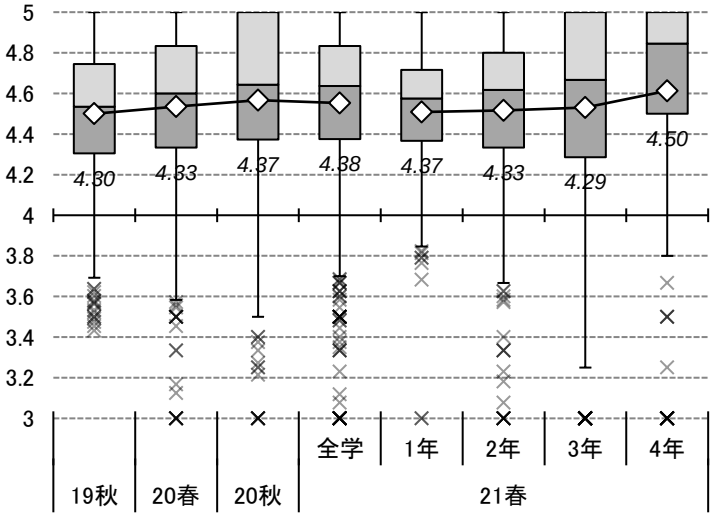
Q3　教員は、シラバスに記載された内容を適切に扱った



	単相関	偏相関
Q1教員目標明示	0.584	0.207
Q2教員努力	0.587	0.154
Q3教員シラバス対応		
Q4事前・事後学修指示	0.480	0.143
Q5教員質問相談対応	0.489	0.076
Q6教材・教具効果	0.530	0.120
Q7授業に臨む姿勢	0.378	0.030
Q8質問・調査努力	0.297	−0.001
Q9目標達成	0.354	0.032
Q10学生の成長実感	0.394	0.030
Q11興味関心の向上	0.348	−0.037
Q12有用性	0.398	0.042
Q13出席率	0.044	0.000
Q14平均学修時間	0.100	−0.038

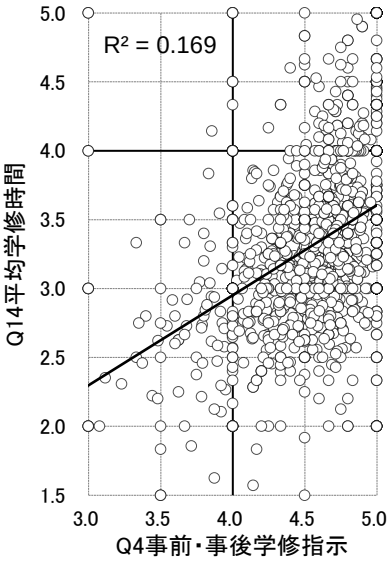
小幅ながらも改善が着実に積み上げられてきています。他項目との相関の出方には前回までと大きな違いはありません。この項目で 4.0 ポイントに届かない授業は、全学で 3.8%（昨年春学期は 4.5%）に過ぎません。シラバスに書かれたことからの逸脱は、学生の目には「約束違反」にも映りかねず、信頼関係を損ねる遠因にもなり得ますので、改善が遅れた授業のキャッチアップは急務とお考えいただく必要があろうかと存じます。シラバスを起草する段階で、授業計画を綿密に練り上げておくのが肝要であるのは言うまでもありませんが、環境の変化（コロナの感染拡大など）に備えて修正の余地を残した計画にすることも大切です。変更を余儀なくされた場合には学生が余裕をもって対応できるよう、告知に遅れが生じないよう気を付けたいところです。

Q4　教員は、この授業の事前学修・事後学修をするよう具体的に指示した



	単相関	偏相関
Q1教員目標明示	0.519	0.150
Q2教員努力	0.520	0.097
Q3教員シラバス対応	0.480	0.143
Q4事前・事後学修指示		
Q5教員質問相談対応	0.473	0.132
Q6教材・教具効果	0.473	0.085
Q7授業に臨む姿勢	0.360	0.027
Q8質問・調査努力	0.328	0.066
Q9目標達成	0.324	0.002
Q10学生の成長実感	0.349	0.003
Q11興味関心の向上	0.314	−0.031
Q12有用性	0.344	−0.002
Q13出席率	0.032	−0.019
Q14平均学修時間	0.229	0.156

昨年春学期との比較では授業別集計の平均に「有意差なし」という結果ですが、箱の下端はわずかながらも上昇しました。但し、4.0 ポイントに届かない授業は 6.7%と、昨年春学期（6.0%）より増えています。相関行列に見る通り、Q14 平均学修時間との間には比較的強固な偏相関係数が観測されており、具体的な指示なしには、十分な学修時間を確保させるのに支障が生じると思われます。両者の関係を右図で確認してみると、Q14 平均学修時間が 4.0 ポイント（61～120 分）に達している授業はそのほとんどが｛Q4 事前・事後学修指示≧4.5｝の評価を得ています。この水準（Q4≧4.5）に達していても Q14 平均学修時間が 3.0（31～60 分）に届いていない授業も散見されます。



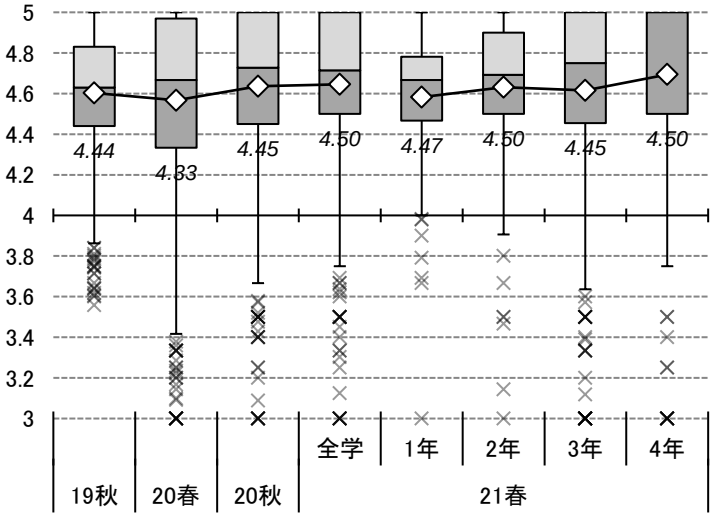
近似線から下方に大きく離れているのは、「指示している学習内容が量的に少ない」か「指示した内容をこなせるだけのレディネスが整っていない」のいずれかを原因とする可能性が高いと思います。リモートで他者の支援を求められない場面では、後者が問題となるケースが多いはずです。

右表（データは昨年と今年の春学期を合算）に見る通り、Q4 と Q8 の相関は学年が上がるごとに強くなります。具体的なタスクが与えられたとき、上級生ほど既に獲得している学習方策を発揮・駆使して自ら不明を解消する行動に出られるということだと思います。逆を言えば、初学者ほど「より丁寧なガイド」を必要としているということです。Q4 と Q14 の相関が 3 年まで上昇するのも同じ理由と思われます。3 年で相関が頭打ちになっているのは、4 年は学習方策も既に十分に獲得しており、履修科目が専門分野に絞られ目的意識も高く、先生方からの細かな指示がなくても自律的に学びに向かえるということかもしれません。

相関係数（×Q4）		単相関
Q8 質問・調査努力	1 年	0.291
	2 年	0.321
	3 年	0.388
	4 年	0.401
Q14 平均学修時間	1 年	0.183
	2 年	0.236
	3 年	0.261
	4 年	0.257

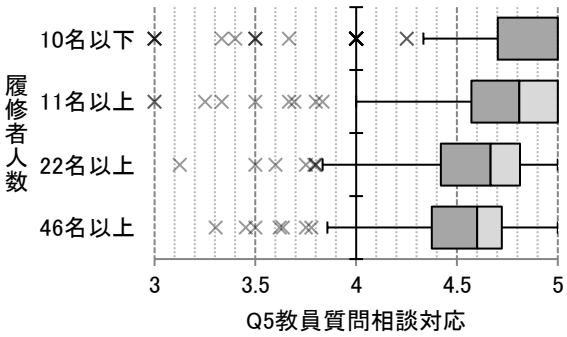
事前・事後の学修では、やるべきことをひとつずつ具体的にリストアップして伝えることや、効率的に進めるポイントなどを示すことも重要かもしれませんが、それだけでは「言われたことをこなすだけしかできない状態」に学生を留め置いてしまう可能性もあります。初期段階では、「丁寧なガイダンス」に注力しつつも、指示を少しずつ的確にこなせるようになってきた段階では事前・事後の学修を通して答えを作るべき問い／解決すべき課題を提示し、取り組み方は学生に考えさせるよう段階的にシフトすることで、主体的に自らの学びをデザインできる（＝メタ認知や適応的学習力を備えた）学生に育てていくことも肝要かと存じます。

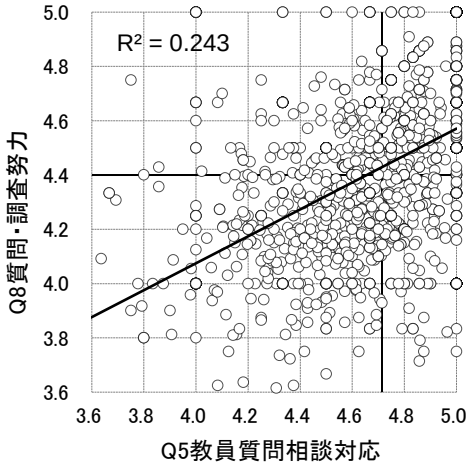
Q5　教員は、学生からの質問や相談に十分に応じる姿勢を示していた



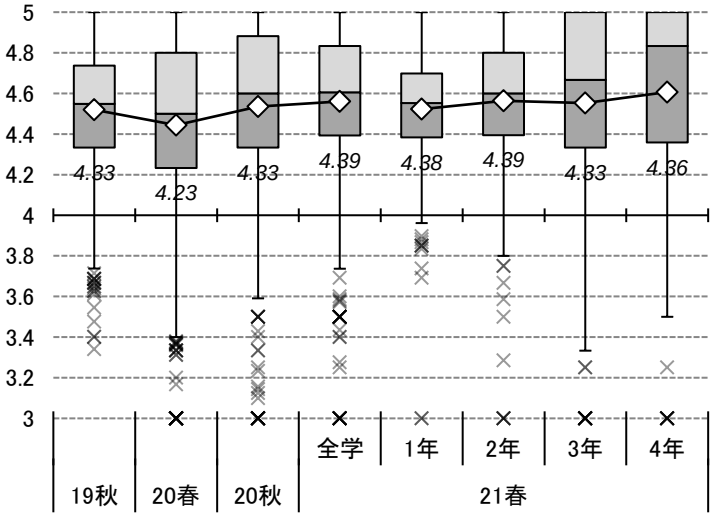
	単相関	偏相関
Q1教員目標明示	0.522	0.043
Q2教員努力	0.611	0.225
Q3教員シラバス対応	0.489	0.076
Q4事前・事後学修指示	0.473	0.132
Q5教員質問相談対応		
Q6教材・教具効果	0.585	0.219
Q7授業に臨む姿勢	0.389	0.029
Q8質問・調査努力	0.319	0.027
Q9目標達成	0.351	−0.008
Q10学生の成長実感	0.408	0.018
Q11興味関心の向上	0.396	0.024
Q12有用性	0.414	0.036
Q13出席率	0.045	0.002
Q14平均学修時間	0.106	−0.029

昨年春学期は箱の下端が大きく下がりましたが、今期はこれまでで最も高い評価を得ました。4.0 ポイントに届かない授業も 3.8%と昨年度（春学期 8.4%、秋学期 5.1%）より減りました。箱の上端は前回から 5.0 に張り付き、4 分の 1 の授業が「満点評価」です。学生が質問や相談したいと思ったときの対応は、大半の授業で十分な水準にあると言えそうです。右上図に見る通り、比較的大人数の授業でも中央値は 4.6 に達しています。一方、右図（縦軸、横軸それぞれの中央値で座表面を分割）の通り、Q5 教員質問相談対応と、学生側の行動である Q8 質問・調査努力の相関はかなり曖昧です。Q5 教員質問相談対応が優位な（＝近似線より下方に位置する）授業では、学生側での「わからないことを質問したり、調べたりして、その解消に努める姿勢（Q8）」を育むことにも力を入れたご指導が期待されるところです。





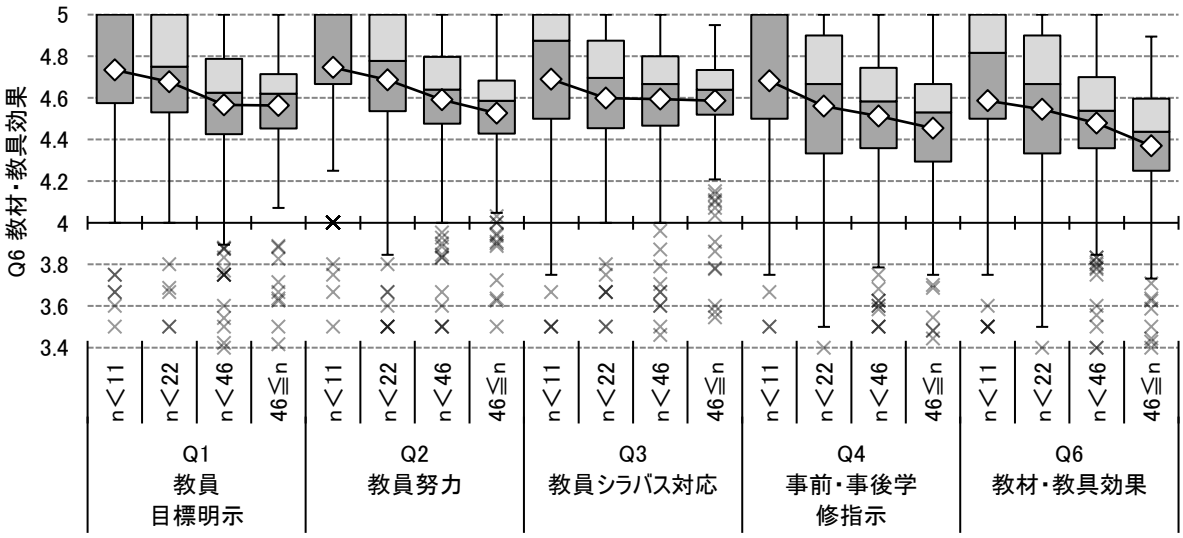
Q6　教材や教具は適切であり、授業理解を深める上で効果的であった



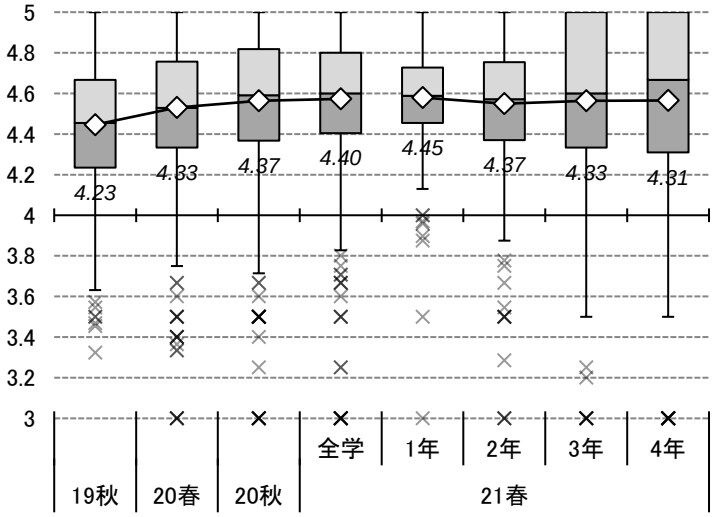
	単相関	偏相関
Q1教員目標明示	0.563	0.079
Q2教員努力	0.634	0.196
Q3教員シラバス対応	0.530	0.120
Q4事前・事後学修指示	0.473	0.085
Q5教員質問相談対応	0.585	0.219
Q6教材・教具効果		
Q7授業に臨む姿勢	0.448	0.068
Q8質問・調査努力	0.349	−0.008
Q9目標達成	0.416	0.019
Q10学生の成長実感	0.480	0.042
Q11興味関心の向上	0.484	0.111
Q12有用性	0.485	0.072
Q13出席率	0.040	−0.028
Q14平均学修時間	0.114	−0.038

これまでで最も高い評価となりました。箱の下端は昨年春学期より 0.16 ポイントも高くなっており、4.0 ポイント未満の授業も 11.7%から 5.2%に半減しました。前述の通り、先生方の直接的なコントロールが可能な項目の中では、Q9〜Q11 への寄与度が最も大きく、箱の下端に届いていない場合は、自由記述意見も参考にキャッチアップを急ぎましょう。Q5 教員質問相談対応との間に強い相関がみられることにも以前との違いはありません。相談や質問を受けることにより学生の躓きやすいところを把握すれば、そこに注力した指導もできますし、伝わっていないことの所在を知れば、伝え方（≒教材・教具の使い方）の工夫も生まれ、学生の理解も向上するはずです。

なお、前回の分析では、Q4 事前・事後学修指示とともに、履修人数の多い授業での評価が低くなっていることをお伝えしました。今回の集計ではそうした傾向は弱まっていますが、まだ人数による不利も多少は残っているようです。大人数になるほど、観察や対話で学生の理解を個々に把握するのが難しい分、伝え方に改善課題があってもそれを検知するのが遅れがちになります。大教室ほど、意識的に理解の把握／学生の観察に注力しましょう。提出物の精査などの「間接的な観察」や、ＩＣＴを使った授業内のミニテスト／クイズなども積極的に活用したいところです。



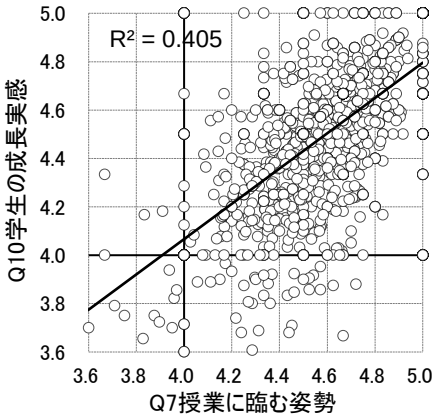
Q7　私は、この授業の目標を達成すべく、真剣に授業に臨んだ



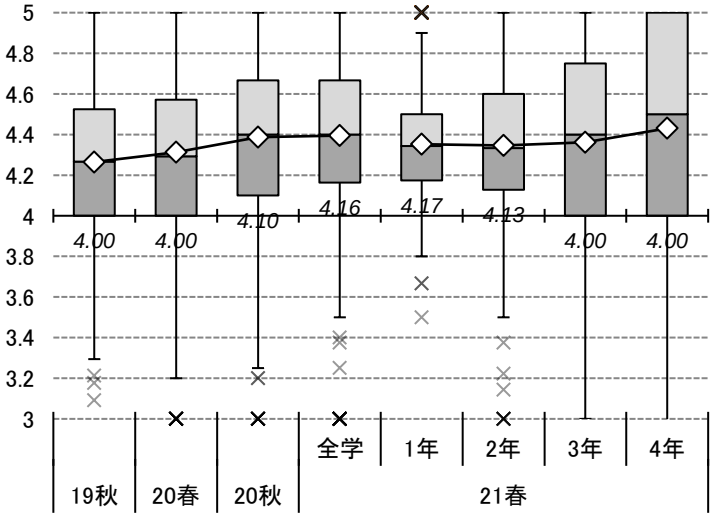
	単相関	偏相関
Q1教員目標明示	0.416	0.033
Q2教員努力	0.433	0.028
Q3教員シラバス対応	0.378	0.030
Q4事前・事後学修指示	0.360	0.027
Q5教員質問相談対応	0.389	0.029
Q6教材・教具効果	0.448	0.068
Q7授業に臨む姿勢		
Q8質問・調査努力	0.566	0.263
Q9目標達成	0.607	0.278
Q10学生の成長実感	0.516	0.071
Q11興味関心の向上	0.481	0.034
Q12有用性	0.475	0.071
Q13出席率	0.162	0.108
Q14平均学修時間	0.209	0.039

昨年の春学期をわずかながら上回る結果です。他項目との相関の出方には顕著な変化はありません。Q14 平均学修時間との相関は弱く、「真剣に授業に臨んだ」と「十分な時間を掛けて事前・事後学修に努めた」とは別のことと学生が認識している可能性は今回も否定できません。前回の分析でも書きましたが、適正な負荷とハードルを与えないことには、「このくらいで十分／真剣に取り組んだことになる」との認識を持たせてしまいます。

Q10 学生の成長実感との相関係数（特に偏相関）があまり大きな値ではないのも、改めて考えると不可解です。授業に限らず、何かに真剣に取り組めば、そこには気づきや新しいものの見方、自分の成長などがあって然るべきです。右図で近似線から下方に大きく離れた授業では、「授業内容の理解」に加え、「自ら疑問を持ち、その答えを見つけること」にも目的を持たせる働きかけが必要と思われます。

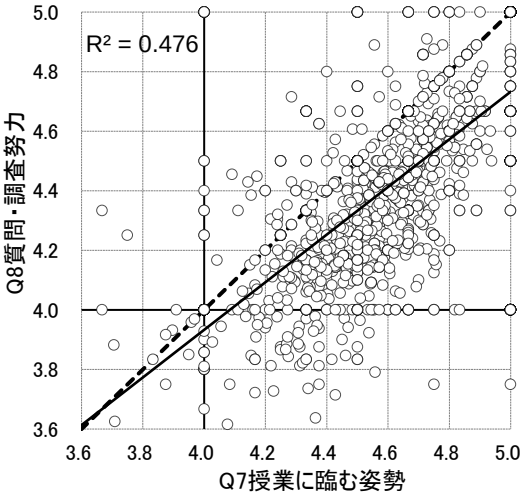


Q8　私は、わからないことを質問したり調べたりして、その解消に努めた

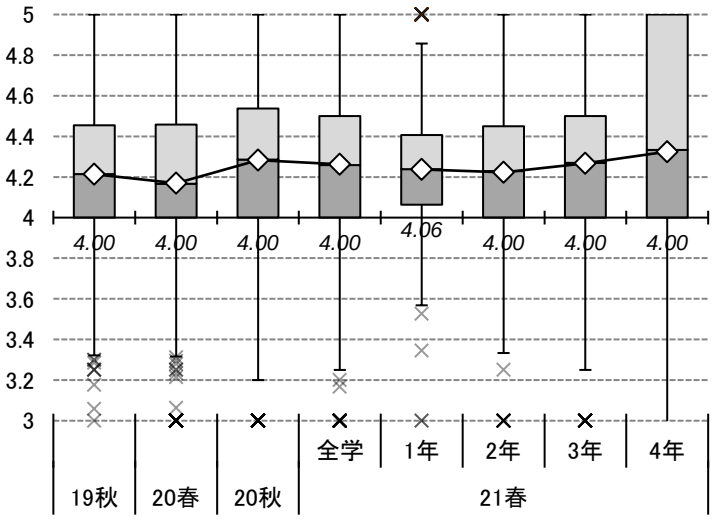


	単相関	偏相関
Q1教員目標明示	0.326	−0.018
Q2教員努力	0.341	−0.004
Q3教員シラバス対応	0.297	−0.001
Q4事前・事後学修指示	0.328	0.066
Q5教員質問相談対応	0.319	0.027
Q6教材・教具効果	0.349	−0.008
Q7授業に臨む姿勢	0.566	0.263
Q8質問・調査努力		
Q9目標達成	0.558	0.246
Q10学生の成長実感	0.454	0.051
Q11興味関心の向上	0.430	0.044
Q12有用性	0.410	0.047
Q13出席率	0.099	0.000
Q14平均学修時間	0.267	0.149

昨年春学期を有意に上回っており、箱の下端は連続して上昇しています。前述（p. 11）の通り、Q4 事前・事後学修指示との相関が上の学年ほど強固になるのは、付与した課題やタスクへの取り組み方やそこで必要な各種スキルを学生が徐々に身につけていくためと考えられます。1 年、2 年を対象とする授業では、学生が獲得している学習方策などをしっかりと見極めた上で、課題を選択したり、指示／ガイドの与え方を工夫したりする必要があります。なお、Q7 授業に臨む姿勢との相関でも、右図の通り、Q8 質問・調査努力が Q7 より大きな値に達している（グラフ中の破線の上側に位置）授業は例外的と言えるほど少数です。近似線から下方に大きく離れた授業では、自ら不明解消に努めることなく「授業に真剣に臨んだ」との認識を持っている学生が相対的に多数を占めていますので、学生の認識を改めさせていく必要があろうかと思います。授業ごとに、そこで学んだことをもとに考えれば答えを導ける問いを用意し、個々に／協働で答えを作り上げることを求める中で、不明の所在に気づかせ、その解消に向けた行動を取らせていくことで残差の縮小が図れると思います。



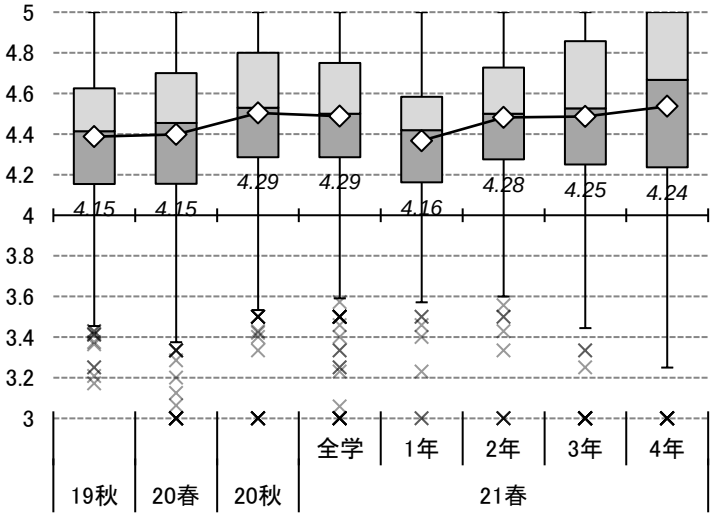
Q9　私は、この授業の到達目標を達成できた（できる）



	単相関	偏相関
Q1教員目標明示	0.393	0.039
Q2教員努力	0.398	−0.010
Q3教員シラバス対応	0.354	0.032
Q4事前・事後学修指示	0.324	0.002
Q5教員質問相談対応	0.351	−0.008
Q6教材・教具効果	0.416	0.019
Q7授業に臨む姿勢	0.607	0.278
Q8質問・調査努力	0.558	0.246
Q9目標達成		
Q10学生の成長実感	0.558	0.167
Q11興味関心の向上	0.537	0.165
Q12有用性	0.465	0.000
Q13出席率	0.119	0.027
Q14平均学修時間	0.182	−0.010

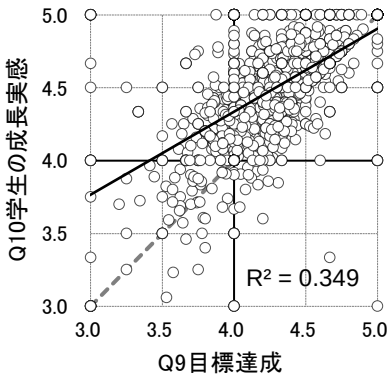
昨年の春学期から平均値が大きく上昇しています。先生方の直接的なコントロールが効きやすい Q1～Q6 からの影響は、前述（p. 6）の通り、さほど強いものではなく、重回帰分析の決定係数も 0. 3 を下回っています。さらなる改善を図るには、高相関で結ばれている Q7 授業に臨む姿勢、Q8 質問・調査努力を引き上げるべく、学生が「自分事」として認識できる課題をしっかりと設定することを起点にするしかなさそうです。また、どの項目との間でもコロナ以前と比べて相関が弱くなっています。教室での対面では実現できていたのに、リモート環境では十分に整えられなかった活動（学生同士の対話や先生との問答）に新たなボトルネックが生じていると思われます。

Q10 私は、この授業を受けて、気づきや新しい物の見方を得るなど、自身の成長を実感することができた

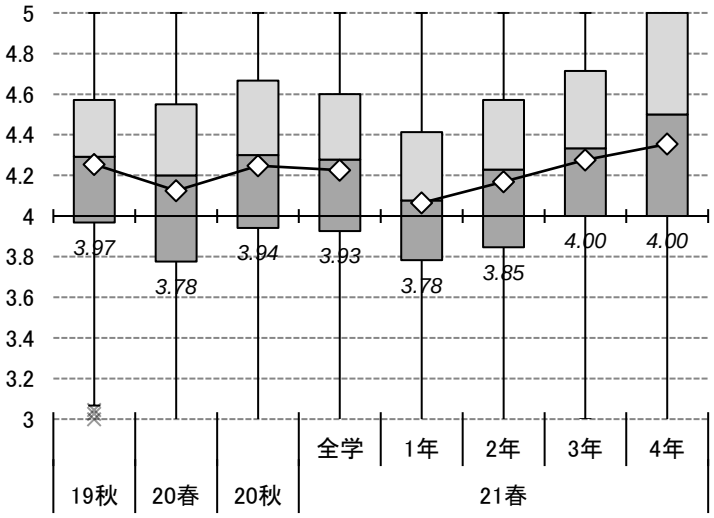


	単相関	偏相関
Q1教員目標明示	0.442	0.039
Q2教員努力	0.467	0.029
Q3教員シラバス対応	0.394	0.030
Q4事前・事後学修指示	0.349	0.003
Q5教員質問相談対応	0.408	0.018
Q6教材・教具効果	0.480	0.042
Q7授業に臨む姿勢	0.516	0.071
Q8質問・調査努力	0.454	0.051
Q9目標達成	0.558	0.167
Q10学生の成長実感		
Q11興味関心の向上	0.634	0.282
Q12有用性	0.618	0.269
Q13出席率	0.105	0.032
Q14平均学修時間	0.184	0.029

Q9、Q11 と並び、1 年前との比較で最も大きく伸びた項目の一つです。学年間の差がはっきりと出ており、学年が上がるごとに、集計値分布が上昇しています。Q11 興味関心の向上、Q12 有用性との強い相関はこれまで通りです。気づきや新しい物の見方を得ることが、興味の喚起と有用性の認識に直結すると考えられます。右図には、Q9 目標達成が高まれば、Q10 学生の成長実感の下限値も高まっていく様が見て取れます。この項目（Q10）の改善を図るには、まずは Q9 目標達成の改善を先行させる必要がありそうです。



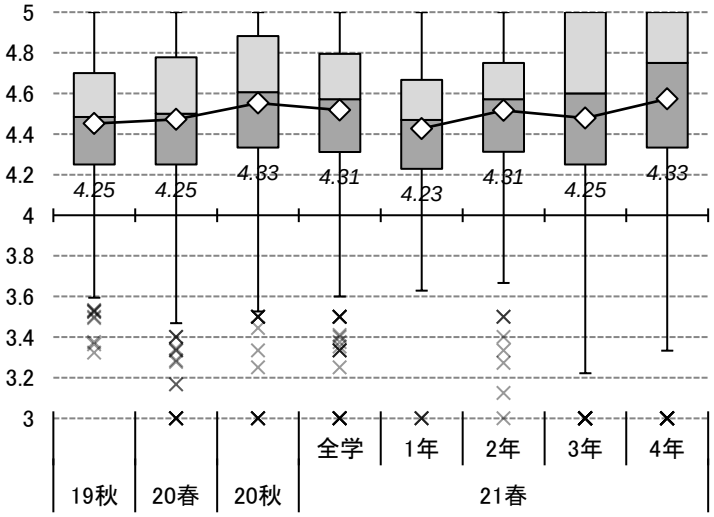
Q11 私は、この授業を受けてこの科目や関連分野が好きになった



	単相関	偏相関
Q1教員目標明示	0.403	−0.011
Q2教員努力	0.451	0.056
Q3教員シラバス対応	0.348	−0.037
Q4事前・事後学修指示	0.314	−0.031
Q5教員質問相談対応	0.396	0.024
Q6教材・教具効果	0.484	0.111
Q7授業に臨む姿勢	0.481	0.034
Q8質問・調査努力	0.430	0.044
Q9目標達成	0.537	0.165
Q10学生の成長実感	0.634	0.282
Q11興味関心の向上		
Q12有用性	0.599	0.250
Q13出席率	0.068	−0.026
Q14平均学修時間	0.169	0.024

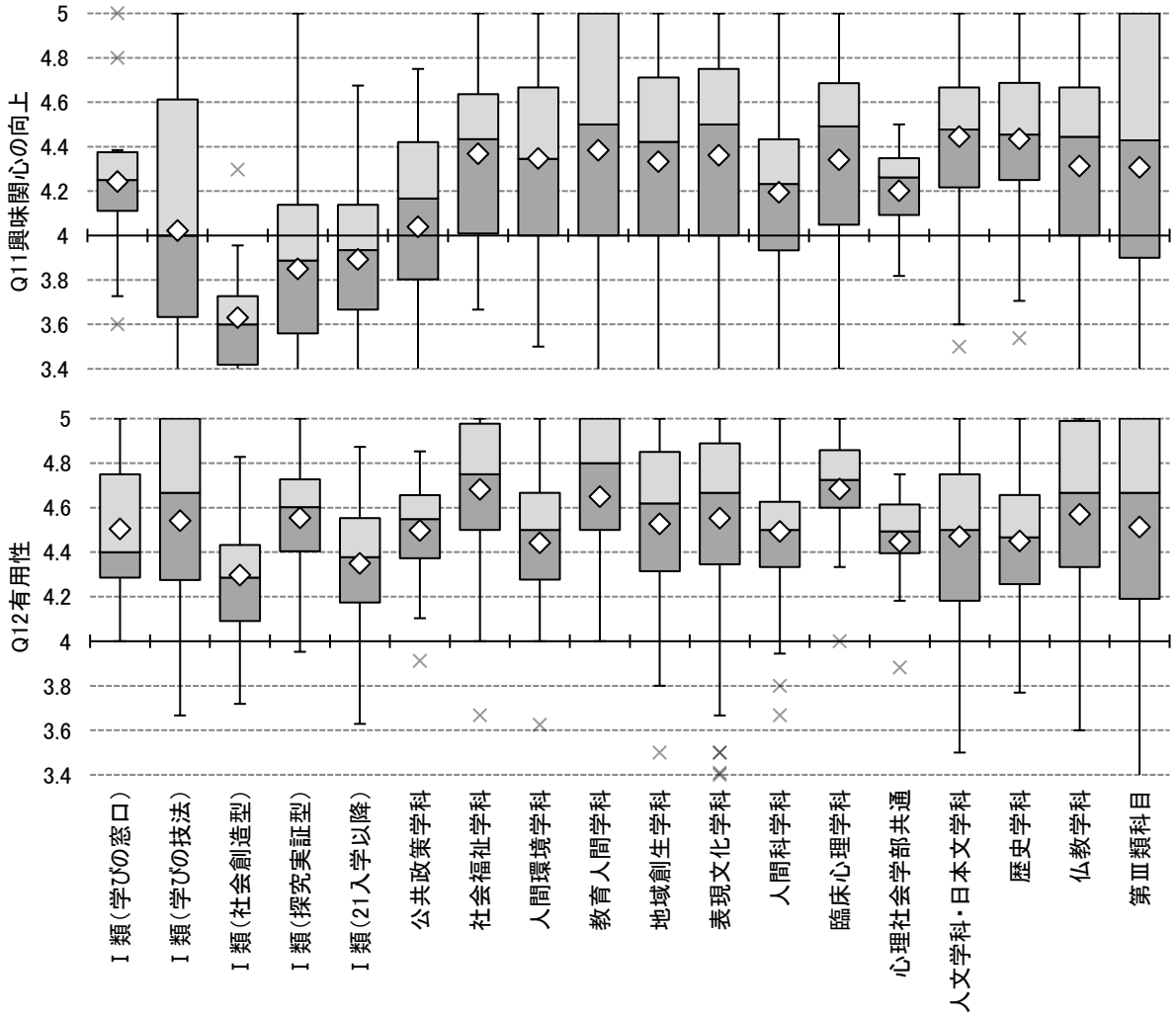
昨年春学期との比較で最も大きな改善が観測されましたが、まだ 4.0 ポイント未満の授業が 27.8%を占めており、更なる改善が期待されるところです。外からの働きかけで直接「好きにさせる」のは困難です。相関行列は、学んだことが役立つ場面を経験させること（Q12）や、新たな気づきを得られるような課題に取り組ませること（Q11）での改善が効果的と示唆しています。

Q12 私がこの授業で得たものは、今後の学修活動や人生に活きる

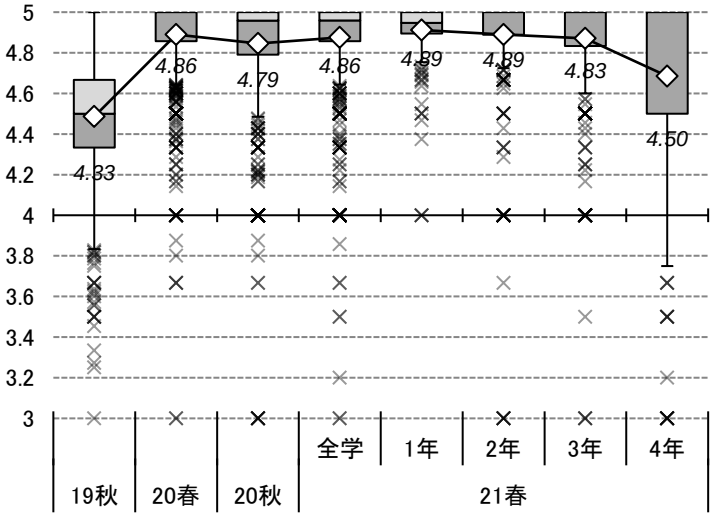


	単相関	偏相関
Q1教員目標明示	0.443	0.048
Q2教員努力	0.471	0.040
Q3教員シラバス対応	0.398	0.042
Q4事前・事後学修指示	0.344	−0.002
Q5教員質問相談対応	0.414	0.036
Q6教材・教具効果	0.485	0.072
Q7授業に臨む姿勢	0.475	0.071
Q8質問・調査努力	0.410	0.047
Q9目標達成	0.465	0.000
Q10学生の成長実感	0.618	0.269
Q11興味関心の向上	0.599	0.250
Q12有用性		
Q13出席率	0.087	0.017
Q14平均学修時間	0.164	0.015

昨年の春学期を超える評価です。Q10 学生の成長実感との間に加え、Q11 興味関心との相関も強固ですが、下図［Q11（再掲）と Q12 の科目区分別の集計値分布］に見る通り、科目区分によって前者と後者の相対的な（＝他の科目区分との比較上）評価の出方に違いもあるようです。例えば、Ⅰ類（探究実証型）は、有用性の評価は高く出ていますが、その割に興味の喚起は弱めです。



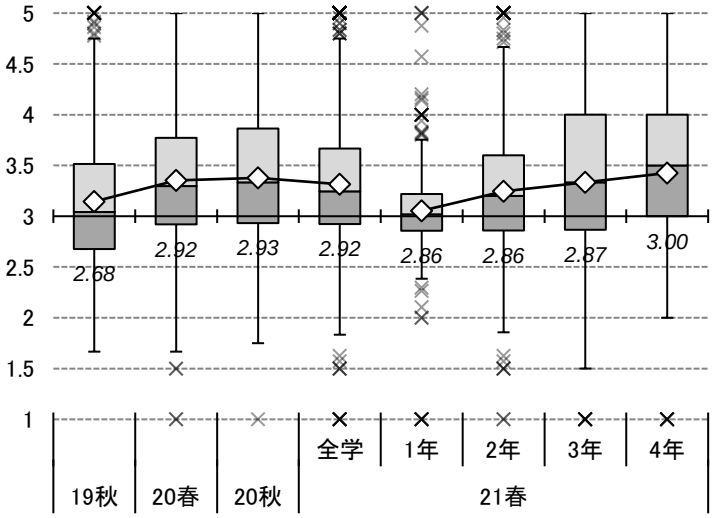
Q13 あなたのこの授業の出席率はどれくらいでしたか



	単相関	偏相関
Q1教員目標明示	0.045	−0.009
Q2教員努力	0.047	−0.004
Q3教員シラバス対応	0.044	0.000
Q4事前・事後学修指示	0.032	−0.019
Q5教員質問相談対応	0.045	0.002
Q6教材・教具効果	0.040	−0.028
Q7授業に臨む姿勢	0.162	0.108
Q8質問・調査努力	0.099	0.000
Q9目標達成	0.119	0.027
Q10学生の成長実感	0.105	0.032
Q11興味関心の向上	0.068	−0.026
Q12有用性	0.087	0.017
Q13出席率		
Q14平均学修時間	0.051	0.018

昨年の春学期から「高止まり」です。現状に特段の問題はありません。Q7 授業に臨む姿勢との間には一定の偏相関が見られますが、他の項目との相関は総じて弱く、「欠席せずに授業に参加していること」が、他項目との関与を持たずに独立しているかのような印象も拭えません。

Q14 この授業のための事前学修・事後学修に何時間取り組みましたか



	単相関	偏相関
Q1教員目標明示	0.147	0.024
Q2教員努力	0.125	−0.024
Q3教員シラバス対応	0.100	−0.038
Q4事前・事後学修指示	0.229	0.156
Q5教員質問相談対応	0.106	−0.029
Q6教材・教具効果	0.114	−0.038
Q7授業に臨む姿勢	0.209	0.039
Q8質問・調査努力	0.267	0.149
Q9目標達成	0.182	−0.010
Q10学生の成長実感	0.184	0.029
Q11興味関心の向上	0.169	0.024
Q12有用性	0.164	0.015
Q13出席率	0.051	0.018
Q14平均学修時間		

昨年春学期の実績をわずかに下回りました。ただし、有意差は生じていません。中央値の低下などには昨年と対面／遠隔の授業の割合が変わったことによる影響があるかもしれません。教室で対面授業に参加できたことで、自宅に持ち帰ってこなす課題の一部（あるいは多く）が処理できてしまえば、授業外学習の時間は自ずと短くなります。今回、「61～120 分」に相当する 4.0 に達している授業は 18.8%（昨年春学期は 20.9%）に止まりました。前回の分析では、コロナ禍におけるリモート学習が学習習慣の形成に寄与した可能性が窺えると申し上げましたが、その効果が持続・強化されたと考える材料は今回のデータには見つかりません。前述（p.8）の通り、教室での対面で行う学習活動と、それ以外の場面で学生が個々に取り組むべき課題を明確に分離しないと、事前・事後学修時間のさらなる延伸は難しいのではないかと考えます。

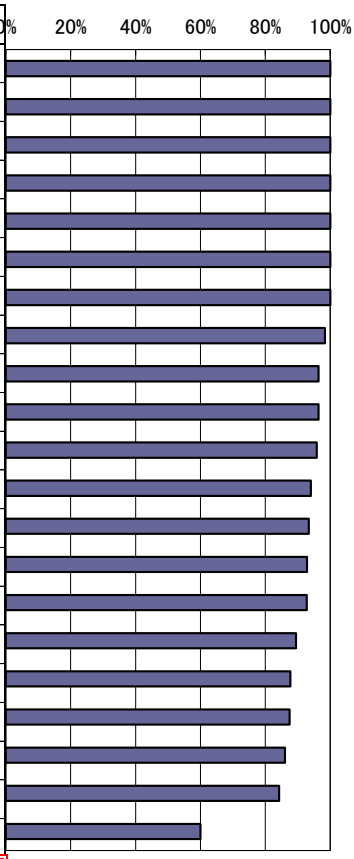
参考資料１

実施率

参考資料1-1. アンケート実施率科目区分別

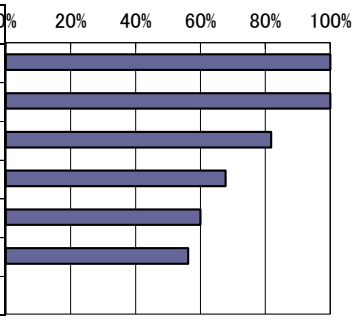
■学部1174科目

科目区分		授業数	実施数	実施率
01 Ⅰ類(学びの窓口)	301	18	18	100.0%
04 Ⅰ類(社会創造型)	304	74	74	100.0%
10 人間学部共通	310	1	1	100.0%
13 心理社会学部共通	313	15	15	100.0%
15 公共政策学科	317	2	2	100.0%
19 社会共生学部共通	319	3	3	100.0%
20 第Ⅱ類科目(学部共通)	320	1	1	100.0%
05 Ⅰ類(探究実証型)	305	123	121	98.4%
11 人間科学科	311	56	54	96.4%
15 歴史学科	315	111	107	96.4%
08 人間環境学科	308	24	23	95.8%
12 臨床心理学科	312	50	47	94.0%
14 人文学科・日本文学科	314	106	99	93.4%
21 第Ⅲ類科目	321	42	39	92.9%
06 仏教学科	306	139	129	92.8%
18 地域創生学科	318	114	102	89.5%
09 教育人間学科	309	49	43	87.8%
16 表現文化学科	316	128	112	87.5%
07 社会福祉学科	307	86	74	86.0%
02 Ⅰ類(学びの技法)	302	127	107	84.3%
03 Ⅰ類(留学生科目)	303	5	3	60.0%
計		1274	1174	92.2%



■大学院69科目

科目区分		授業数	実施数	実施率
05 院社会福祉学専攻(修士)	305	3	3	100.0%
07 院比較文化専攻(修士・博士)	307	4	4	100.0%
02 院史学専攻(修士・博士)	302	11	9	81.8%
01 院仏教学専攻(修士・博士)	301	31	21	67.7%
08 院宗教学専攻(修士・博士)	308	5	3	60.0%
04 院臨床心理学専攻(修士)	304	16	9	56.3%
03 院国文学専攻(修士・博士)	303	3	0	0.0%
計		73	49	67.1%



参考資料1-2. アンケート実施率（学部） 2005年度春学期～2021年度春学期

年度	学期	実施率	実施数	開講講座数
2005年度	春学期	86.0%	773	899
2005年度	秋学期	83.9%	705	840
2006年度	春学期	70.2%	817	1163
2006年度	秋学期	83.3%	749	899
2007年度	春学期	92.1%	793	861
2007年度	秋学期	89.1%	725	814
2008年度	春学期	92.7%	789	851
2008年度	秋学期	87.3%	714	818
2009年度	春学期	90.9%	777	855
2009年度	秋学期	87.4%	706	808
2010年度	春学期	91.9%	839	913
2010年度	秋学期	92.9%	793	854
2011年度	春学期	92.8%	852	918
2011年度	秋学期	91.8%	812	885
2012年度	春学期	89.6%	844	942
2012年度	秋学期	81.9%	799	975
2013年度	春学期	94.4%	913	967
2013年度	秋学期	92.9%	848	913
2014年度	春学期	96.3%	1009	1048
2014年度	秋学期	94.3%	985	1045
2015年度	春学期	96.3%	1049	1089
2015年度	秋学期	92.4%	1040	1125
2016年度	春学期	96.3%	1123	1166
2016年度	秋学期	95.3%	1072	1125
2017年度	春学期	96.3%	1172	1217
2017年度	秋学期	92.6%	1096	1183
2018年度	春学期	97.8%	1183	1209
2018年度	秋学期	95.1%	1098	1154
2019年度	春学期	95.7%	1219	1274
2019年度	秋学期	96.2%	1127	1172
2020年度	春学期	92.2%	1174	1274
2020年度	秋学期	92.1%	1113	1208

2021年度	**春学期**	**92.2%**	**1174**	**1274**

※2020年度からweb方式での実施へ変更。

参考資料２

自由記述回答

頻出キーワード分析

自由記述回答　頻出キーワード分析について

概要

本参考資料は授業アンケートの最後に
「この授業において、あなた自身の『理解が深まった』『学ぶ意欲が高まった』と感じたのはどのような点でしたか。また、この授業において改善できる点があればお書きください。」
として用意された自由記述欄に記載のあった回答につきデータ化をした上で、頻出する単語を調査・分析し、同種の意見の集約・集計を行ったものです。

目的

頻出する意見を明らかにすることにより大学全体の傾向をつかみ、全学として優先的に取り組むべき課題を明らかにすることを目的としています。

この為、キーワード※1 として出現頻度の上位 10 ワードを特に重要なものとして集計対象とし、11 位以下のキーワードについては参考として表示しています。また、前回比較グラフは出現率※2 による前回と前々回（＝前年同期）データに加え、今回の全学平均を表示することとしています。

分析上の主なポイント

質問文は前半の「『理解が深まった』『学ぶ意欲が高まった』と感じた点」（効果点）と後半の「改善できる点」（改善点）に分かれます。そこで記述内容により効果点と改善点に分けて集計を行いました。分析上の主なポイントは下記の通りです。

(1) 質問の前半に対する回答（効果点）と後半に対する回答（改善点）を分けて集計・分析を行っています。

(2) できるだけ具体的なキーワードに分解・集計しています。例えば「分かりやすい」は「〇〇〇で分かり易かった」「△△△をしてくれたので分かり易かった」など、分かり易い理由となった「〇〇〇」「△△△」を独立したキーワードとして集計。理由が明確でないものを「分かりやすい」として残しました。

(3) 当該授業そのものがテーマとしている項目は、キーワードとして出現数が高い場合でも全学共通の課題や効果点とはなりえないため、対象キーワードから除外しました。

※例：「レポートの書き方がよく分かった」はキーワード「レポート・課題」からは除外。
キーワード「レポート・課題」には「レポート、課題の出し方や評価方法がよかった／レポート、課題に取り組むことによって、理解が深まった」などに限定して仕分け・集計。

今回の特徴

WEB による授業アンケートの実施が 2 年目となり回答率が科目毎の回答率の平均で 44.2%（昨年春学期）から 48.9%に改善しましたが、自由記述の記載率はさらに増加し、昨年春学期の 26.9%（4,617 記載/17,158 回答）から 45.9%（10,460 記載/22,779 回答）と、率にして約 7 割増加しました。増加の内訳は 1 年生：19%→30%、2 年生 6%→13%、3、4 年生は変化なしでした。
新型コロナの感染拡大も 2 年目を迎え、オンラインによる授業と対面授業が混在している状況です。このためオンライン授業自体について、あるいはその実施方法に関する記述も昨年度同様多

くみられた一方で、従来の対面授業においてよく見られた効果点、改善点も確認されている状況に変わりはありません。従って、キーワードとしては、オンライン授業そのものに対する全般的な意見を「オンライン授業」としてまとめ、その他の具体的な内容についてはできる限り個別のキーワードとして分類集計する方法を維持しました。

<u>効果点と改善点</u>

1. <u>効果点（『理解が深まった』『学ぶ意欲が高まった』と感じた点）</u>

回答率が大きく増加したことは前述の通りですが、その増加分のほとんどは効果点に対する記述によるものと言えそうです。出現率の全学集計を見ると分かりますが、すべてのキーワードの出現率に対して今回のキーワードの出現率が大きく上回っており、改善点におけるそれと比べるとその違いが一目瞭然です。

キーワード別に見ると、「**グループワーク**」（グループワークでの共同作業により学びが深まった/学習意欲につながった）が昨年度春学期、秋学期同様 1 位（398 件）となりました。2 位の 269 件を大きく引き離し、突出した数字です。前回同様、回答数の多い「Ⅰ類・第Ⅱ類科目（学部共通）・Ⅲ類」、「1 年生」、「82 人以上の科目」による回答数の多さがが 1 位になった要因ですが、学部別に見ると「社会共生学部」に於ける高い出現率が目立ちます。

2 位は 269 件の「**丁寧**」（丁寧な授業、解説、プリント・・・）で、前回秋学期の２位から変わりません。

3 位は前回の 10 位から順位を上げた「**レポート・課題**」です。以前は「レポートや課題の出し方、評価方法」と言った点に関する記述も多くみられましたが、そうした記述は少数派となり「レポート/課題に取り組むことで理解が深まった/学習意欲が高まった」といった記述が大多数を占めるようになっています。

なお、前回 3 位であった「**総合評価**」については、今回より集計対象キーワードから除外することとしました。総合評価は具体的な項目に分類できない「面白かった/楽しかった/充実していた/有意義だった」など、漠然した表現のみの回答を集約したものでしたが、実質的な授業改善計画への参考にはなりにくいため、より具体的なキーワードに焦点を当てることを優先しました。

4 位は前回の 8 位から順位を上げた「**実例・具体的**」（実例、具体例を挙げた説明で分かりやすい、具体的に理解できた）でした。このキーワードは 14 位から 9 位に順位を上げた「**体験談・現場の話**」（現場の話や体験談を聞くことによって理解が深まった：165 件）、新たにランクインした 14 位「**身近**」（身近なテーマで分かりやすい：113 件）などと通じるものがあり、授業に様々な工夫を取り入れておられる様子が拝察されます。

5 位「**説明・解説**」（説明、解説が分かりやすい：220 件）、6 位「**多様な意見・視点**」（多様な意見を聞けて/意見交換ができてためになった、理解が深まった：216 件）、7 位「**動画・画像**」（動画、画像で分かりやすい：191 件）は前回とほぼ同様です。

8 位には以前に無かった新しいキーワード「**調べ**」（調べることによって、理解が深まった：178 件）が入りました。

また、10 位「**詳しい**」（詳しく学べた：158 件）、14 位「**基礎**」（基礎を学べて、ためになった、理解が深まった：113 件）、15 位「**テスト・試験**」（テストがあることによって、理解が

深まった：102 件）は前回ランク外でしたが、出現数を伸ばしました。

2. 改善点（改善できる点）

1 位は前回 2 位の「**オンライン授業**」（オンライン授業に関わる要望各種：126 件）、2 位は前回 1 位の「**レポート・課題**」（レポート、課題の出し方や評価方法を改善してほしい：125 件）でした。順位は入れ替わったとはいえ、件数も出現率も前回同様ほぼ同じで、変化はなく、あまり改善は進みませんでした。この二つが 3 位以下を件数で大きく引き離しているため対策が望まれます。

3 位の「**時間**」（時間配分を改善して欲しい/時間を守ってほしい：72 件）も前回の 3 位から変わりませんが、出現率 49.3 から 31.6 へと大きく下げ、改善が進みました。

4 位以降は項目の入れ替わりも含め、変化が目立ちます。

4 位の「**説明・解説不足**」は前回の 8 位でしたが、出現率で 17.2 から 22.4 へと増加しました。効果点における集計結果から分かりやすく丁寧な説明・解説が実践、工夫されている様子が浮かび上がっていますが、その反動という可能性もあるかもしれません。

5 位「**パワポ・スライド**」（パワーポイント、スライドが分かりにくい・見にくい・内容、配布方法を改善してほしい：45 件）、7 位「**分かりにくい**」（授業が分かりにくい：42 件）、8 位「**聞きにくい**」（声が小さい、聞き取りづらい等：41 件）、9 位「**はやい**」（進行が早い、早口、画面切り替えが早い：40 件）、14 位「**動画・画像**」（動画、映像、写真が分かりにくい（見えにくい）／動画、映像が欲しかった：14 件）、15 位「**実例・具体的**」（実例、具体例をあげてほしかった／具体的に説明してほしかった：13 件）はいずれも、前回番外（「パワポ・スライド」は 16 位）だった項目です。この内、「パワポ・スライド」「分かりにくい」「聞きにくい」「はやい」はコロナ前の 2019 年度以前は常連でした。対面授業が一定割合戻ってきたことが影響しているかもしれません。改めて改善に取り組んでいく必要がありそうです。

一方前回 4 位から 10 位となった「**グループワーク**」（グループワークの回数、分け方、実施方法を改善して欲しい：34 件）、前回 5 位から 13 位となった「**テスト・試験**」（テストの実施方法、時間などに関する改善要望：18 件）は出現率を大きく下げ改善が進みました。

また、前回あって今回番外に消えた「シラバス」「教科書・テキスト」「出席」「フィードバック」「発表」も改善が進んだ項目として考えられます。

なお、6 位「**プリント資料**」（プリント・資料が分かり辛い、配布方法を改善して欲しい：44 件）、11 位「**難しい**」（授業・資料等が難しすぎる：30 件）、12 位「**質問**」（質問しづらい／質問にきちんと対応してくれない：21 件）はほぼ前回同様の順位、出現率でした。

改善が進めば「効果点」になる可能性もある、改善点にも効果点にもリストアップされるキーワードは以下の通りです。「効果点」に掲載された意見の中に具体的な改善行動のヒントを探すことができそうです。

- 「レポート・課題」（改善点２位/効果点３位）
- 「説明・解説（不足）」（改善点４位/効果点５位）
- 「分かりやすい/分かりにくい」（改善点７位/効果点 12 位）

- 「グループワーク」（改善点 10 位/効果点 1 位）
- 「質問」（改善点 12 位/効果点 11 位）
- 「テスト・試験」（改善点 13 位/効果点 15 位）
- 「動画・画像」（改善点 14 位/効果点 7 位）
- 「実例・具体的」（改善点 15 位/効果点 4 位）

なお、学部、回答人数帯、学年により、出現数・率に大きな違いがありますので、引き続きそれぞれの集計カテゴリー別の改善行動が重要となります。

少数意見

出現頻度の少ないキーワードは個々の授業の特殊性や、教員あるいは学生個別の理由によるものが少なくありません。従って、こうしたキーワードについてはむしろ、それぞれの教員においてその全文を自ら確認し、授業改善のために利用されることが重要であり、本資料における集計・分析の対象からは除外しています。

※1 キーワードと集計内容について

キーワードはあくまでその内容を代表する言葉を当てはめたものです。例えば「聞きにくい」は、回答中に「聞きにくい」という単語がなくても「声が小さい」という単語があれば、「聞こえない」と同義と判断しこのキーワードに集約してカウントしています。各キーワードに含まれる「回答内容」については、「効果点」「改善点」それぞれの集計の最初のページ「頻出キーワード【全学】」の下段に掲載された一覧表を参照ください。

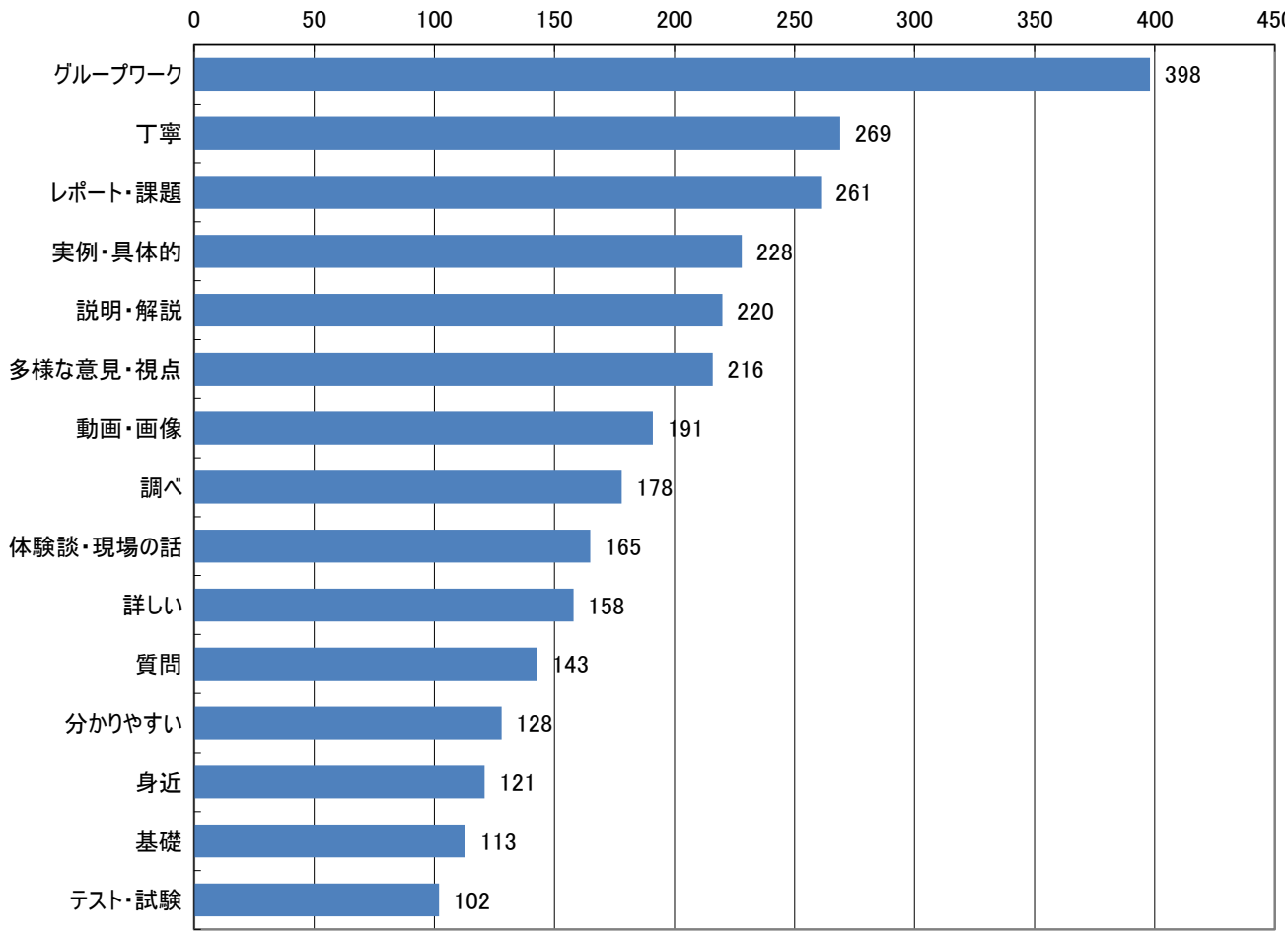
※2 出現率について

「出現率前回比較　全学」下段の説明を参照ください。

【効果点】

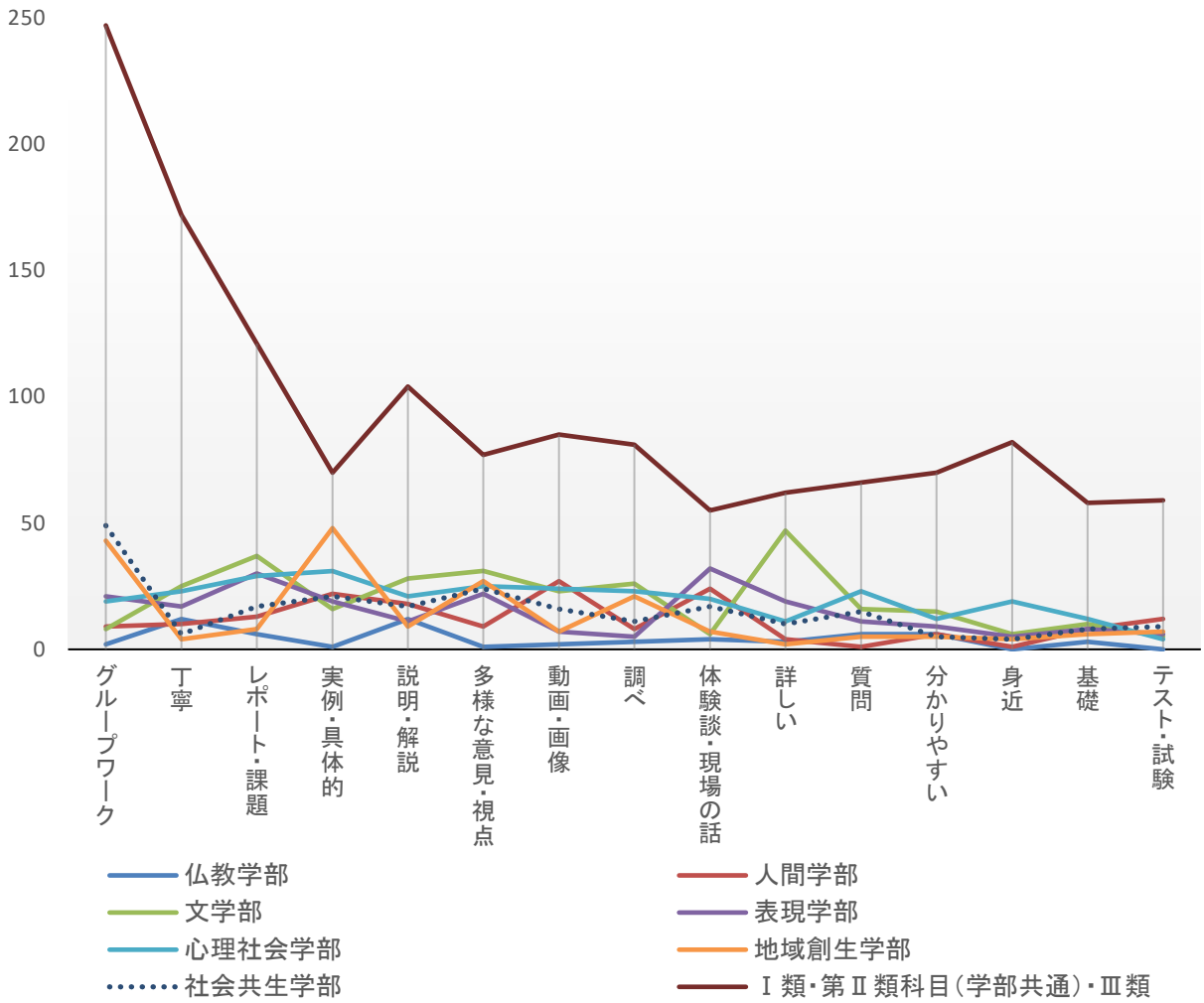
「理解が深まった」「学ぶ意欲が高まった」と感じた点

自由記述回答　頻出キーワード　＜効果点＞
【全学】

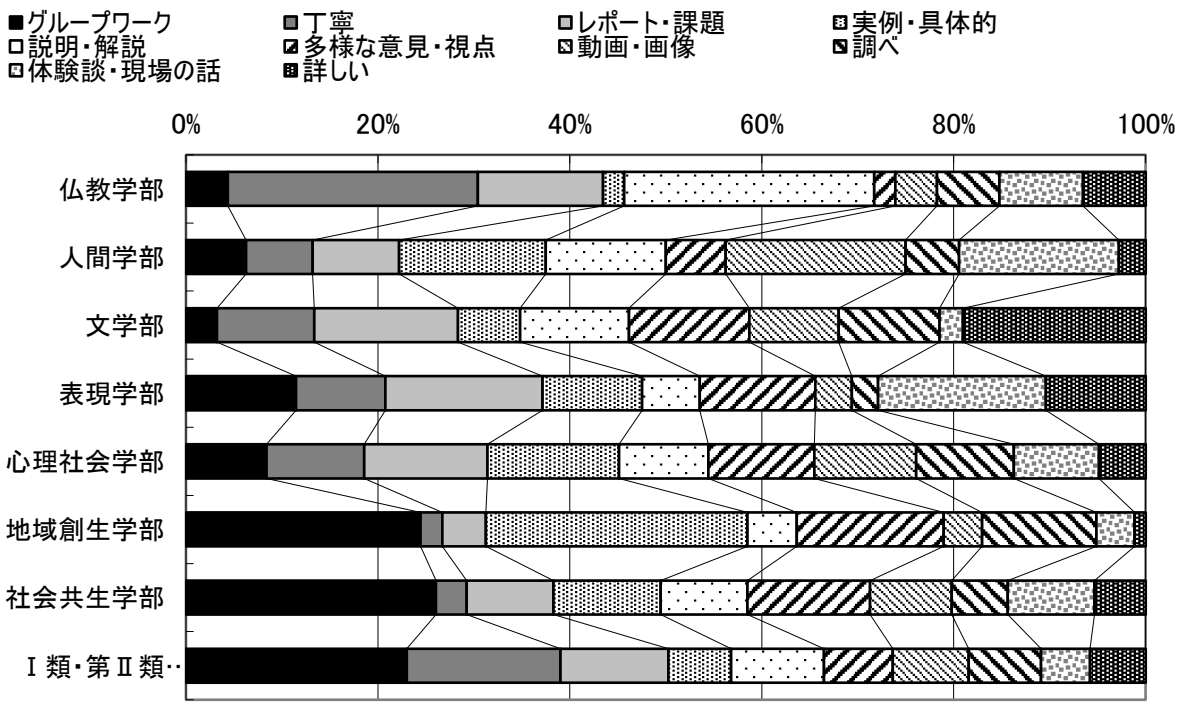


キーワード	主な内容	出現数
グループワーク	グループワークでの共同作業により学びが深まった／会話、意見交換により学び・理解が深まった。／グループワークが学習意欲につながった	398
丁寧	丁寧な授業、解説、プリント、資料、教科書、テキスト、教材、パワーポイント、スライド、質問対応、添削、フィードバック、アドバイス、コメント	269
レポート・課題	レポート、課題に取り組むことによって、理解が深まった／レポート、課題の出し方や評価方法がよかった ※「レポート・課題について具体的に説明」は「実例・具体的」に分類	261
実例・具体的	実例、具体例で分かりやすい、理解が深まった／具体的で分かりやすかった／具体的に理解できた／実例による説明、具体的な説明で分かりやすい	228
説明・解説	（授業について）説明、解説が分かりやすい ※「丁寧な説明・解説」は「丁寧」に、「実例による説明、具体的な説明が分かりやすい」は「実例・具体的」に、「動画・画像による説明が分かりやすい」は「動画・画像」に分類	220
多様な意見・視点	多様な意見を聞けて、意見交換ができて、ためになった、身についた、理解が深まった／多様な視点を学べた ※「グループワークで意見を聞けてよかった」は「グループワーク」に分類	216
動画・画像	動画・画像で分かりやすい、理解が深まった／動画・画像による説明が分かりやすい	191
調べ	調べることによって、理解が深まった	178
体験談・現場の話	現場の話や体験談を聞くことによって理解が深まった／ 先生の経験談、体験談を聞くことによって理解が深まった	165
詳しい	詳しく学べた／詳しく知ることができた／細かい内容を学べた	158
質問	質問しやすい、答えてくれた ※「丁寧な質問対応」は「丁寧」に分類	143
分かりやすい	授業が分かりやすい ※分かりやすい理由の記載があるものは各項目に分類	128
身近	身近なテーマで分かりやすい／身近に感じられた	121
基礎	基礎を学べてためになった、身についた、理解が深まった ※「基礎を丁寧に指導してもらえた」は「丁寧」に分類	113
テスト・試験	テストがあることによって、理解が深まった	102

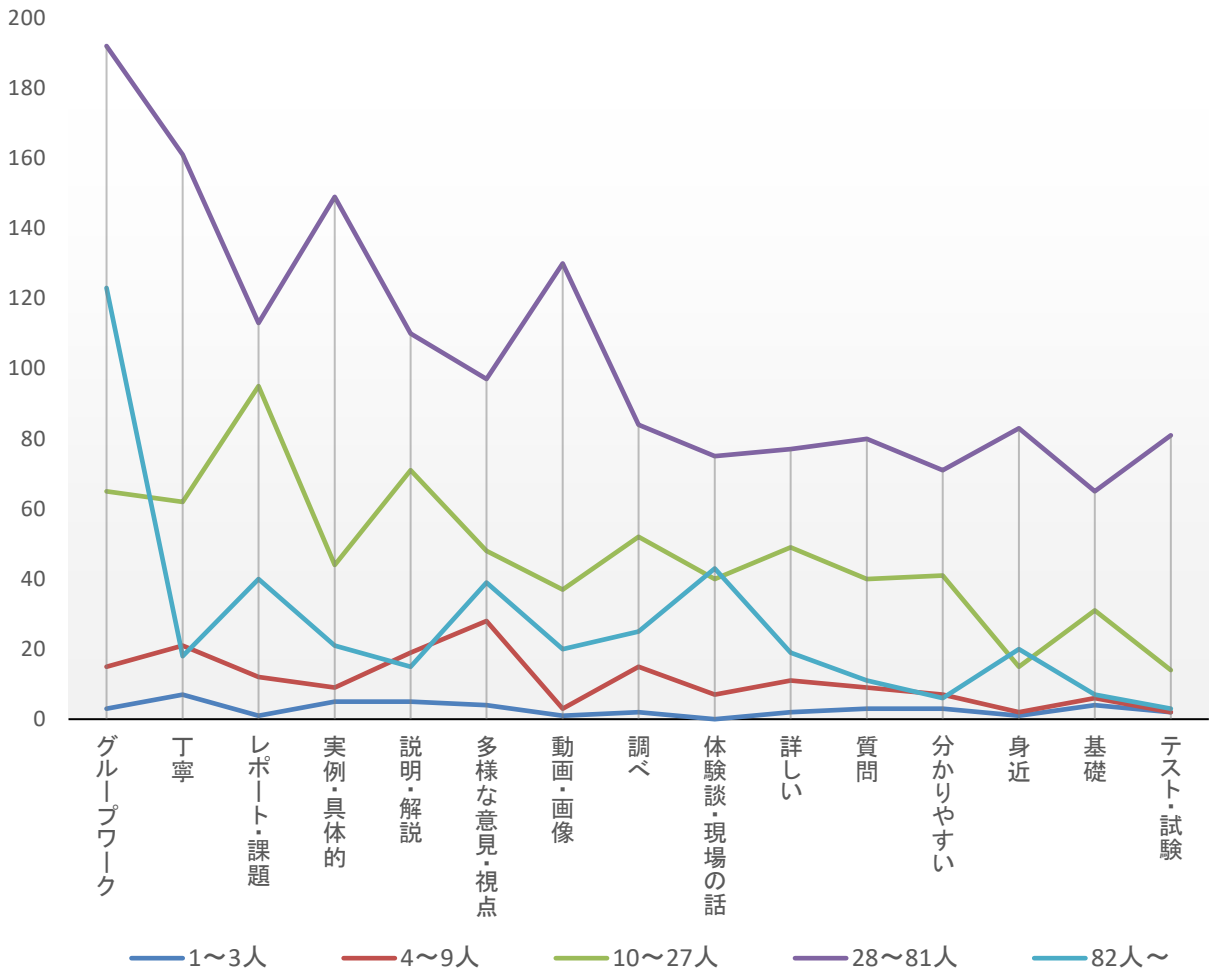
自由記述回答　頻出キーワード　＜効果点＞
【学部別】



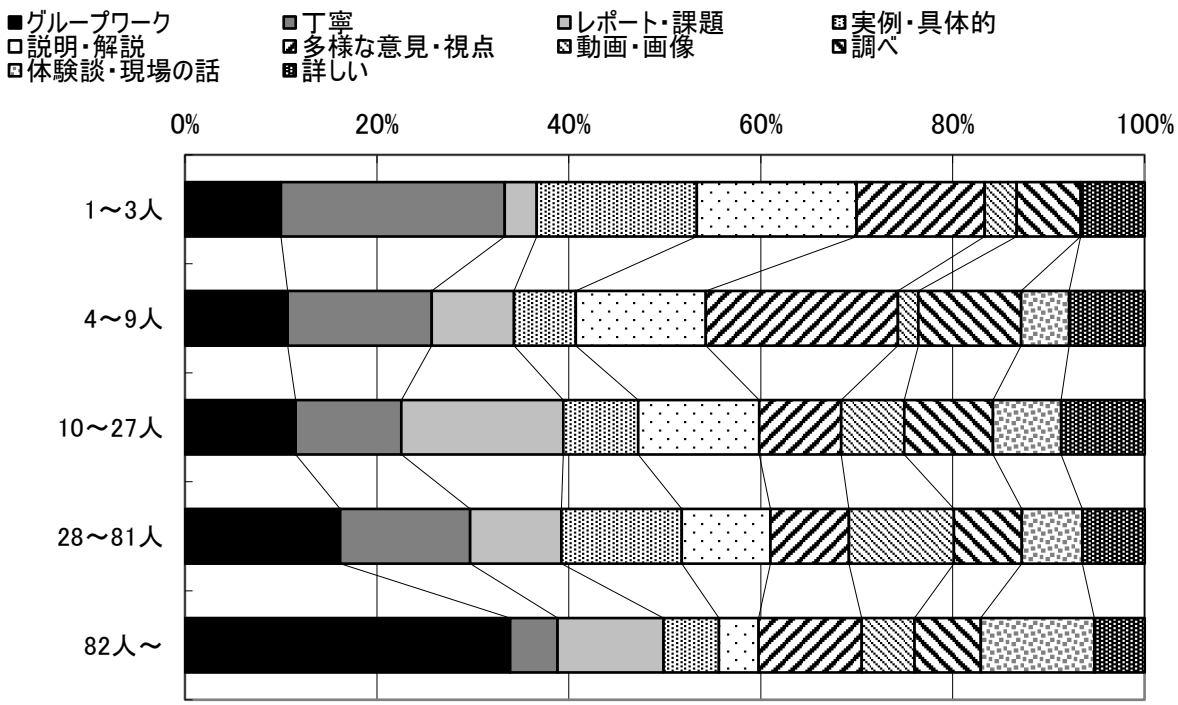
上位10項目の学部別割合



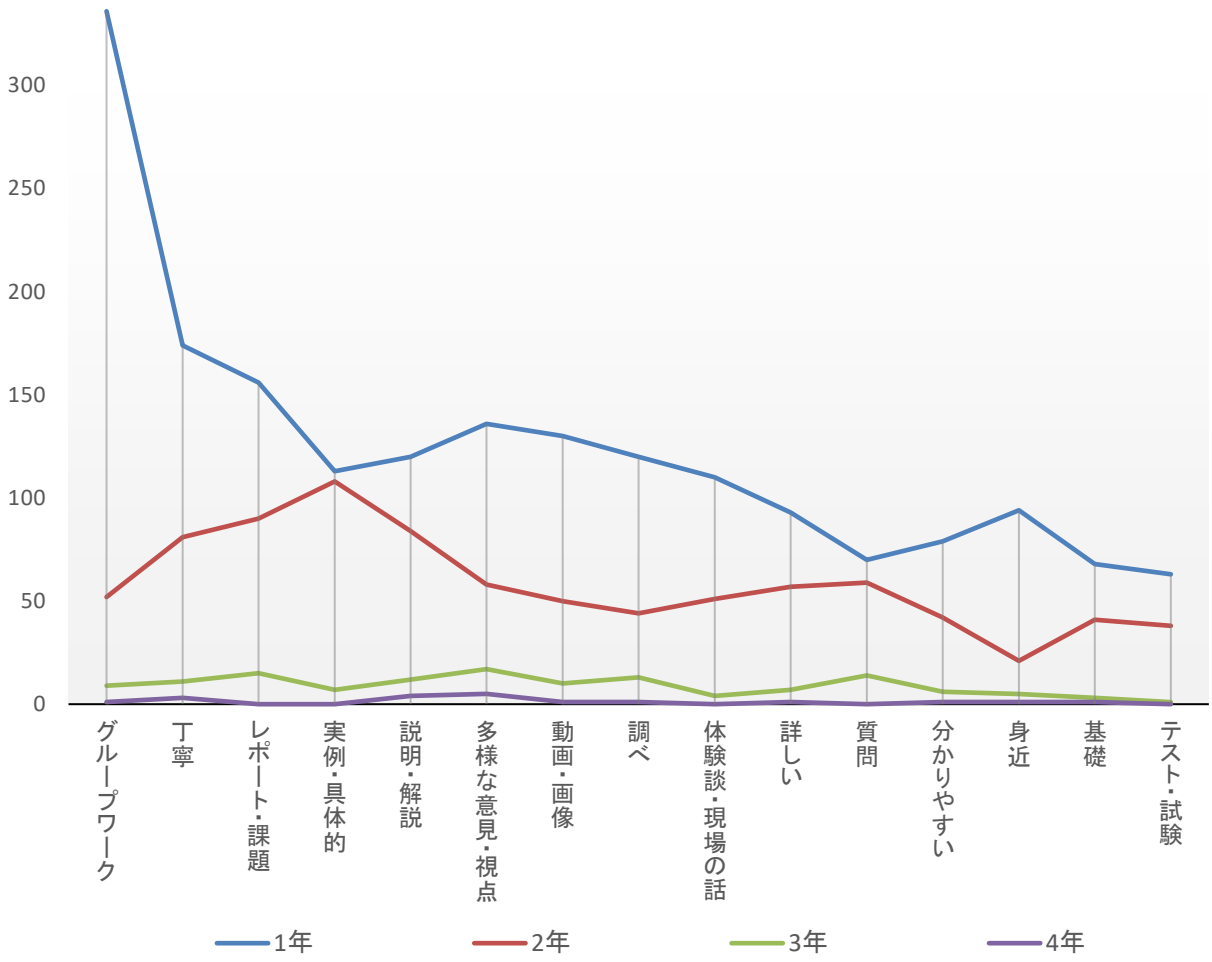
自由記述回答　頻出キーワード　＜効果点＞
【回答人数帯別】



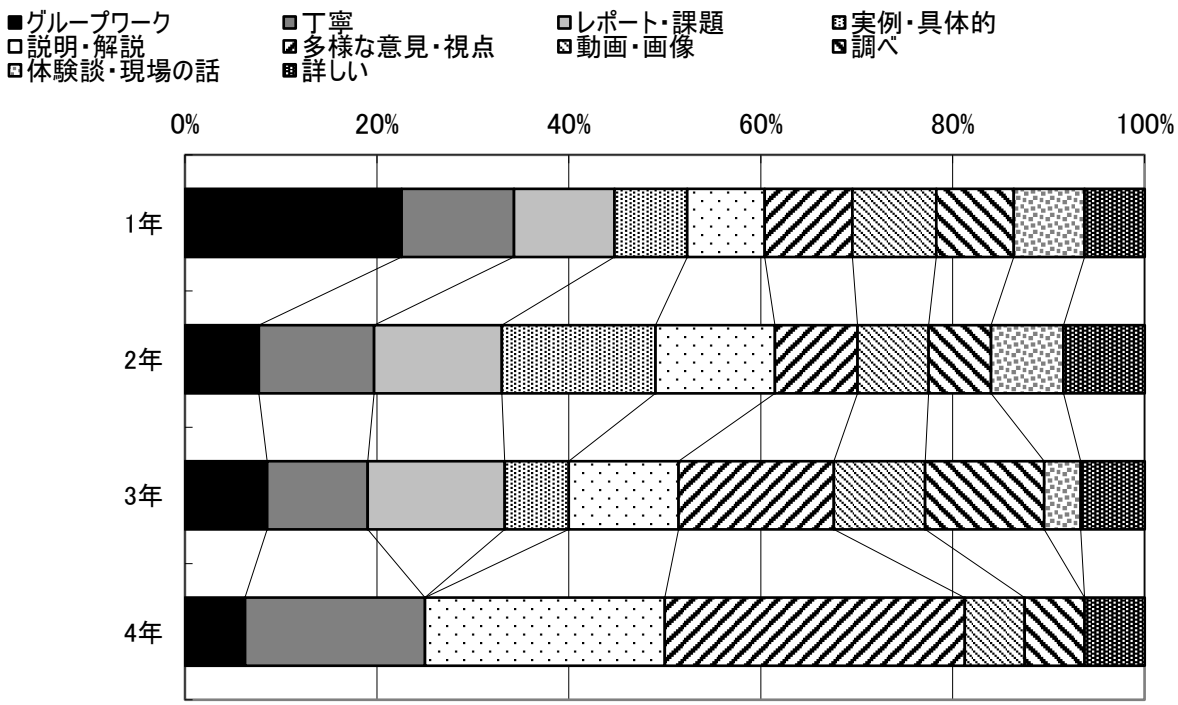
上位10項目の回答人数帯別割合



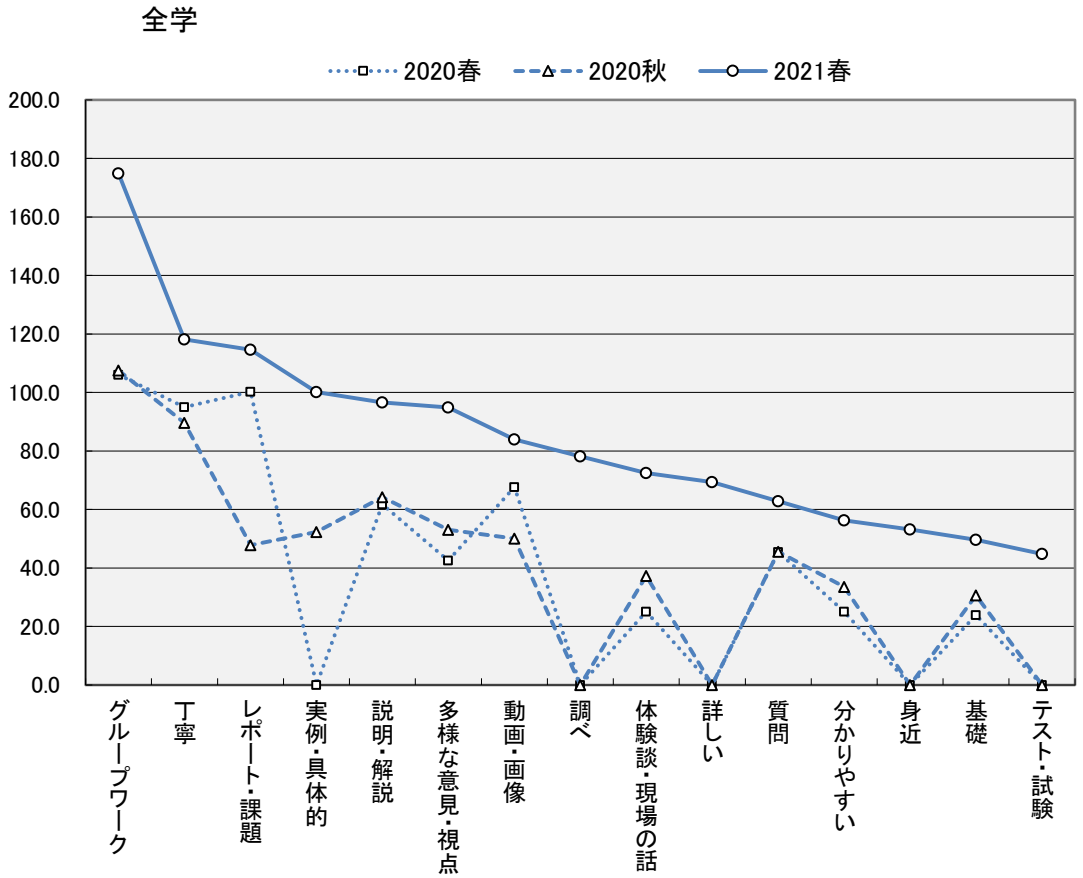
自由記述回答　頻出キーワード　＜効果点＞
【学年別】



上位10項目の学年別割合



自由記述回答　頻出キーワード　＜効果点＞
【出現率前回比較】 全学

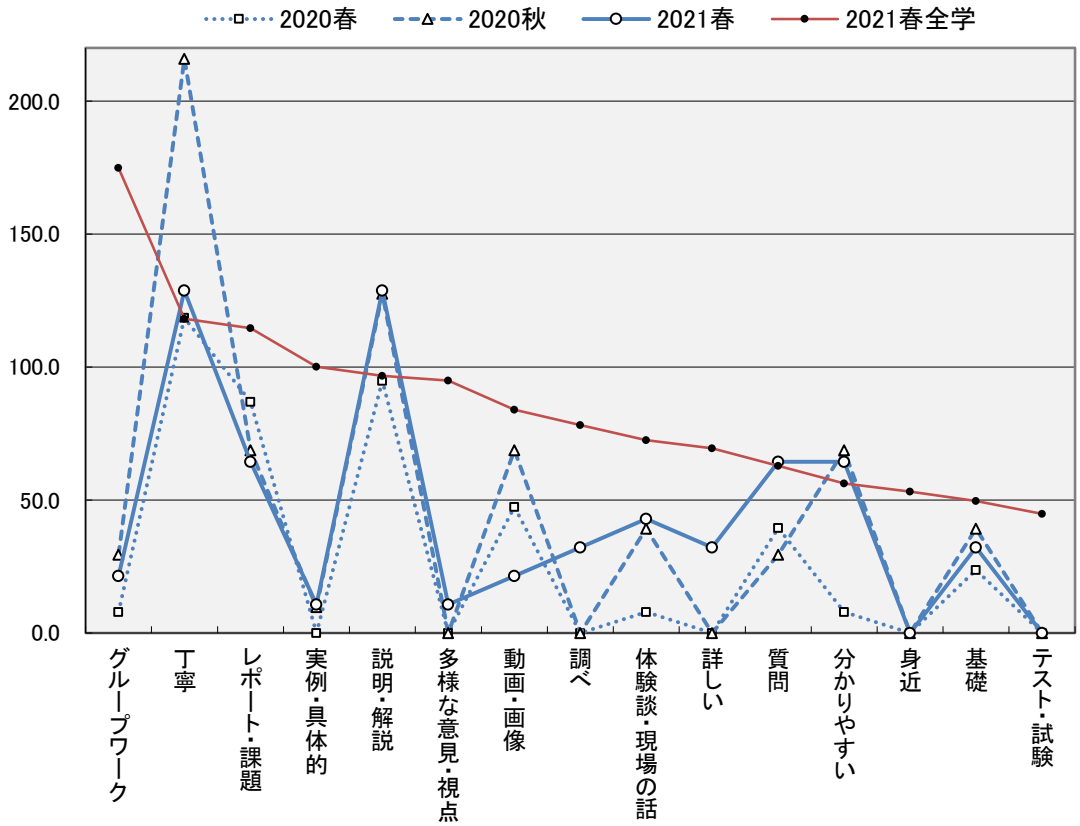


「出現率」について

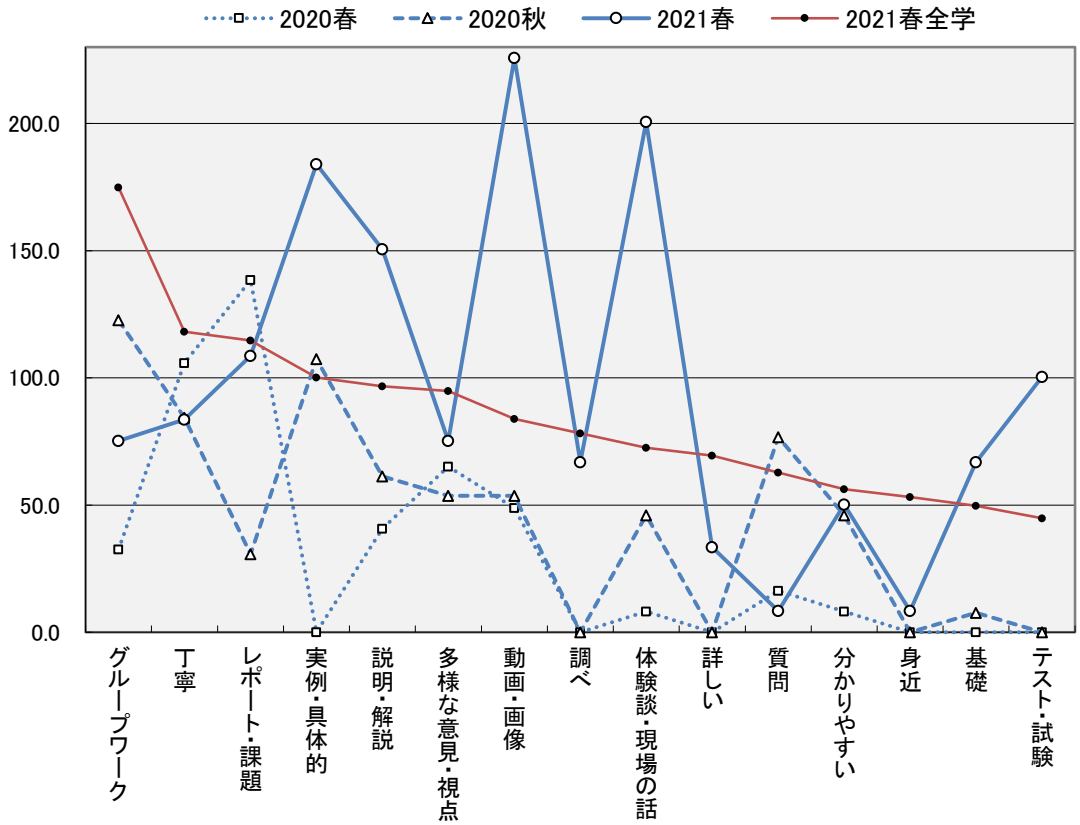
- 自由記述回答の頻出キーワードに関する前回比較では、出現回数ではなく出現率により比較を行っています。
  総回答数が春学期と秋学期では異なり、単純な出現数では比較ができないためです。
  出現率は下記の式で計算されます。
  出現率＝出現数／回答者数×10^4
  （回答者数：授業アンケートの回答者数で自由記述回答の記載者数ではありません。）
- 次ページ以降の学部別、回答数区分別、学年別における出現率算出の為の回答者数は、それぞれのカテゴリーにおける回答者数を使用しています。

自由記述回答　頻出キーワード　＜効果点＞
【出現率前回比較】 学部別

《仏教学部》

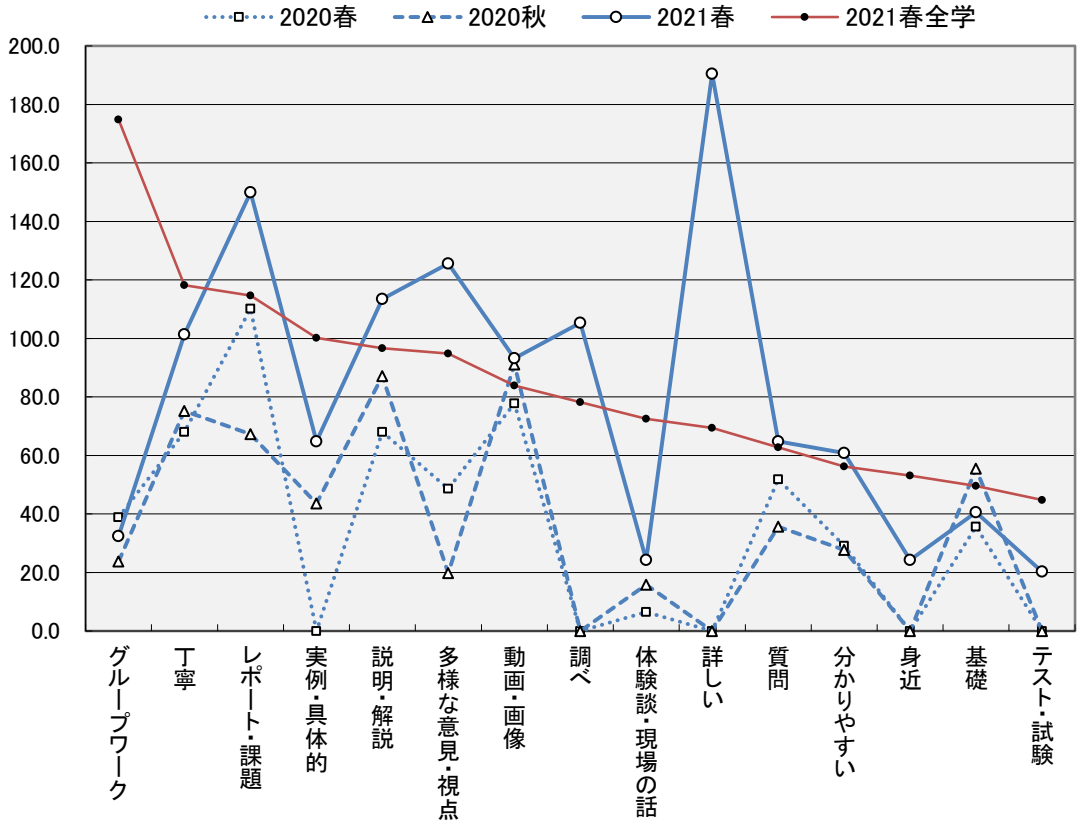


《人間学部》

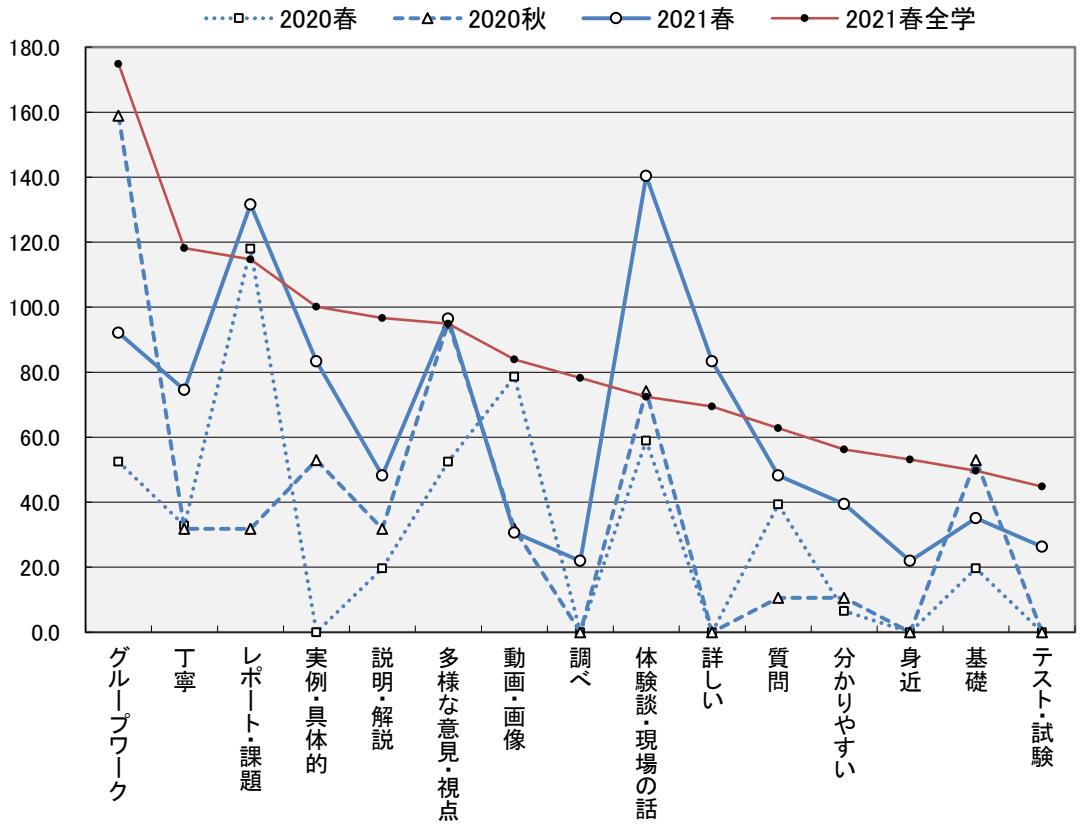


自由記述回答　頻出キーワード　＜効果点＞
【出現率前回比較】 学部別

《文学部》

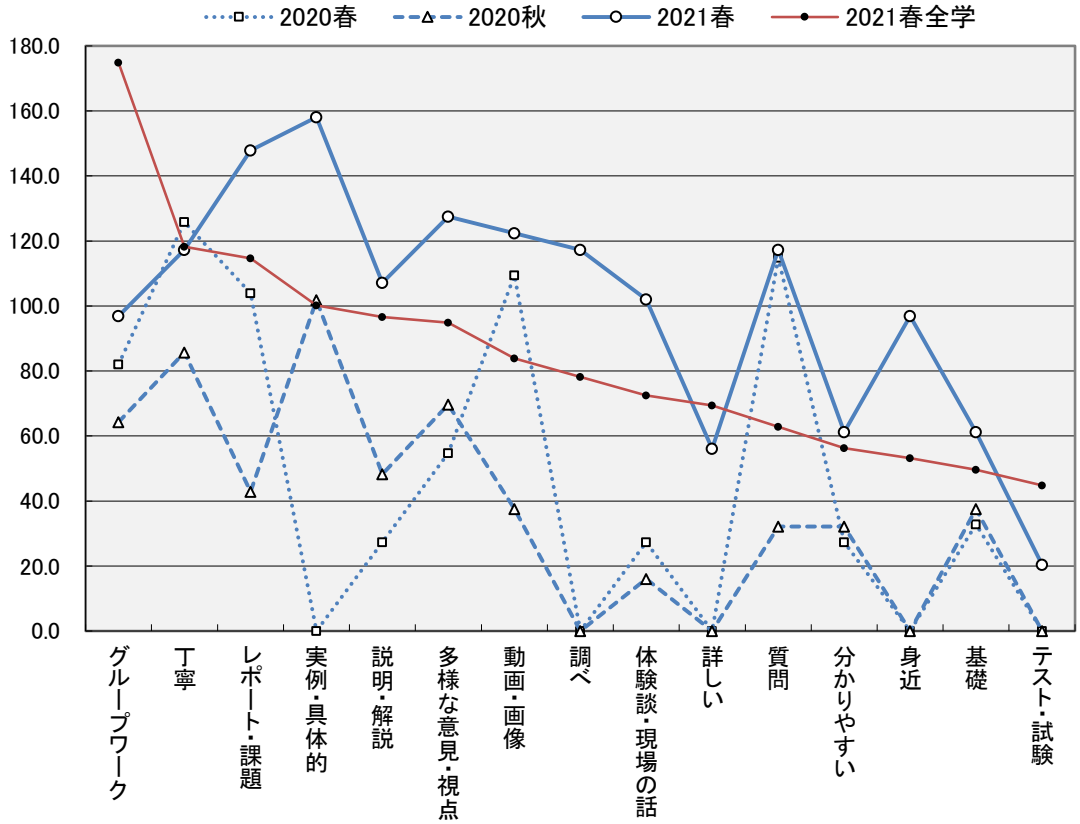


《表現学部》

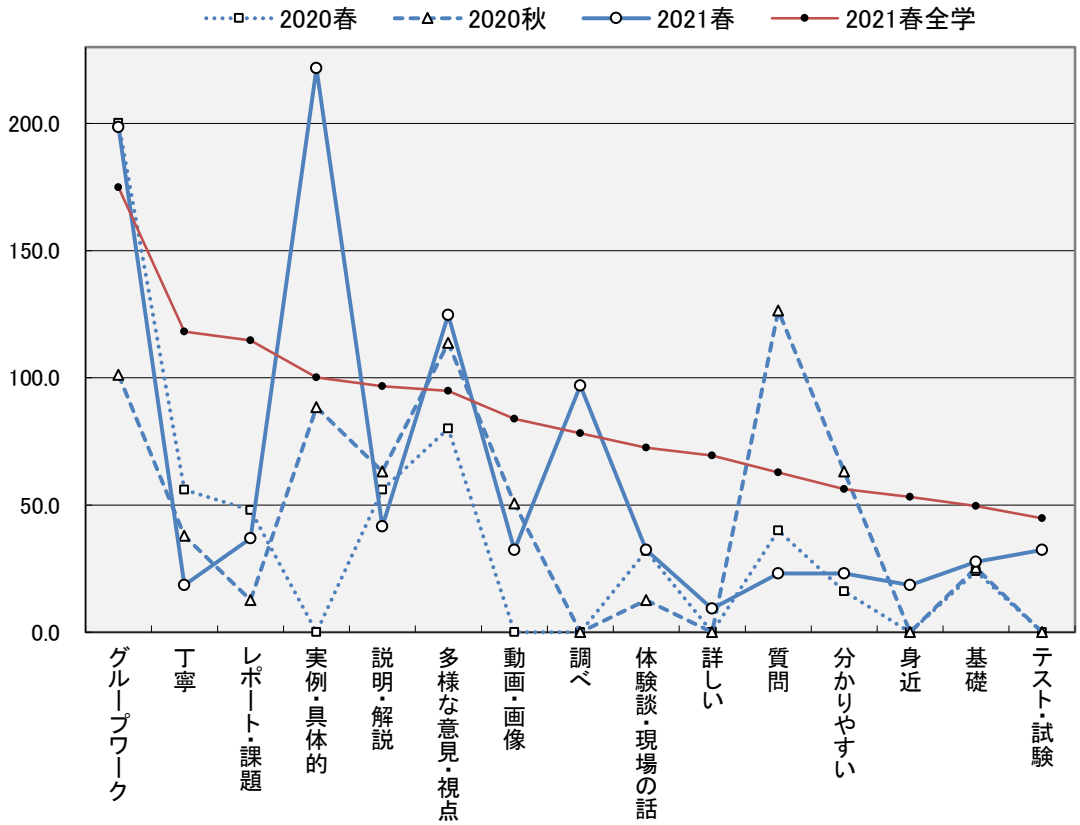


自由記述回答　頻出キーワード　＜効果点＞
【出現率前回比較】 学部別

《心理社会学部》

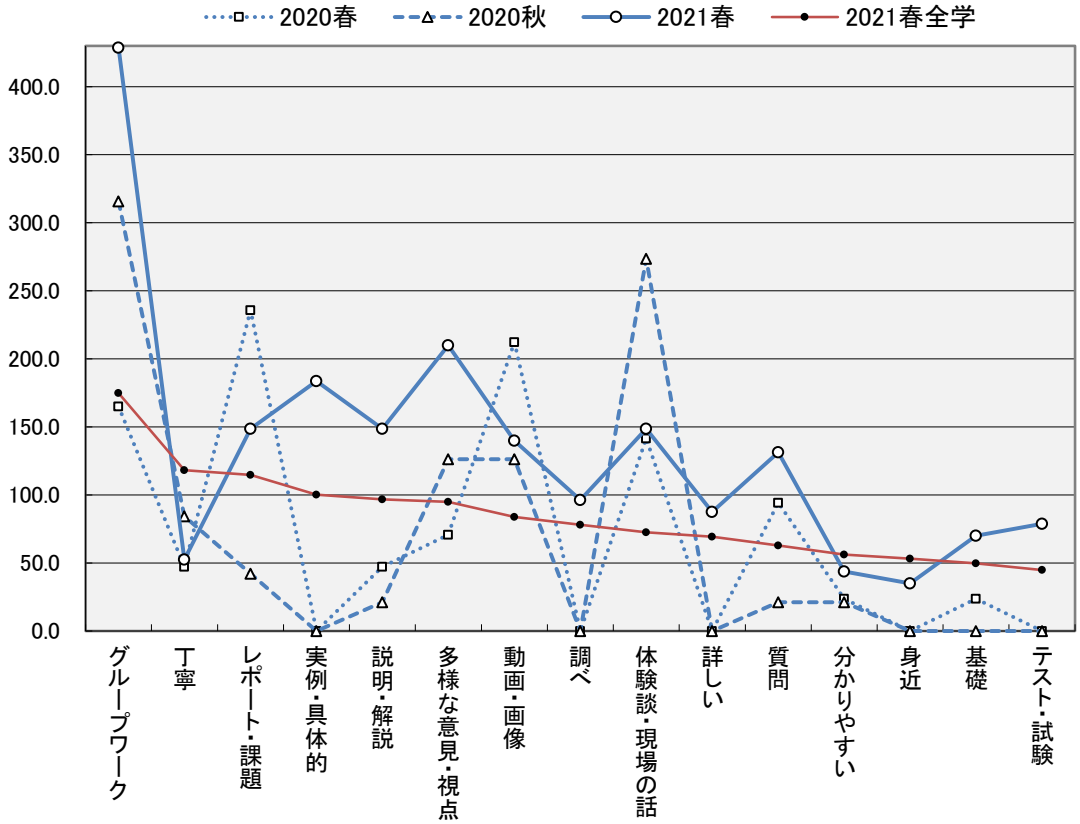


《地域創生学部》

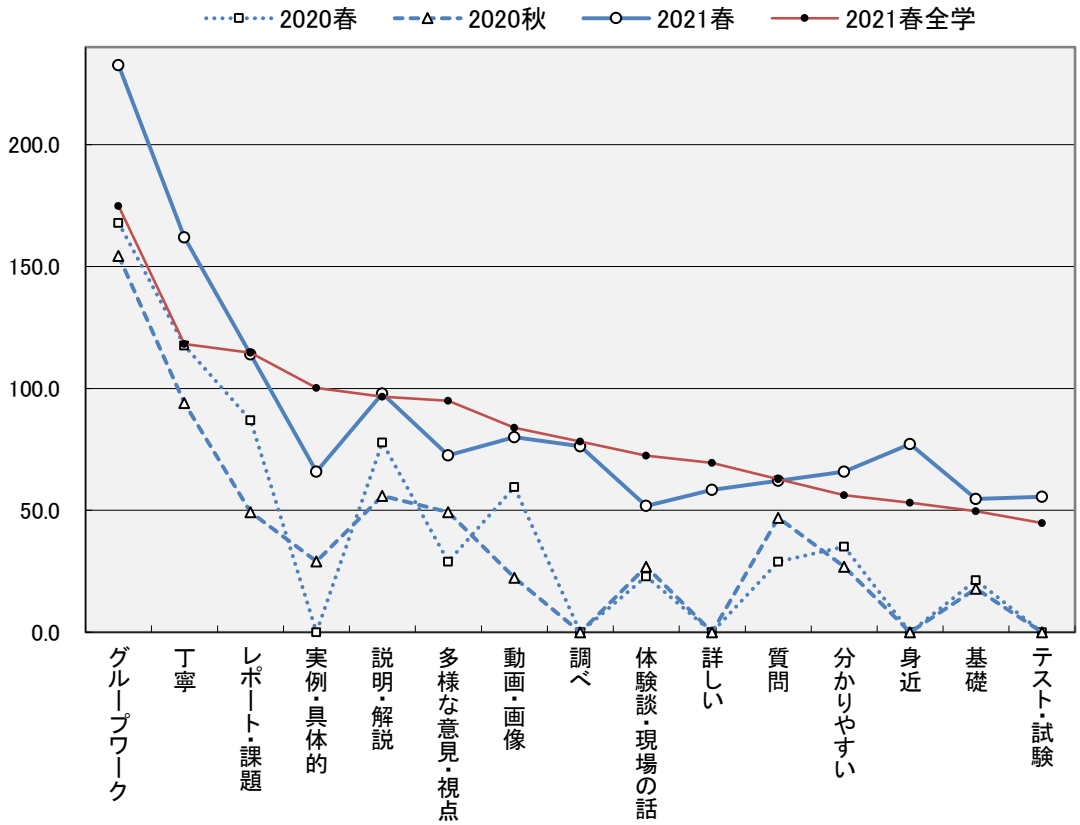


自由記述回答　頻出キーワード　＜効果点＞
【出現率前回比較】 学部別

《社会共生学部》

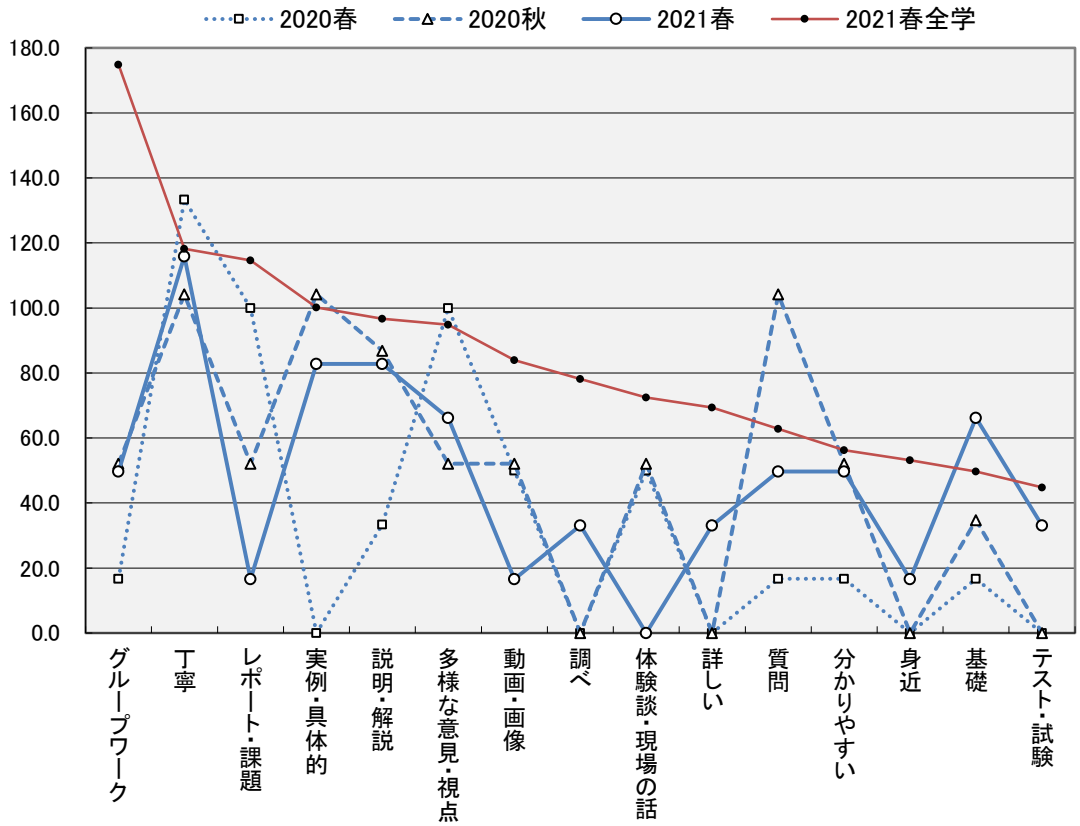


《Ⅰ類・第Ⅱ類科目（学部共通）・Ⅲ類》

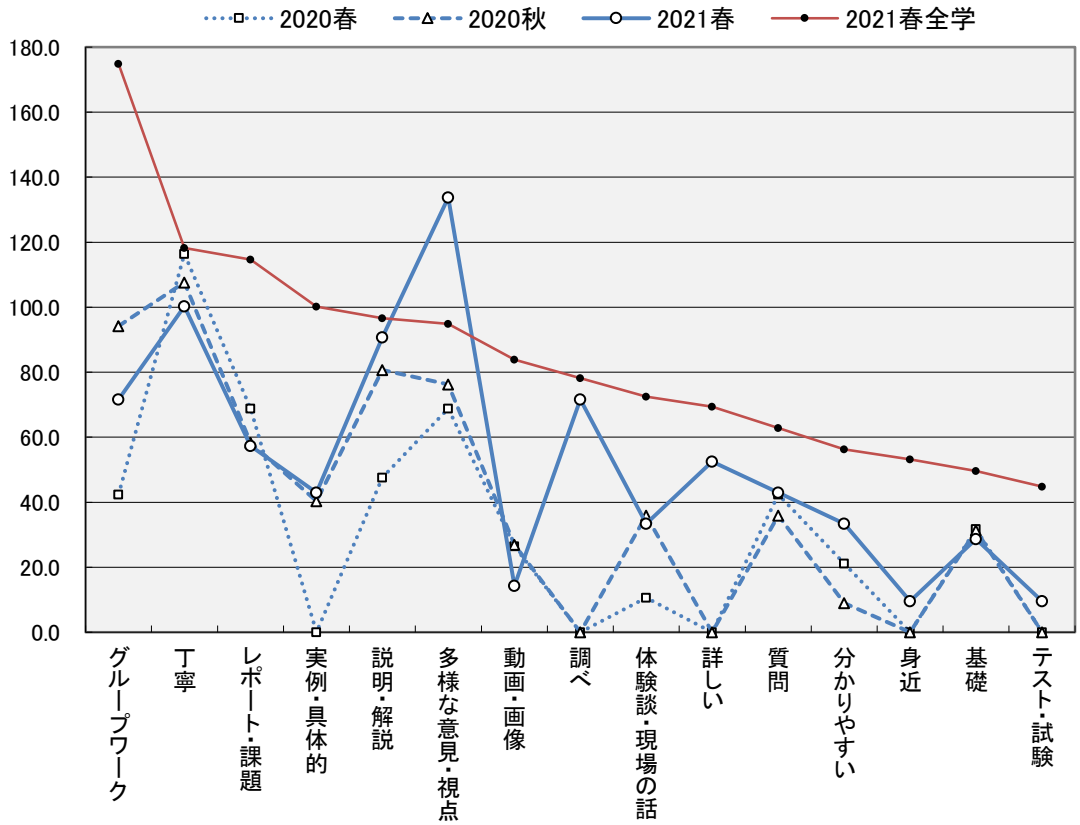


自由記述回答　頻出キーワード　＜効果点＞
【出現率前回比較】 回答人数帯別

《1～3人》

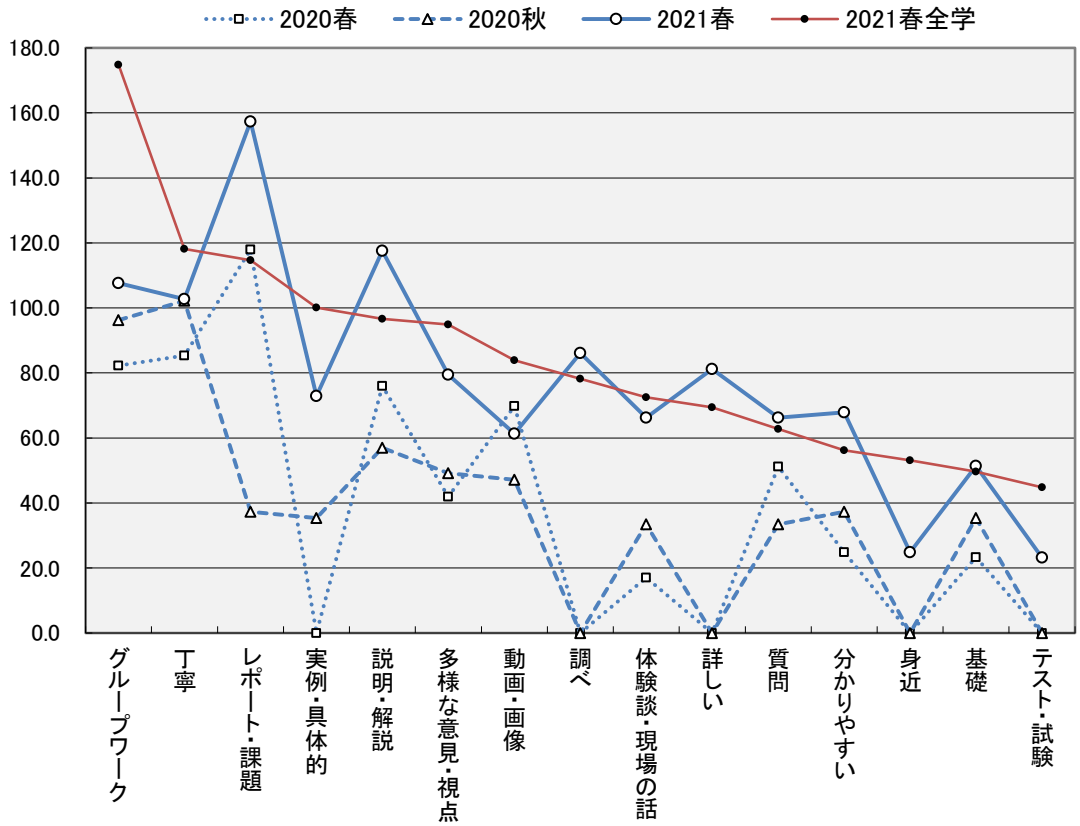


《4～9人》

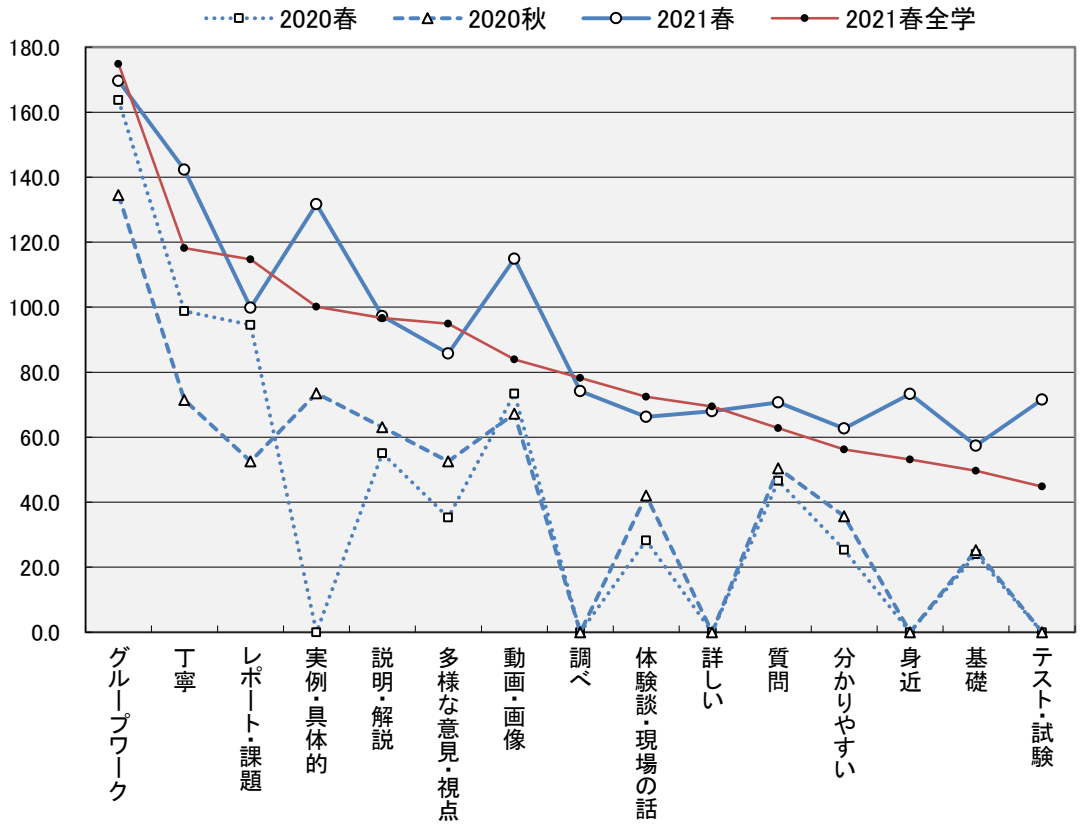


自由記述回答　頻出キーワード　＜効果点＞
【出現率前回比較】 回答人数帯別

《10～27人》

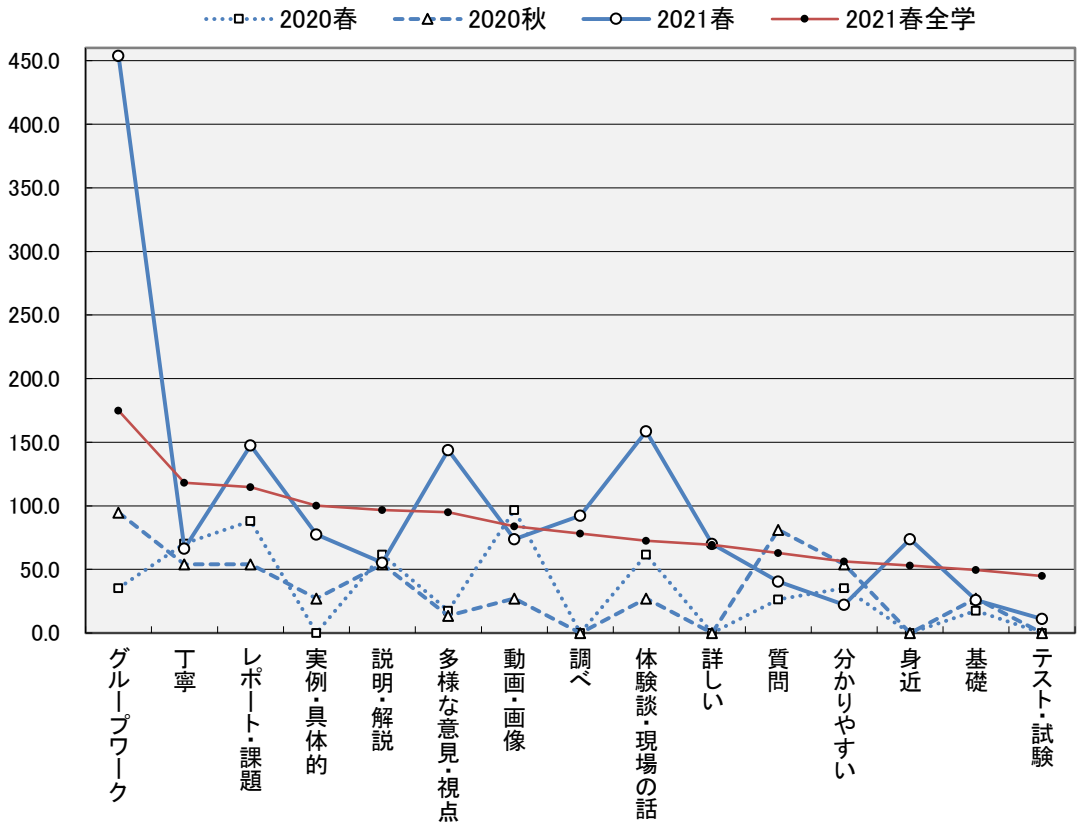


《28～81人》



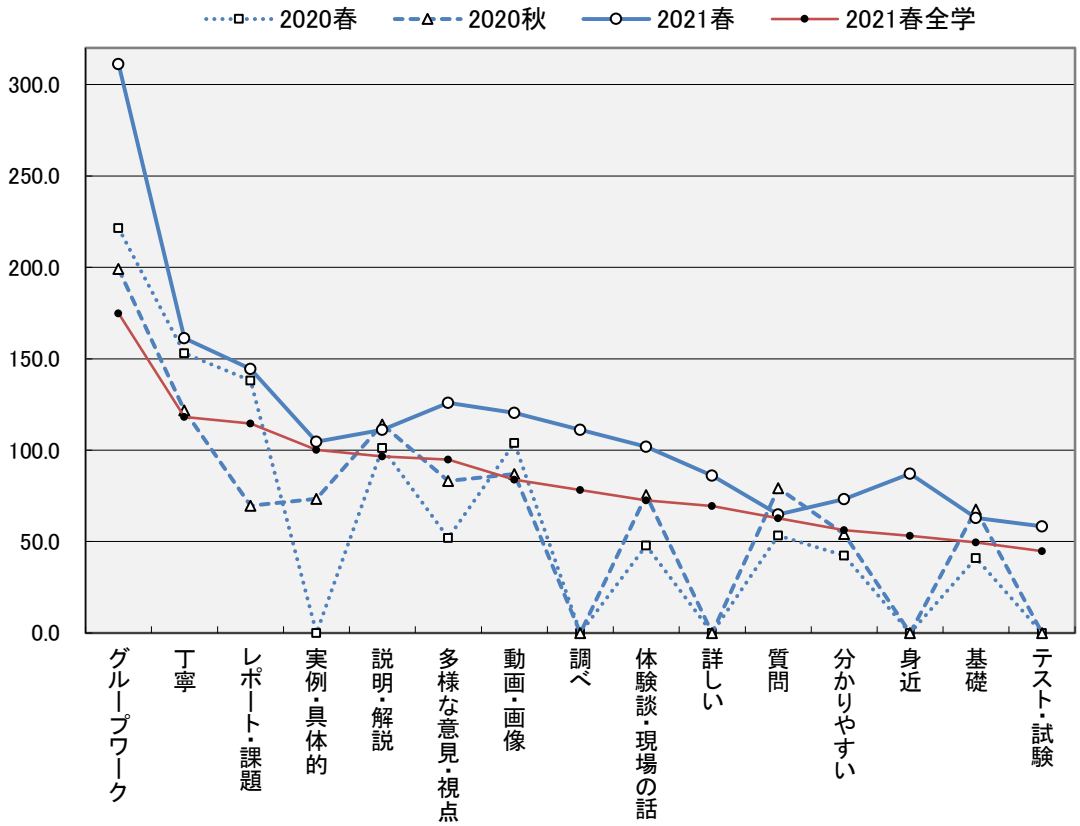
自由記述回答　頻出キーワード　＜効果点＞
【出現率前回比較】 回答人数帯別

《82人～》

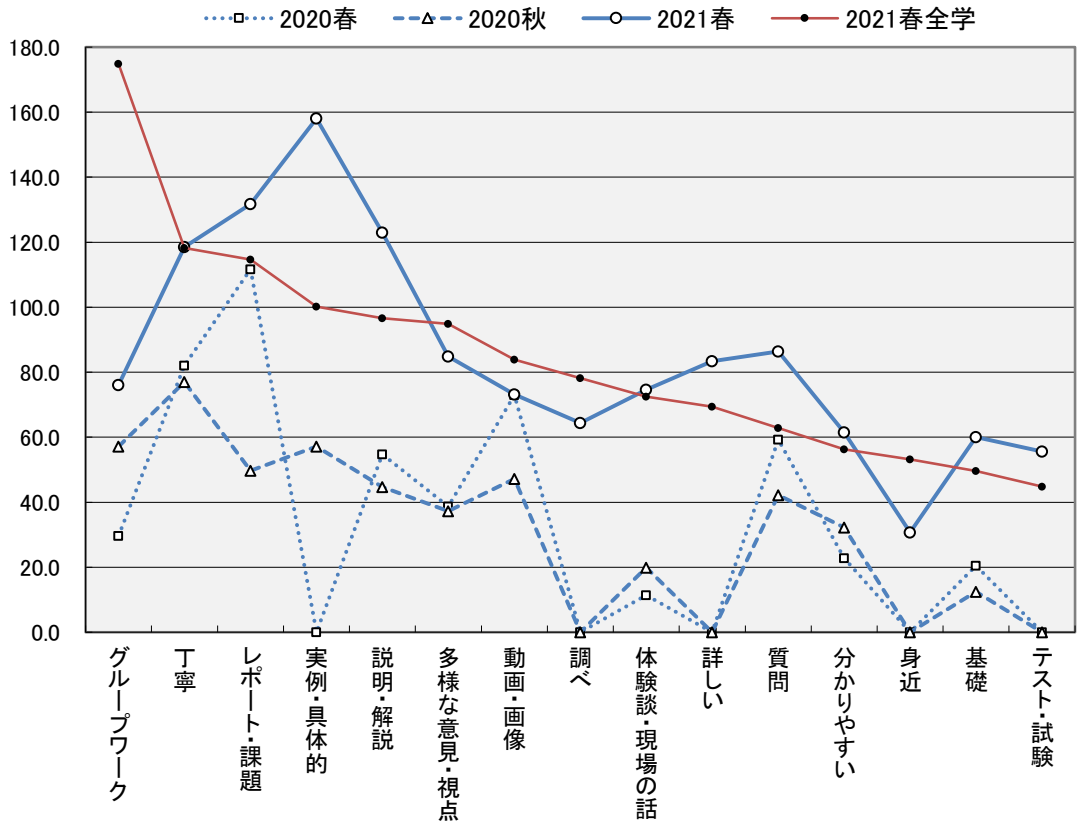


自由記述回答　頻出キーワード　＜効果点＞
【出現率前回比較】 学年別

《1年》

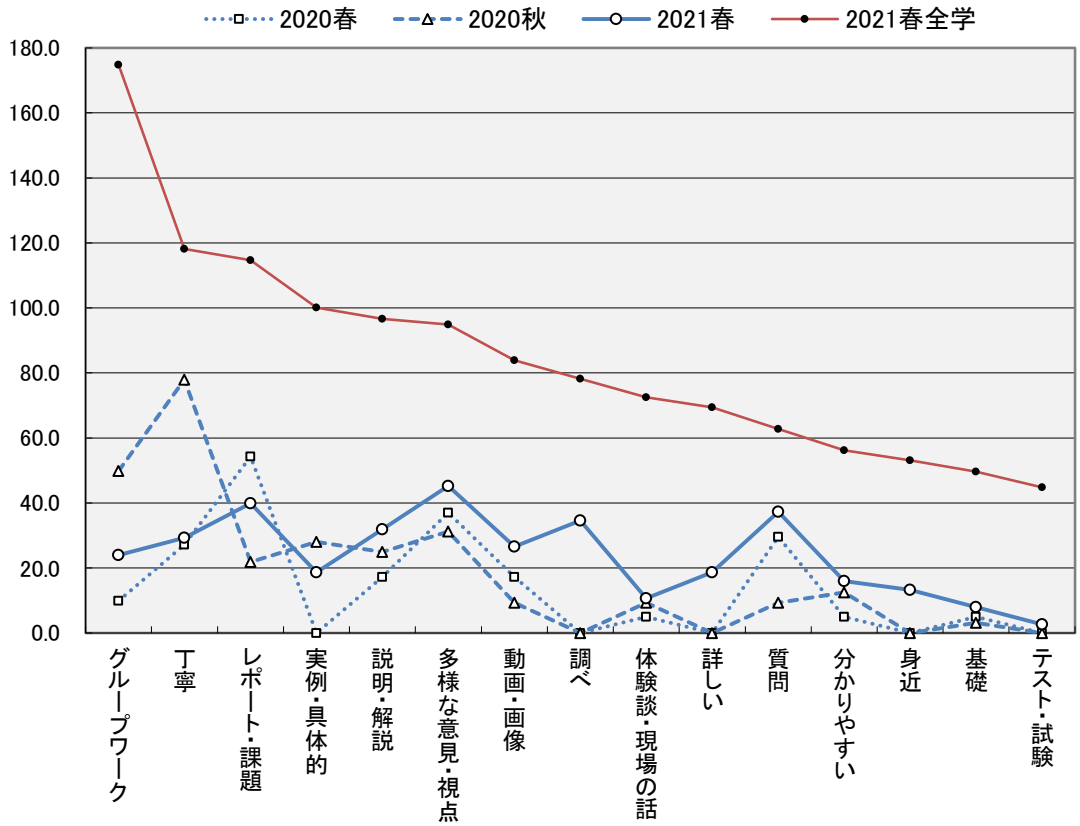


《2年》

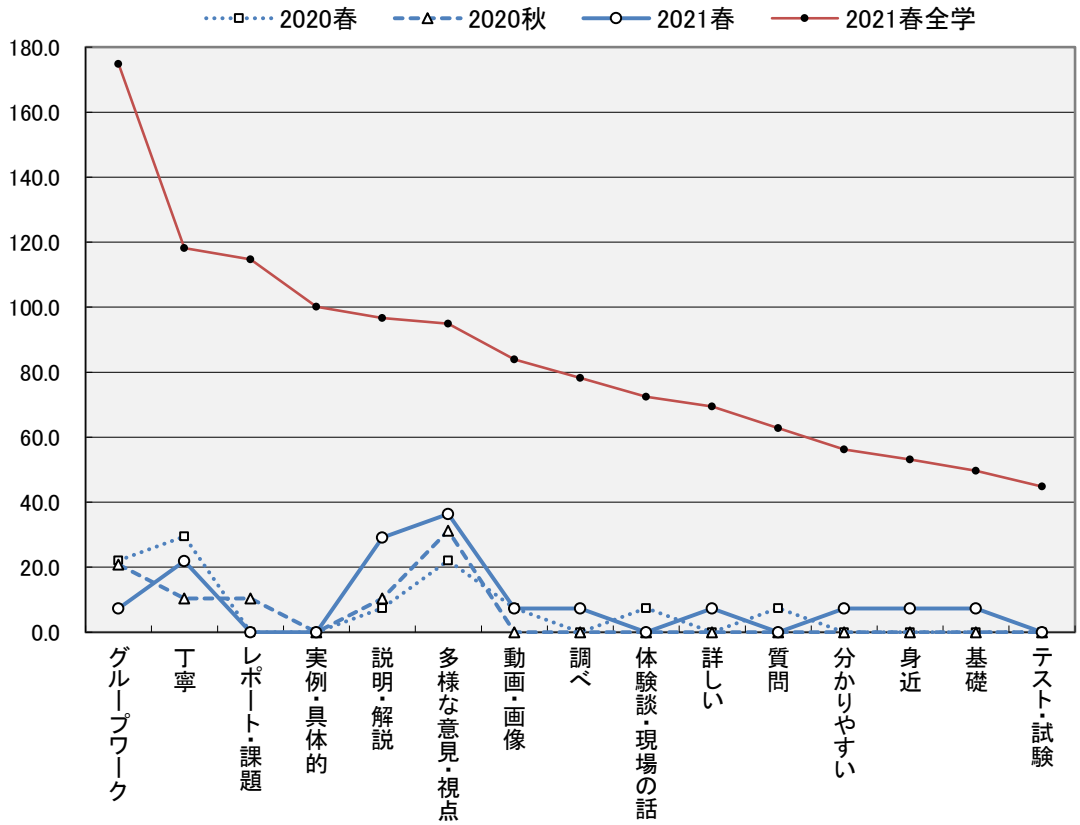


自由記述回答　頻出キーワード　＜効果点＞
【出現率前回比較】 学年別

《3年》



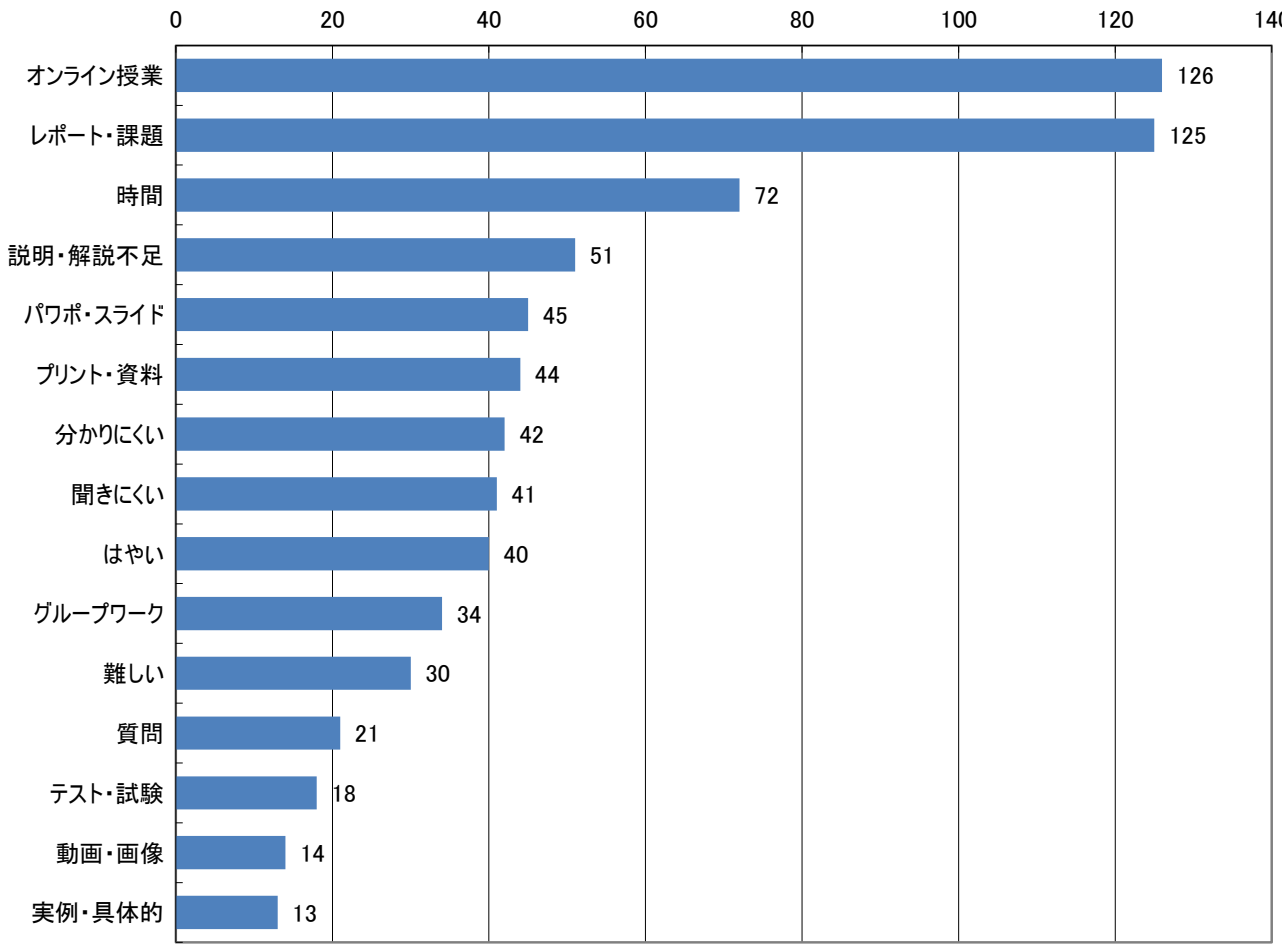
《4年》



【改善点】

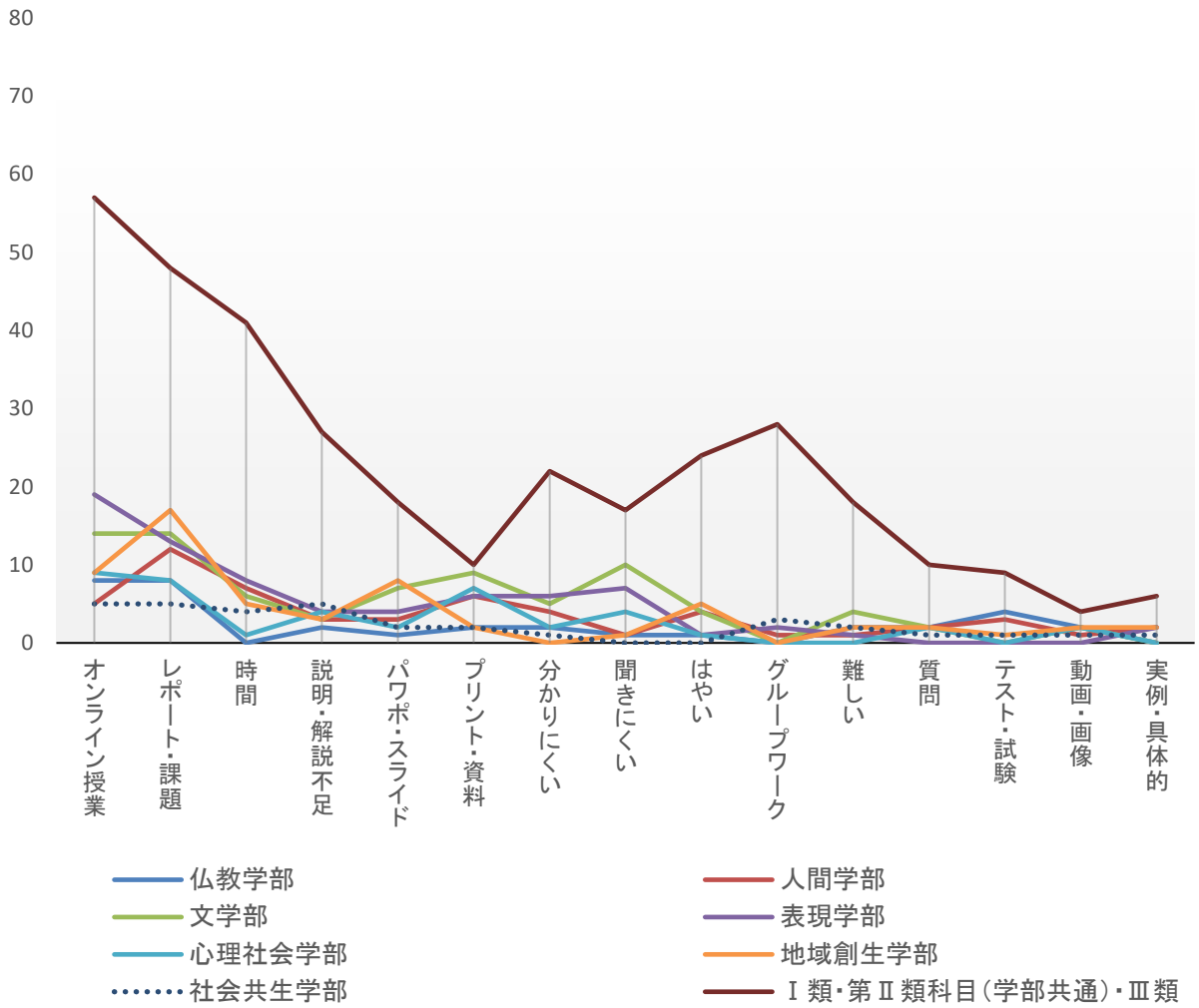
改善できる点

自由記述回答　頻出キーワード　＜改善点＞
【全学】

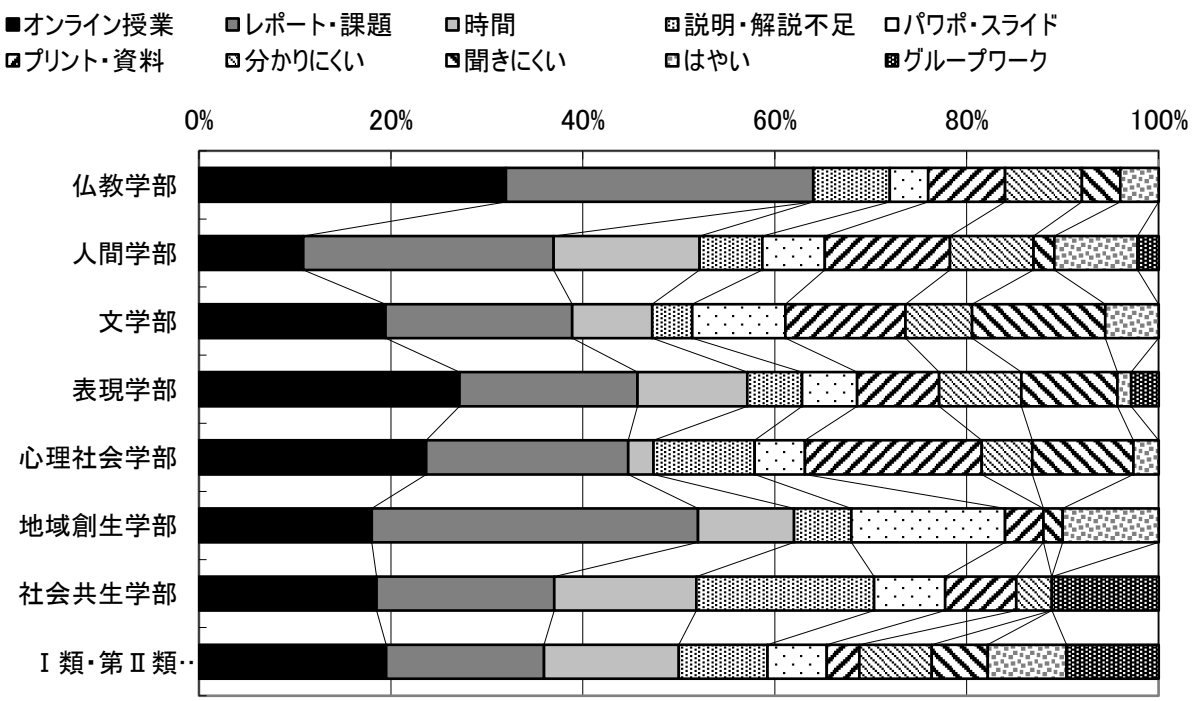


キーワード	主な内容	出現数
オンライン授業	動画配信してほしかった／動画配信期間が短かった／ほかの方法（ツール）がよかった／課題配信型ではなく、オンライン授業をしてほしかった／オンライン授業の進め方がよくなかった／対面の授業がよかった／（先生側・生徒側の）通信・機器のトラブルがあった／オンライン授業を行うにあたり先生の知識が不足していた	126
レポート・課題	レポート・課題の出し方や評価方法を改善してほしい／課題の答えが欲しい／課題が多い、難しい／レポート・課題の提出方法を説明して欲しい	125
時間	時間配分を改善してほしい／時間を守ってほしい／作業時間が足りない／授業時間以外の負担が大きい ※「スライドを変える時間が短い」は「はやい」に、「テスト時間が短い、足りない」は「テスト・試験」に分類	72
説明・解説不足	（授業について）説明・解説が不足・不十分 ※「レポート・課題の提出方法を説明して欲しい」は、「レポート・課題」に分類	51
パワポ・スライド	パワーポイント・スライドが分かりにくい、見にくい／パワーポイント・スライドの内容、配布方法を改善してほしい ※「画面切り替えがはやくて読みにくい」は「はやい」に分類	45
プリント・資料	プリント・資料が分かりにくい、見にくい／プリント・資料の内容、配布方法を改善してほしい／プリント・資料を配布されるだけの授業で理解しづらかった	44
分かりにくい	授業が分かりにくい ※分かりにくい理由の記載があるものは各項目に分類	42
聞きにくい	声が小さい、聞き取りづらい／声が大きすぎる／（声が小さいので）マイクを使ってほしい／（うるさいので）マイクを使わないでほしい ※「早口で聞きにくい」は「はやい」に、「通信環境の影響で聞きにくい」は「オンライン授業」に分類	41
はやい	進行が早い、早口、画面切り替えが早いなどの理由で授業についていけない	40
グループワーク	グループワークの回数、分け方、実施方法を改善してほしい	34
難しい	授業・教科書・資料等が難しすぎる	30
質問	質問しづらい／質問にきちんと対応してくれない／質問に対しての回答に満足できない	21
テスト・試験	テストの実施方法を改善してほしい／テストが難しい／テスト時間が短い、足りない テスト中はミュートにしてほしい	18
動画・画像	動画・画像が分かりにくい（見えにくい）／動画・画像が欲しかった	14
実例・具体的	実例・具体例をあげてほしかった／具体的に説明してほしかった	13

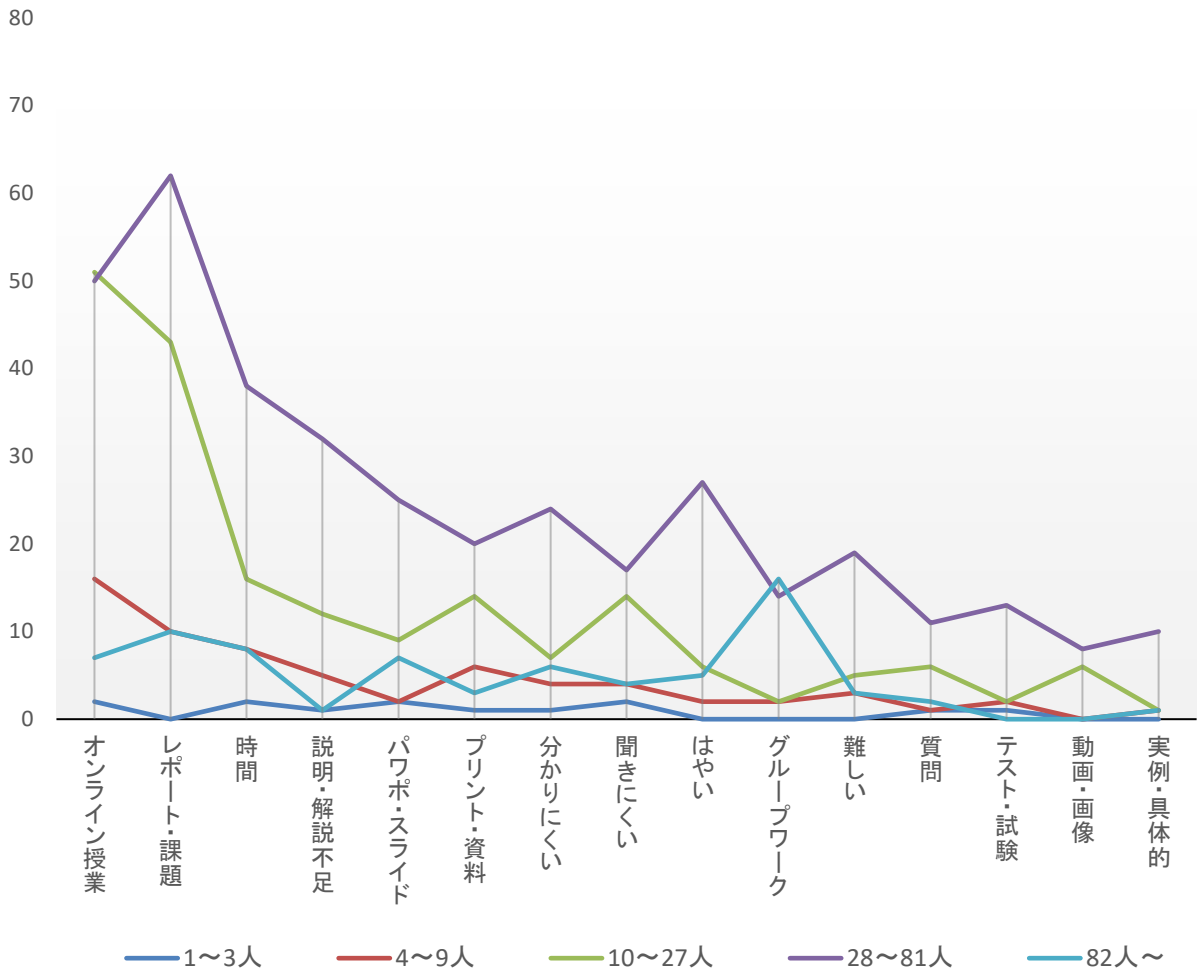
自由記述回答　頻出キーワード　＜改善点＞
【学部別】



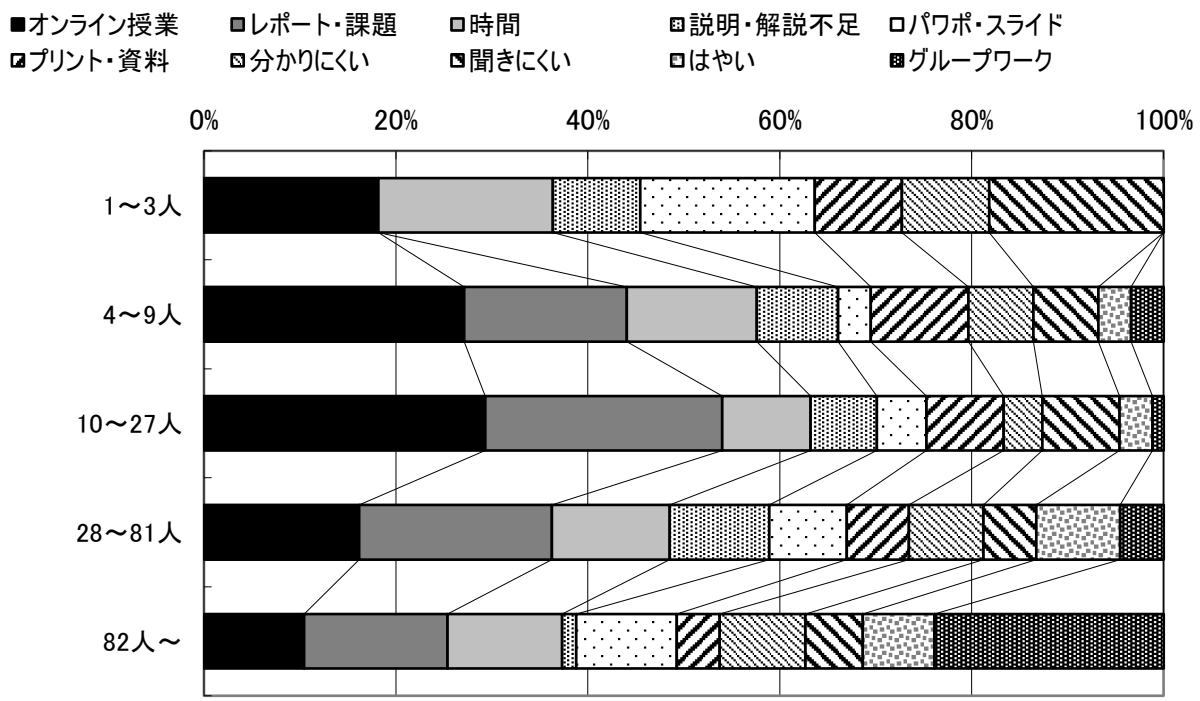
上位10項目の学部別割合



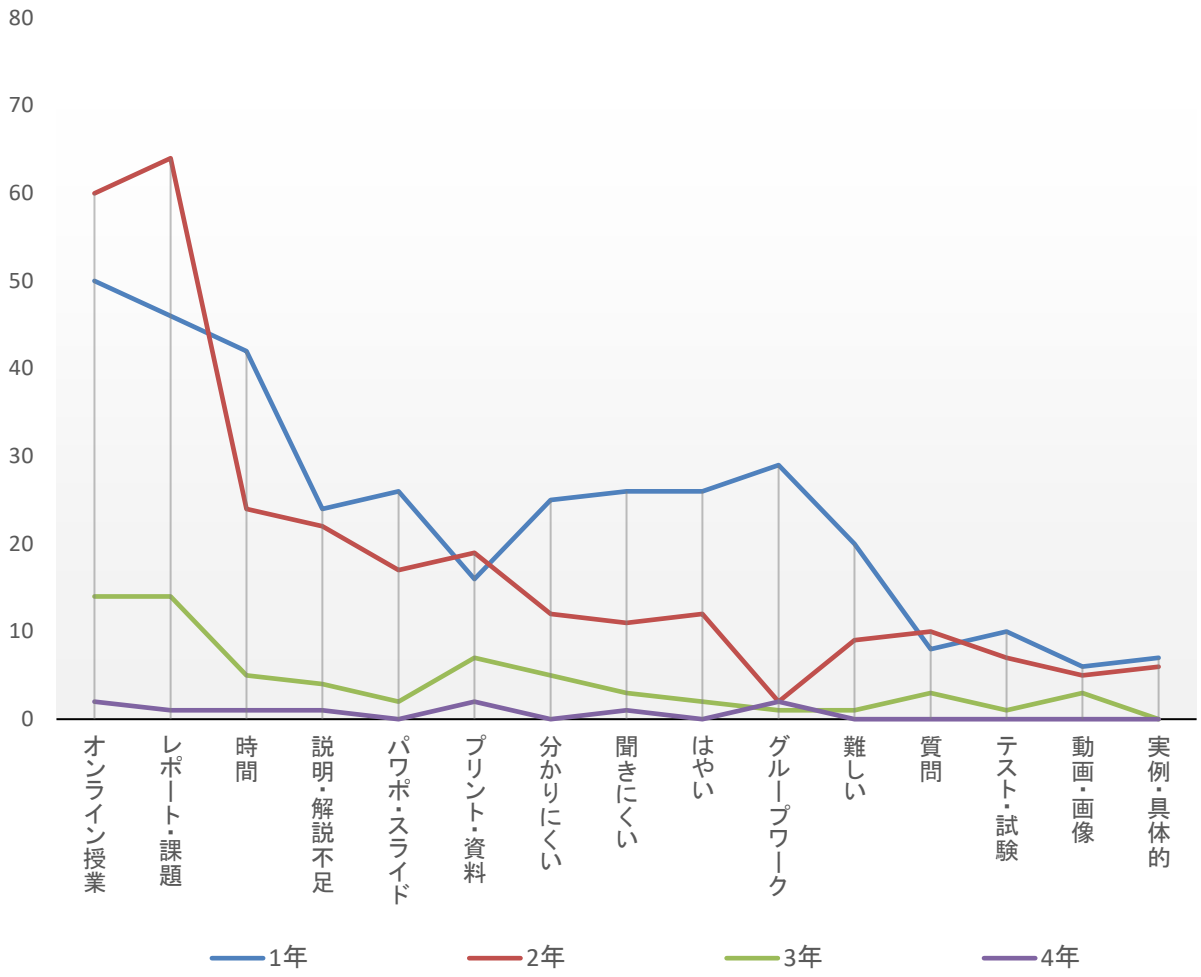
自由記述回答　頻出キーワード　＜改善点＞
【回答人数帯別】



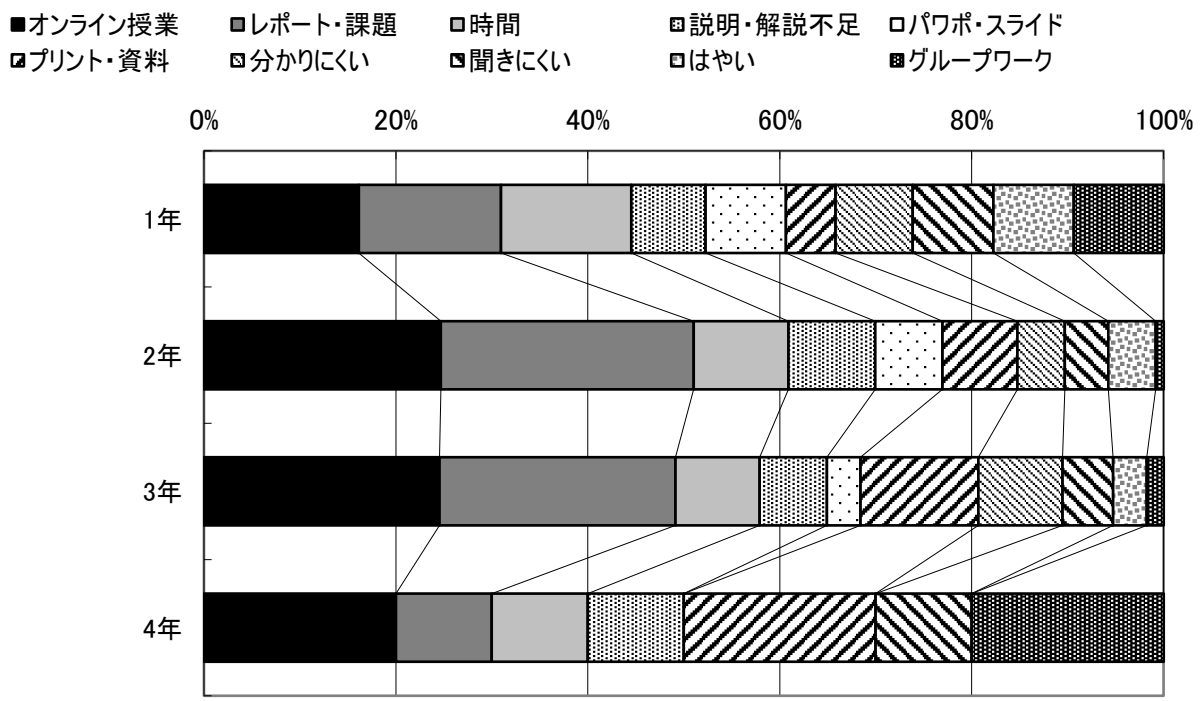
上位10項目の回答人数帯別割合



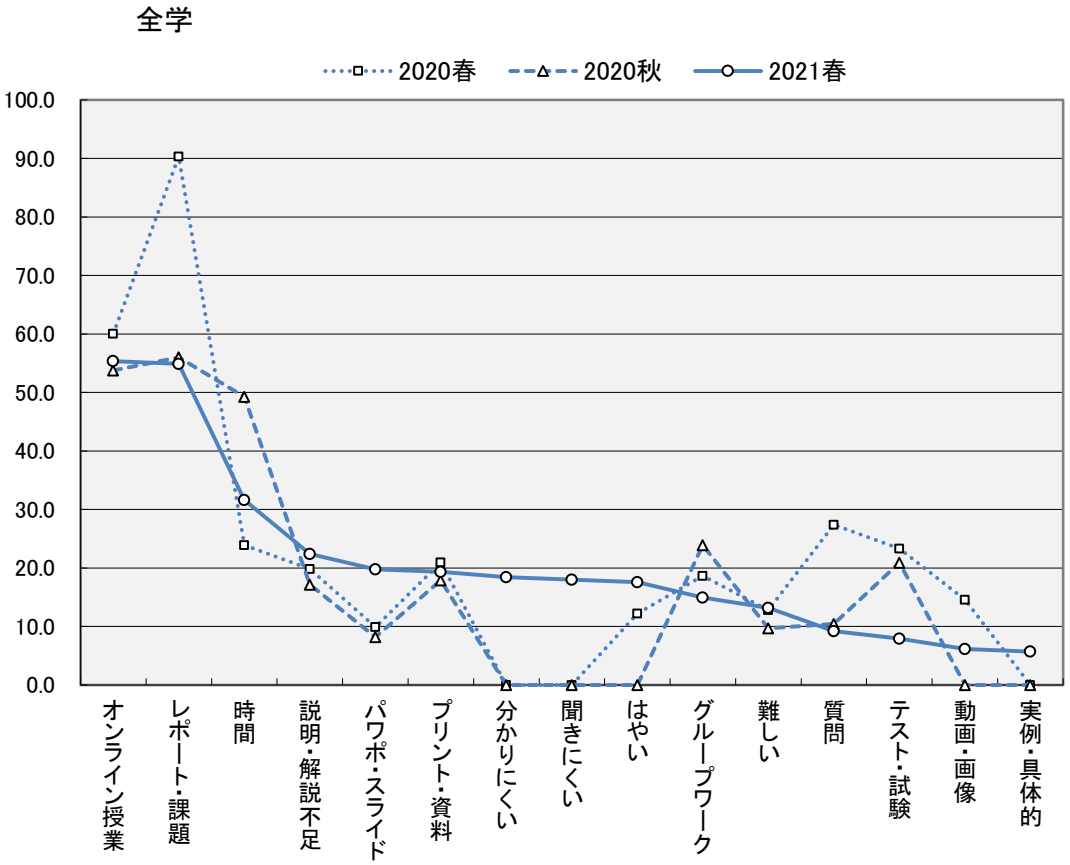
自由記述回答　頻出キーワード　＜改善点＞
【学年別】



上位10項目の学年別割合



自由記述回答　頻出キーワード　＜改善点＞
【出現率前回比較】 全学

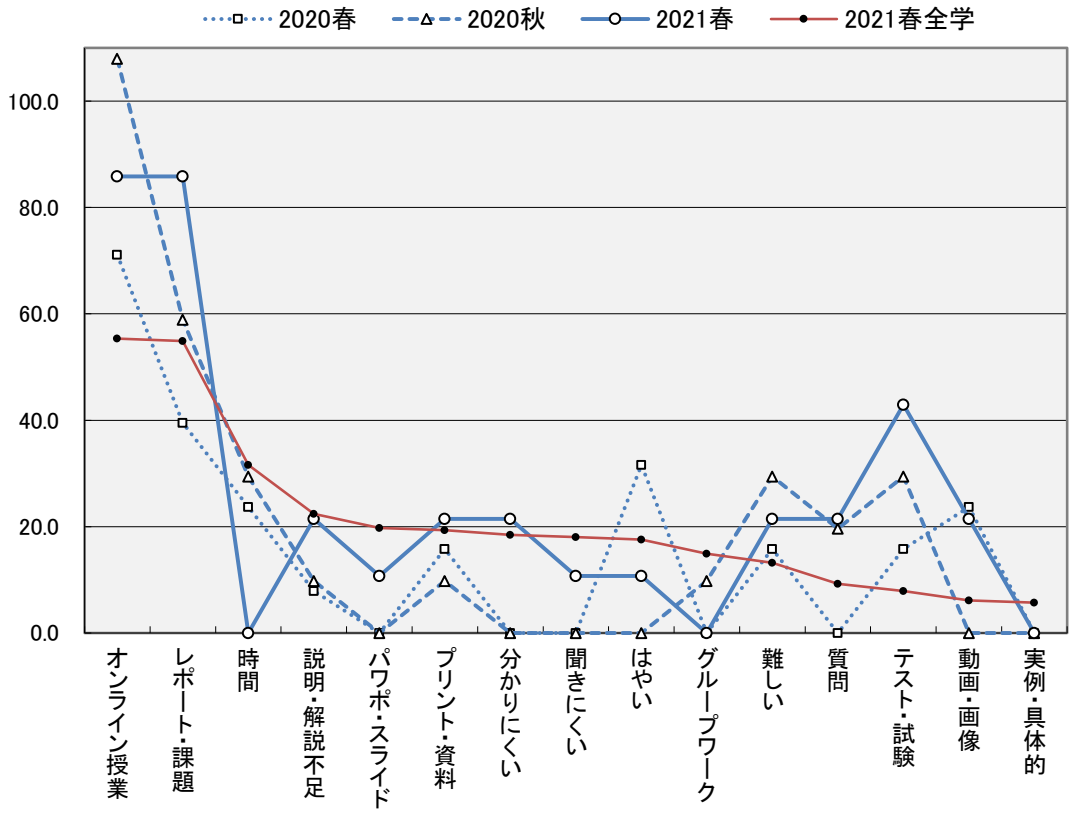


「出現率」について

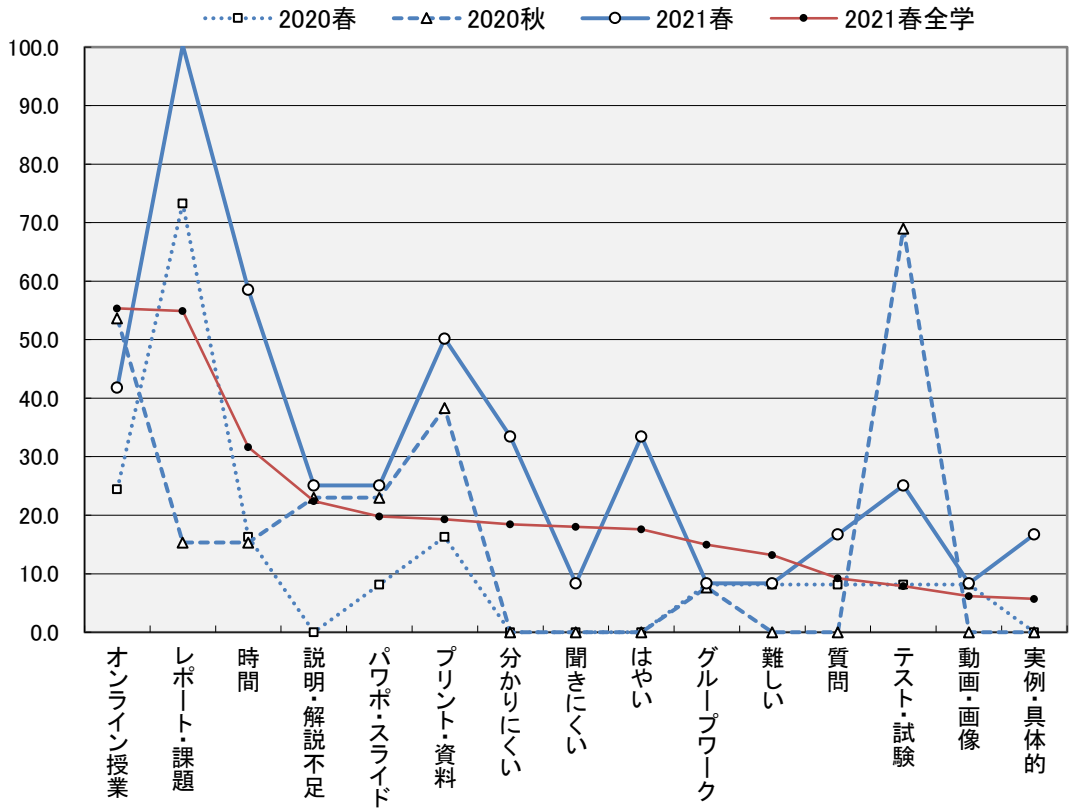
- 自由記述回答の頻出キーワードに関する前回比較では、出現回数ではなく出現率により比較を行っています。
  総回答数が春学期と秋学期では異なり、単純な出現数では比較ができないためです。
  出現率は下記の式で計算されます。
  出現率＝出現数／回答者数×10^4
  （回答者数：授業アンケートの回答者数で自由記述回答の記載者数ではありません。）
- 次ページ以降の学部別、回答数区分別、学年別における出現率算出の為の回答者数は、それぞれのカテゴリーにおける回答者数を使用しています。

自由記述回答　頻出キーワード　＜改善点＞
【出現率前回比較】 学部別

《仏教学部》

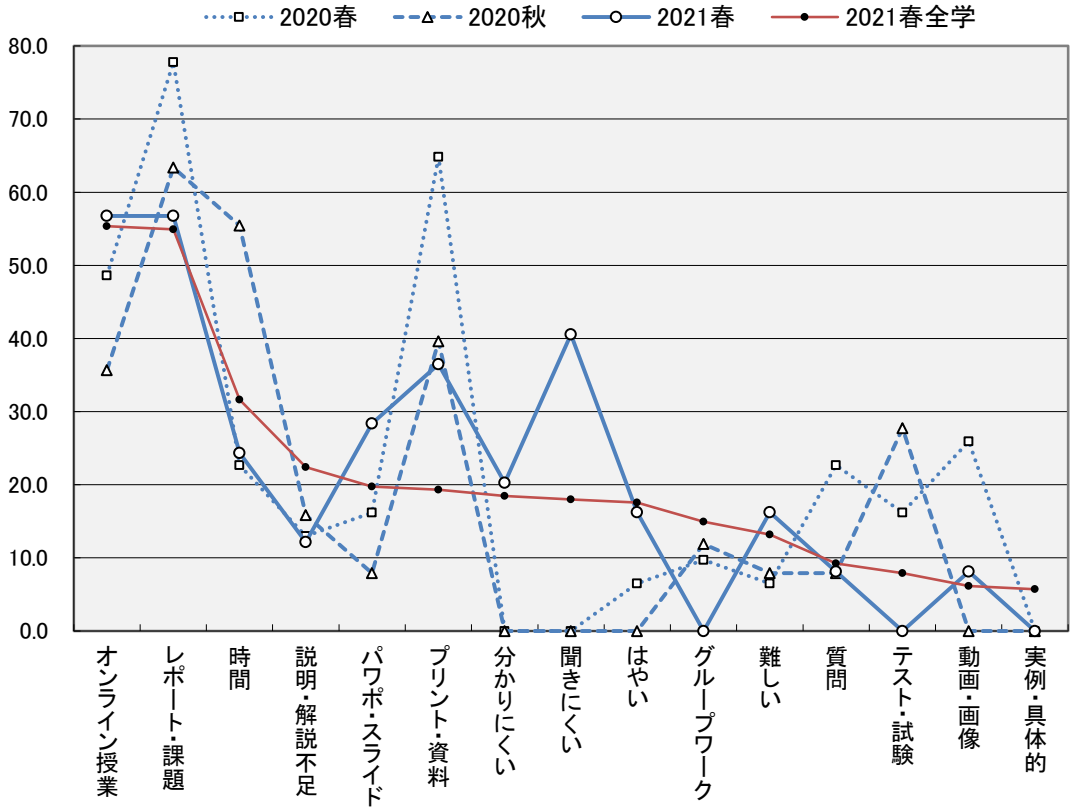


《人間学部》

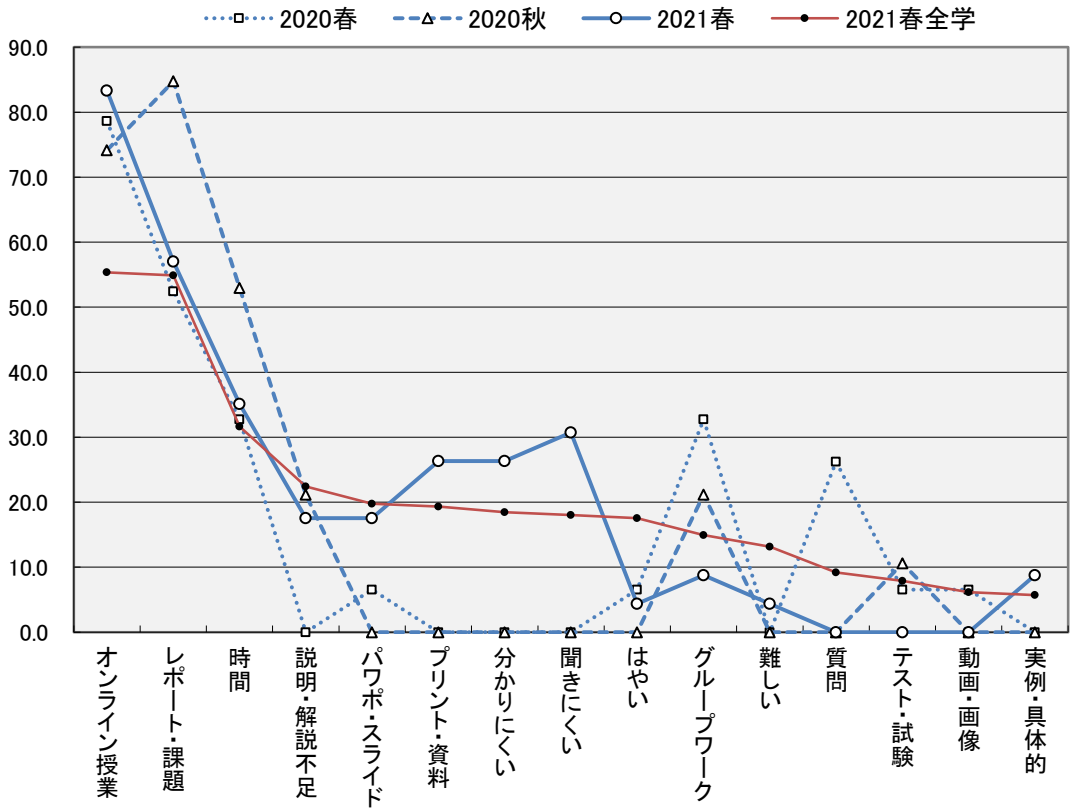


自由記述回答　頻出キーワード　＜改善点＞
【出現率前回比較】 学部別

《文学部》

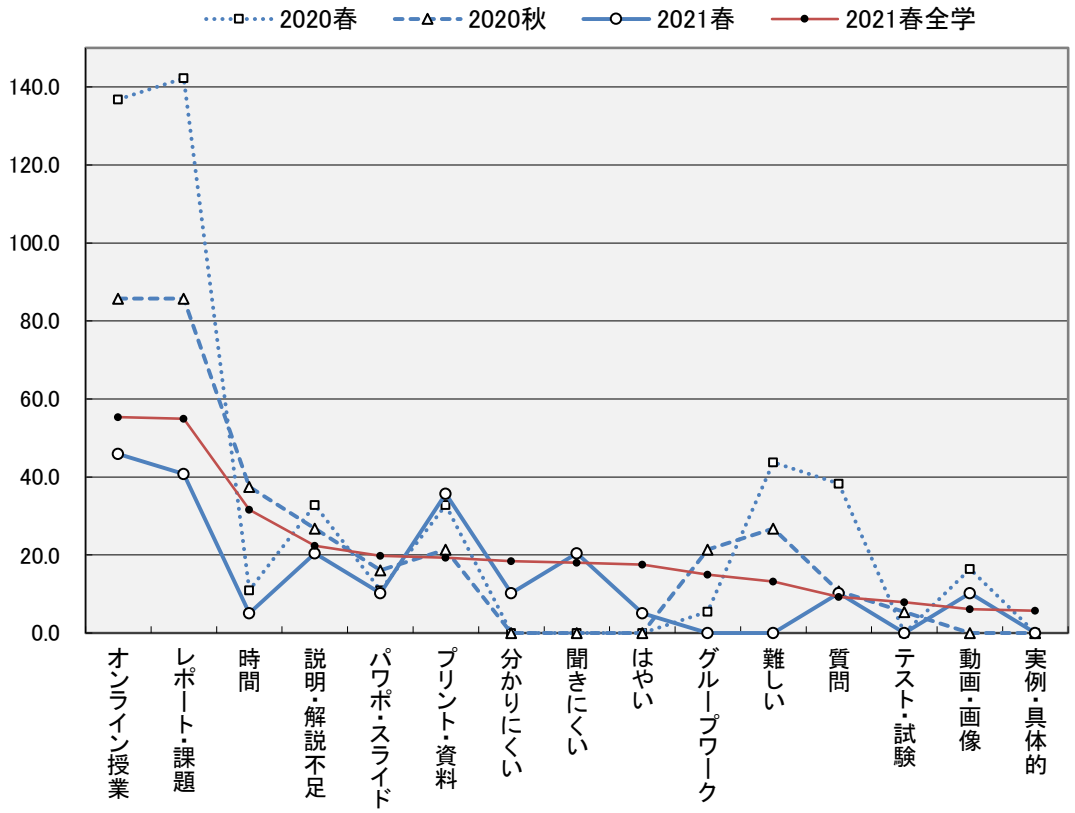


《表現学部》

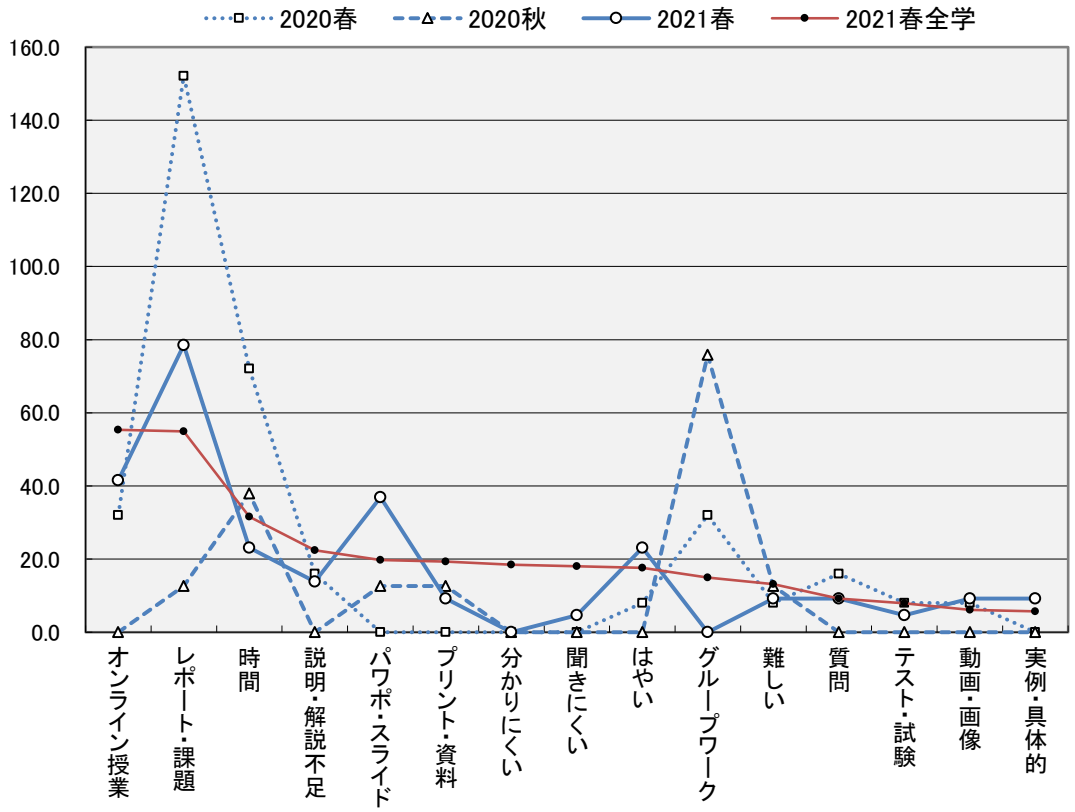


自由記述回答　頻出キーワード　＜改善点＞
【出現率前回比較】 学部別

《心理社会学部》

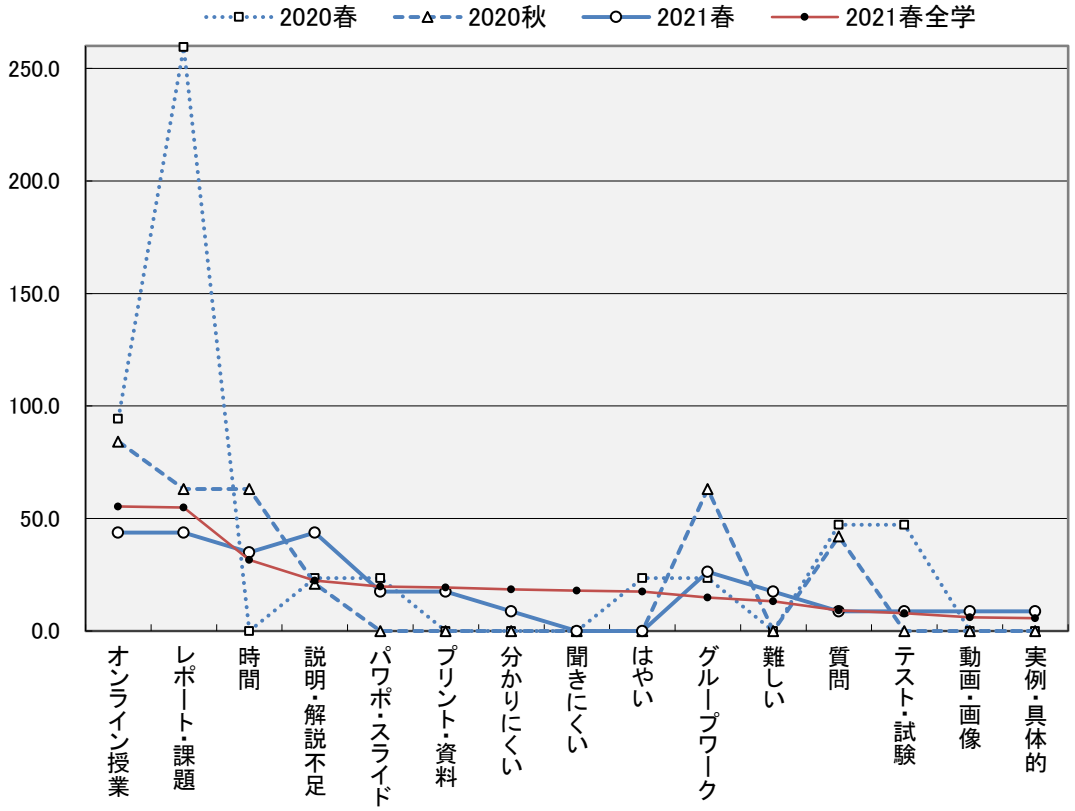


《地域創生学部》

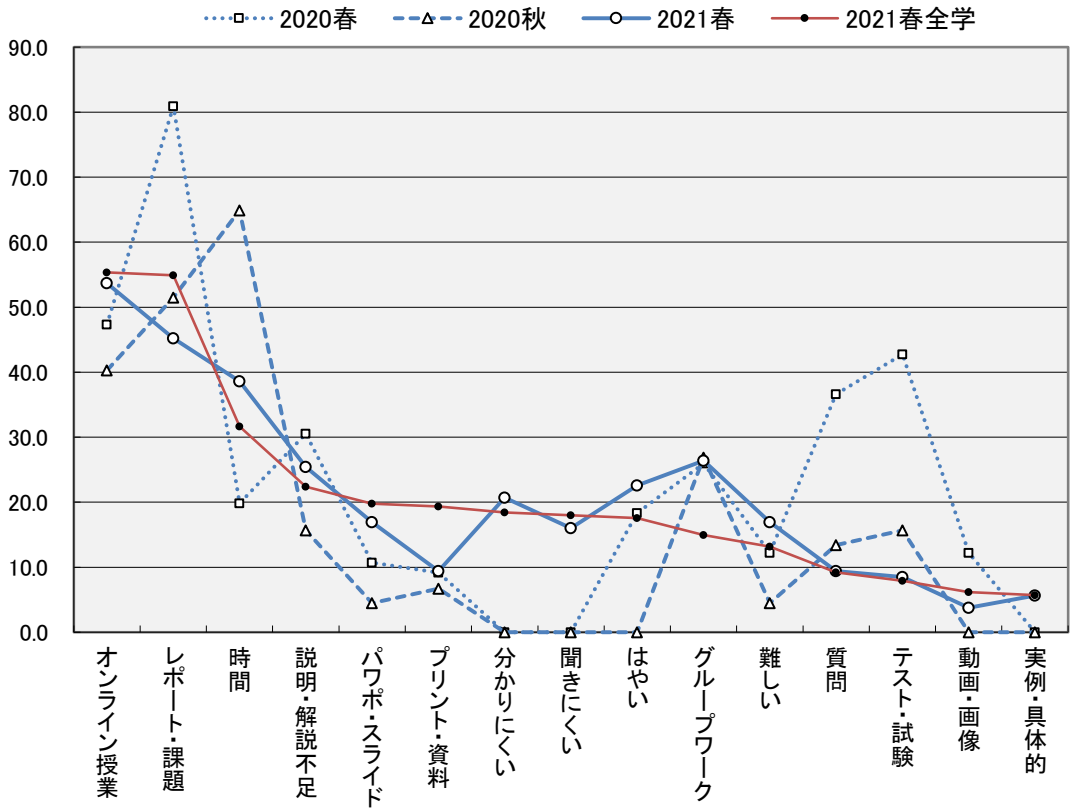


自由記述回答　頻出キーワード　＜改善点＞
【出現率前回比較】 学部別

《社会共生学部》

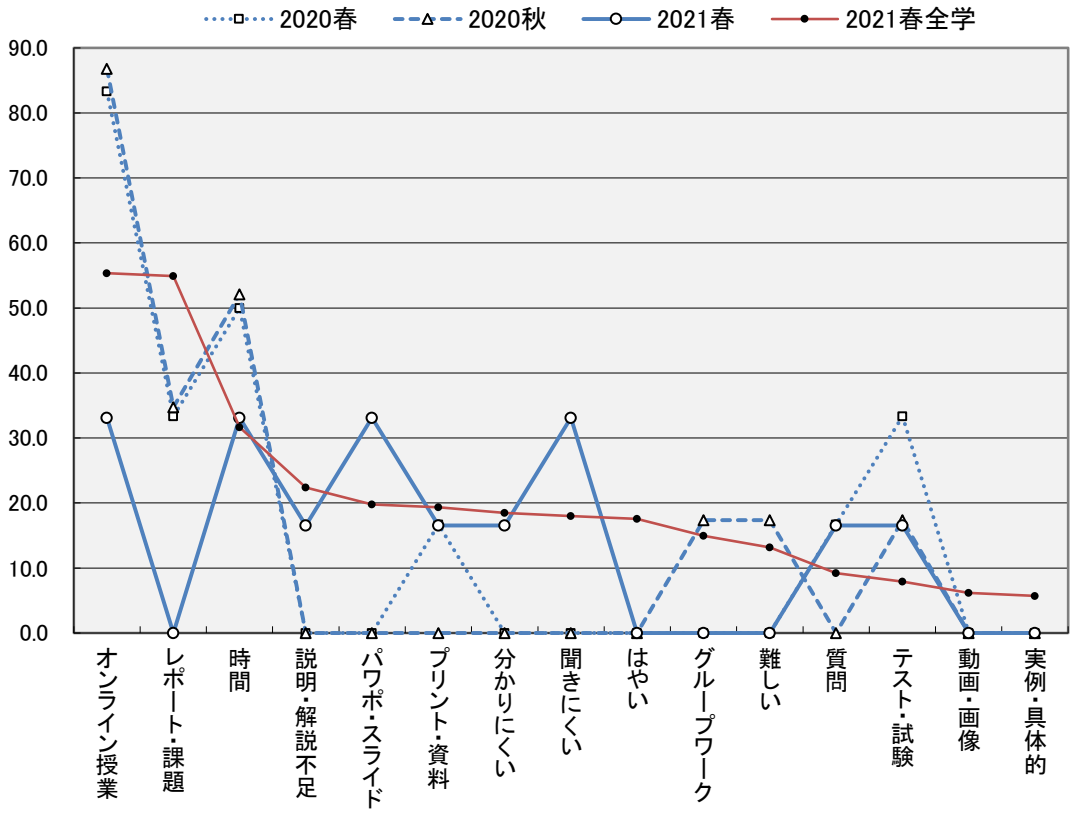


《Ⅰ類・第Ⅱ類科目（学部共通）・Ⅲ類》

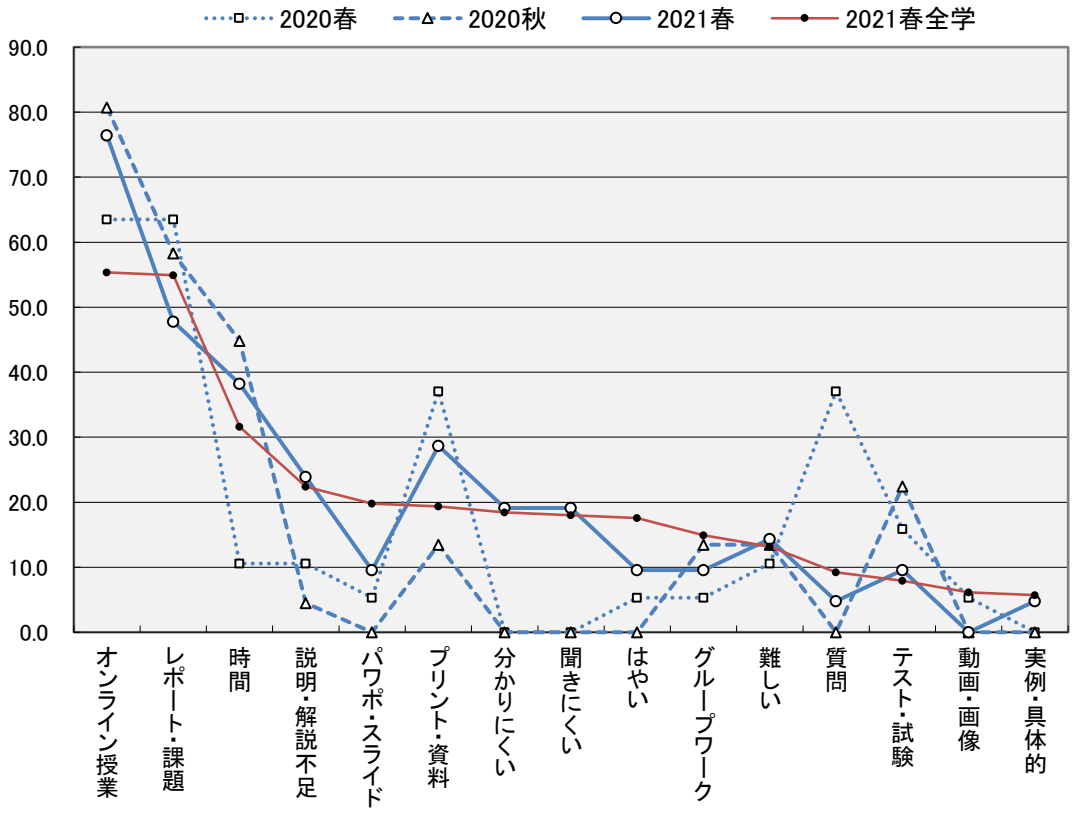


自由記述回答　頻出キーワード　＜改善点＞
【出現率前回比較】 回答人数帯別

《1～3人》

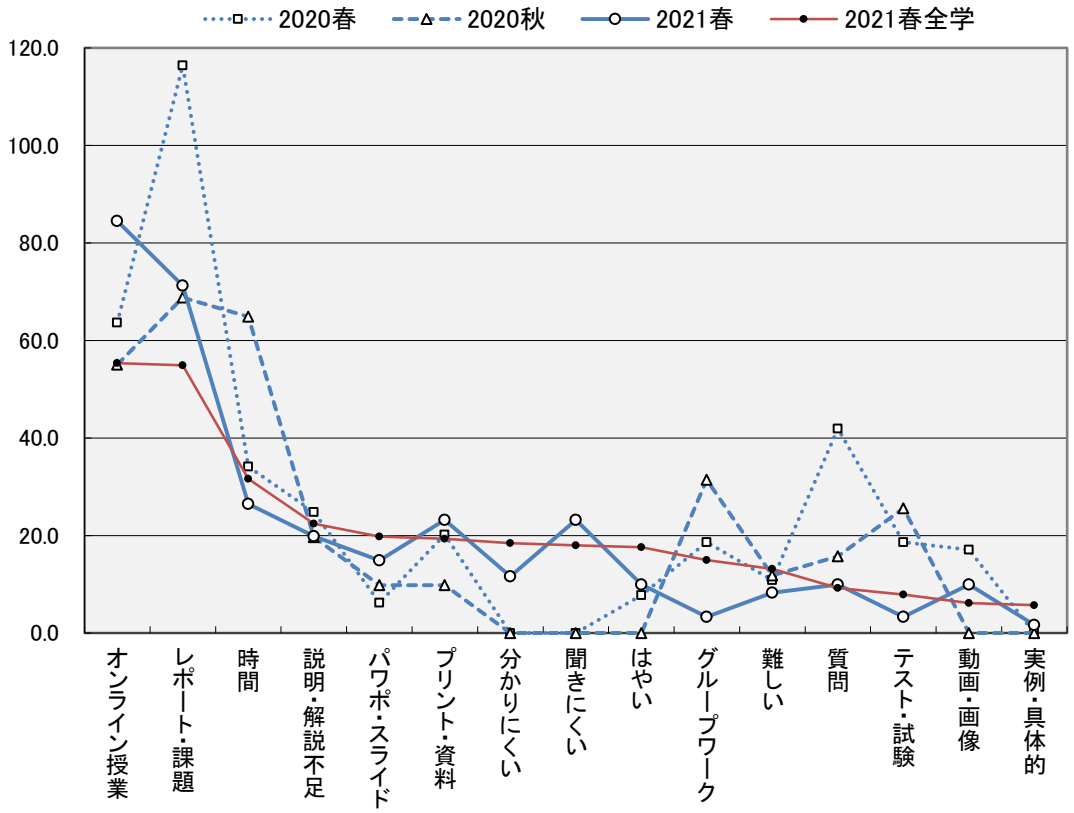


《4～9人》

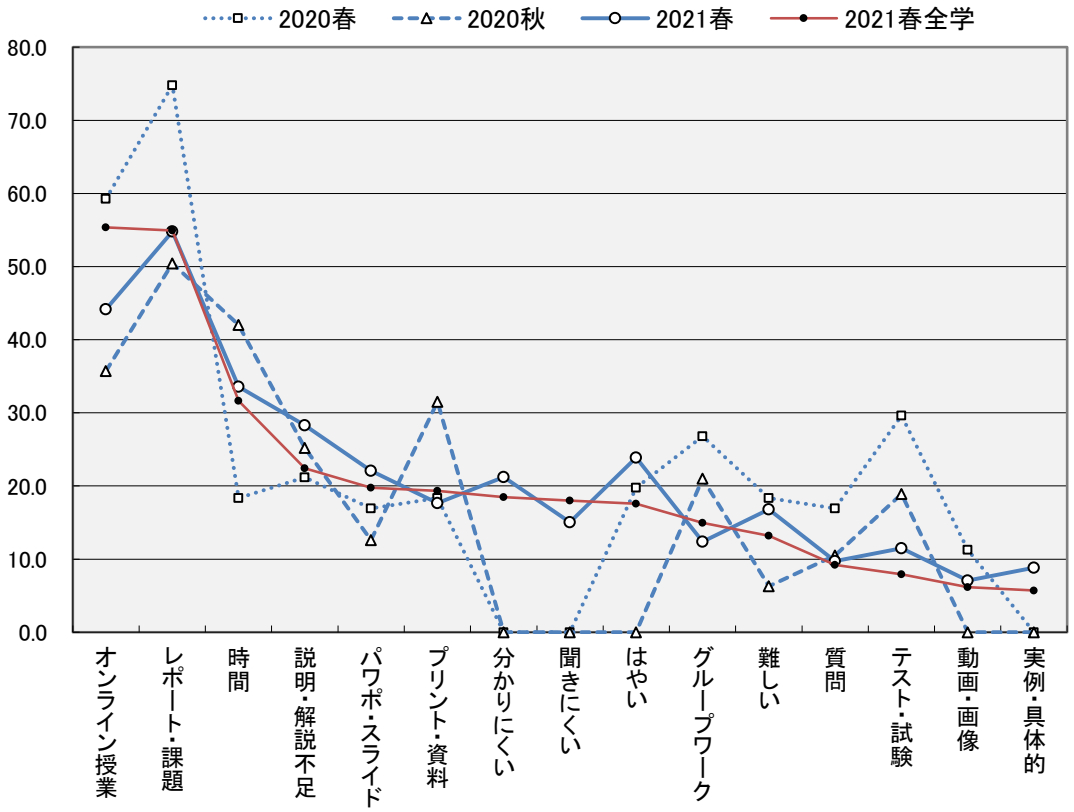


自由記述回答　頻出キーワード　＜改善点＞
【出現率前回比較】 回答人数帯別

《10～27人》

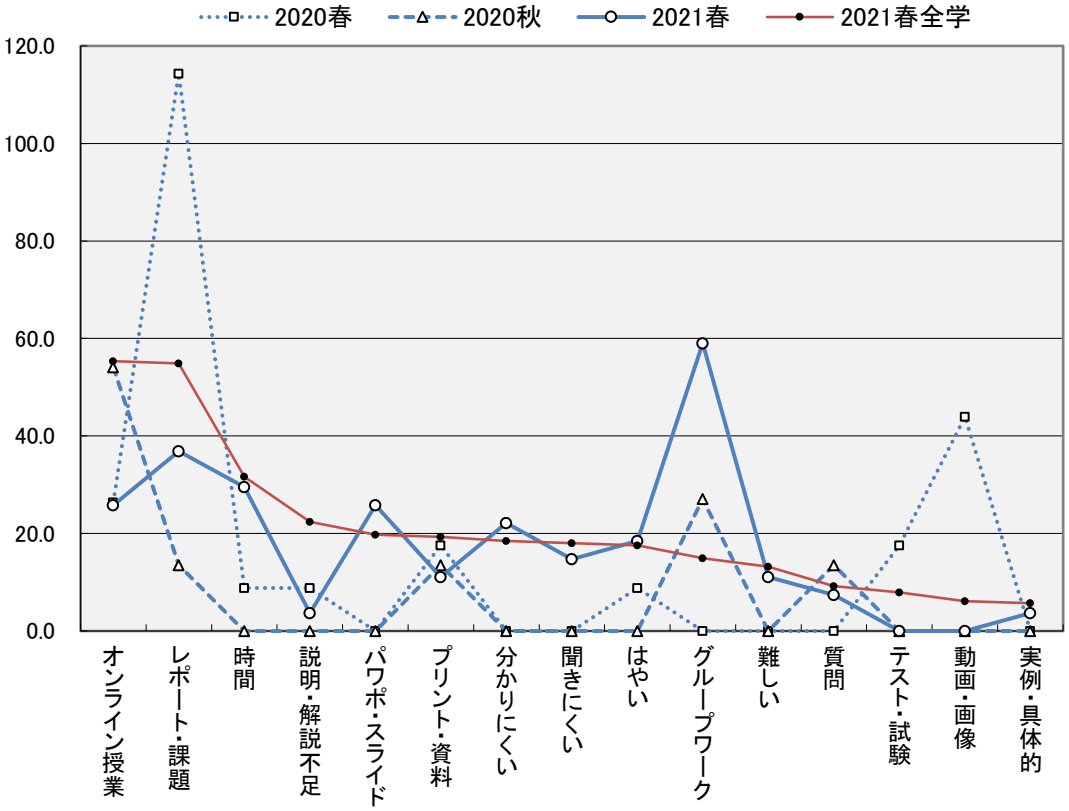


《28～81人》



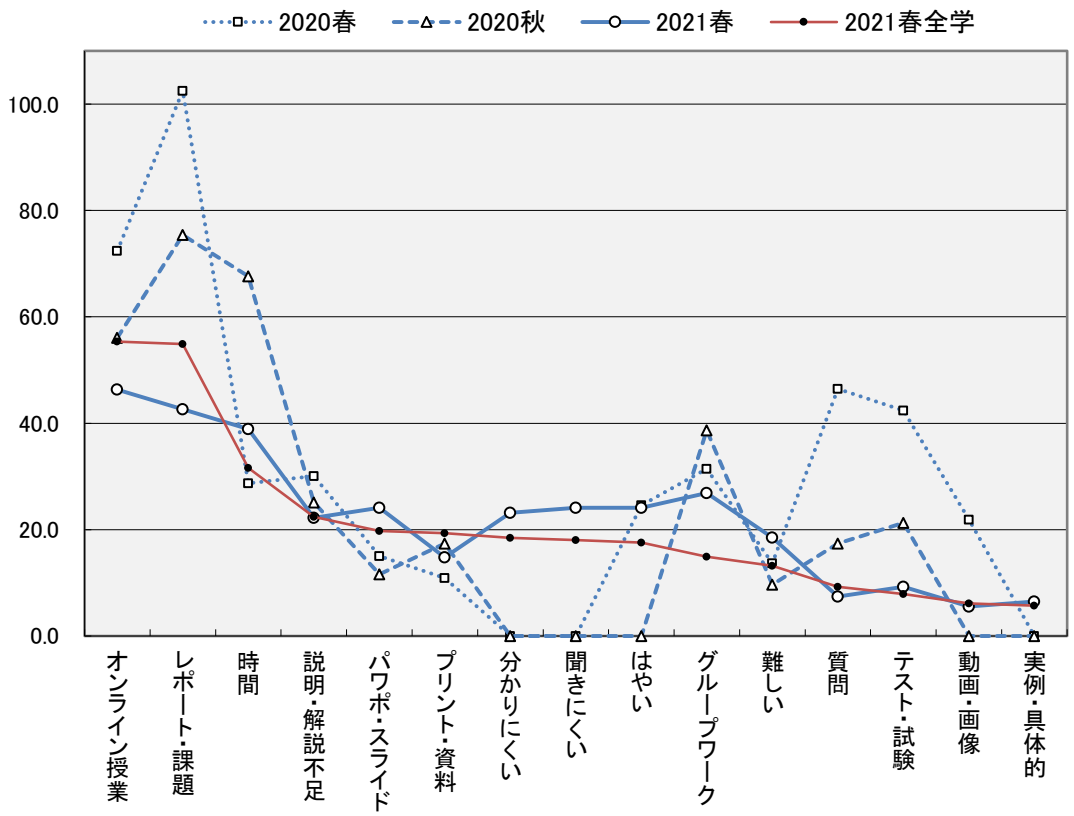
自由記述回答　頻出キーワード　＜改善点＞
【出現率前回比較】 回答人数帯別

《82人～》

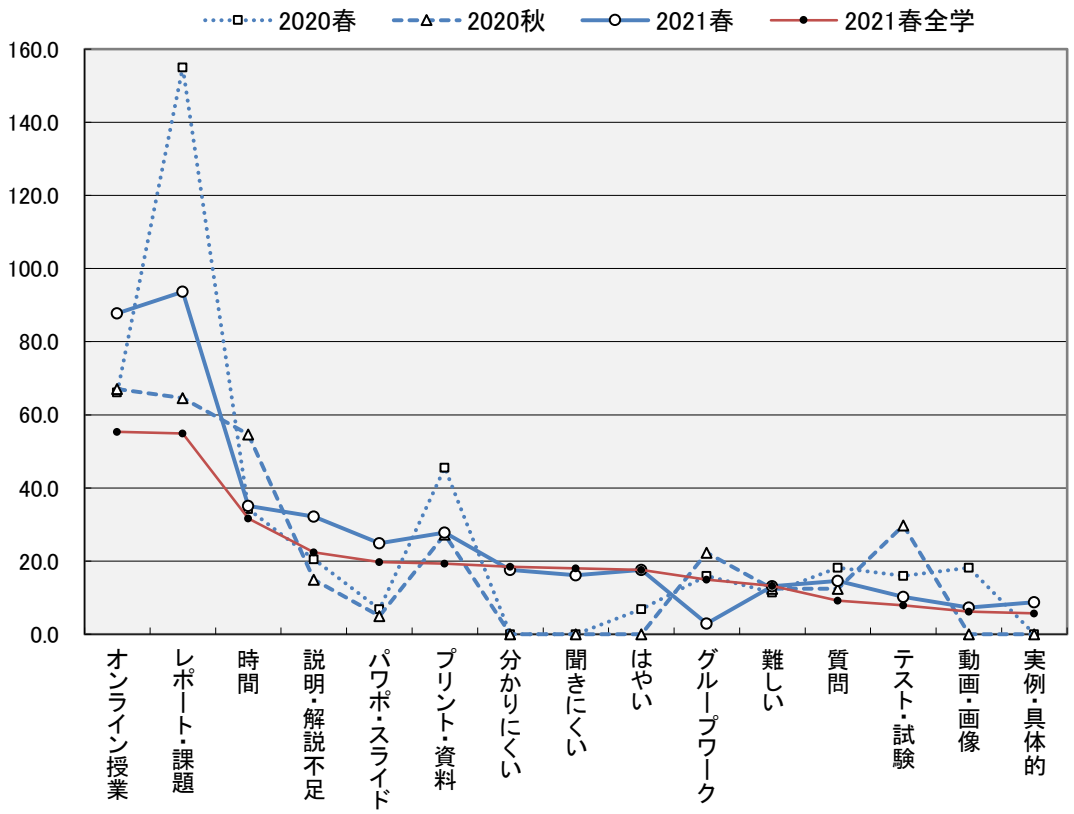


自由記述回答　頻出キーワード　＜改善点＞
【出現率前回比較】 学年別

《1年》

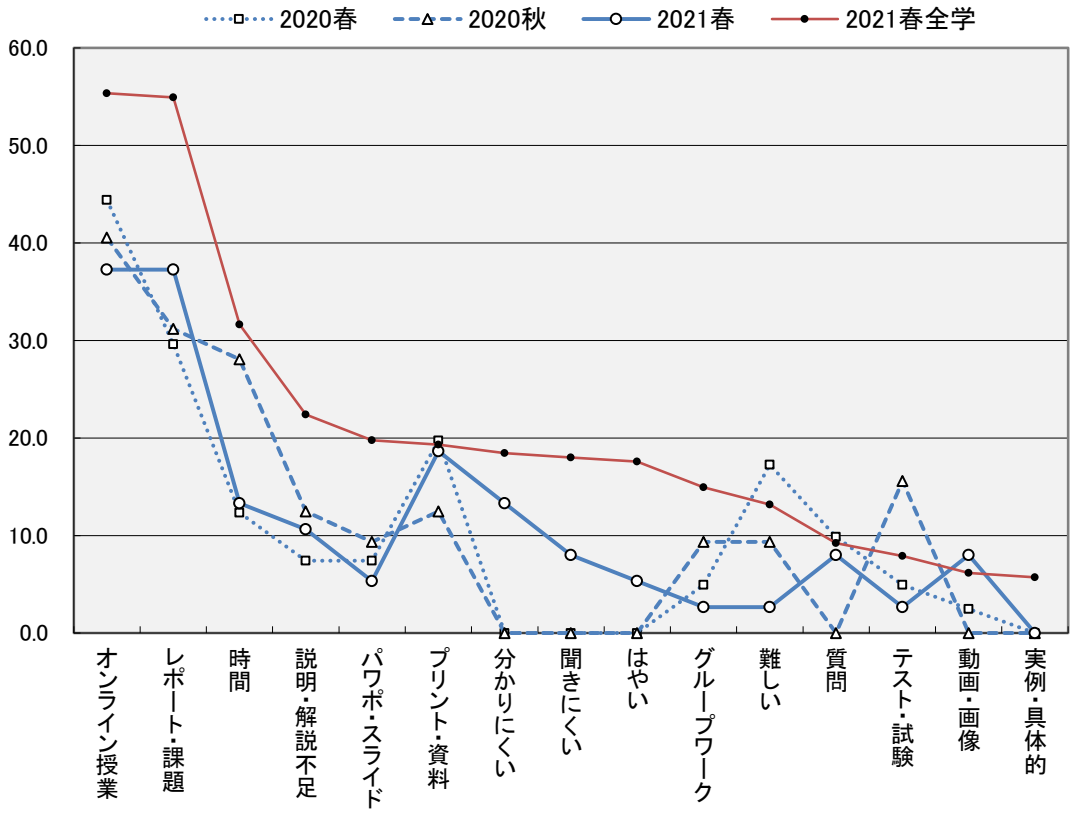
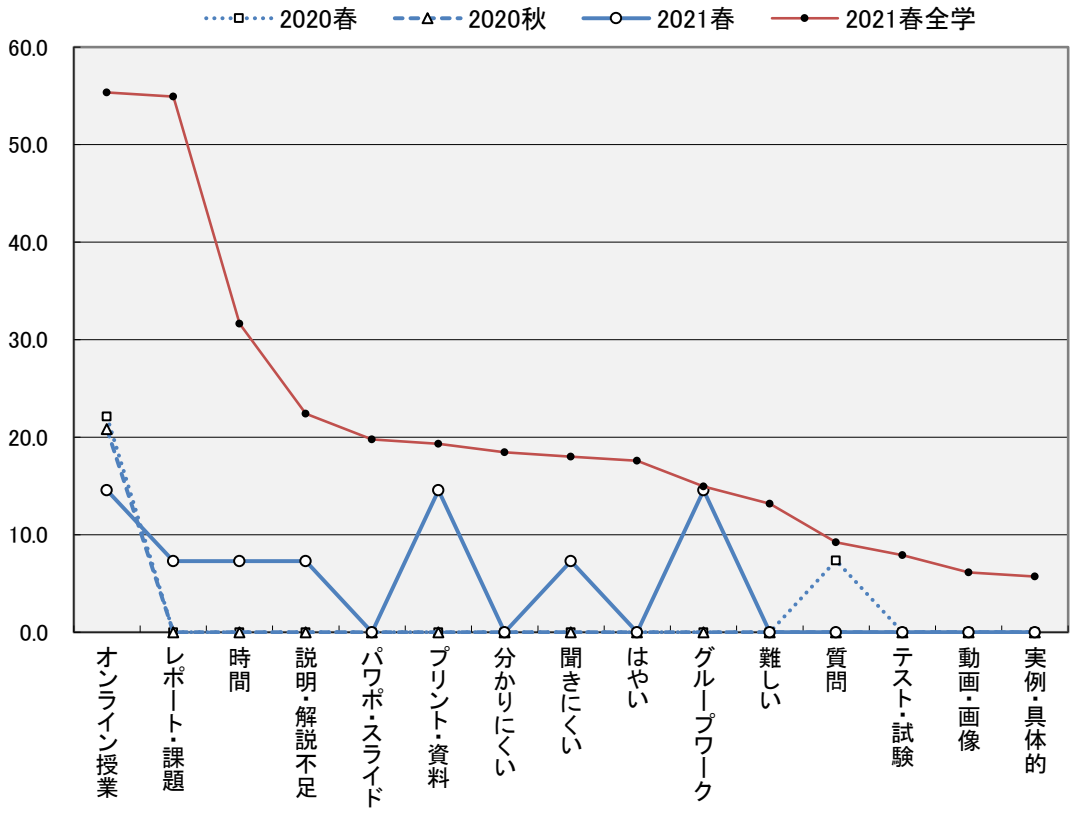


《2年》



自由記述回答　頻出キーワード　＜改善点＞
【出現率前回比較】 学年別

《3年》



《4年》